983
a
84

レスコーフ作

邪恋

»神西 清譯«

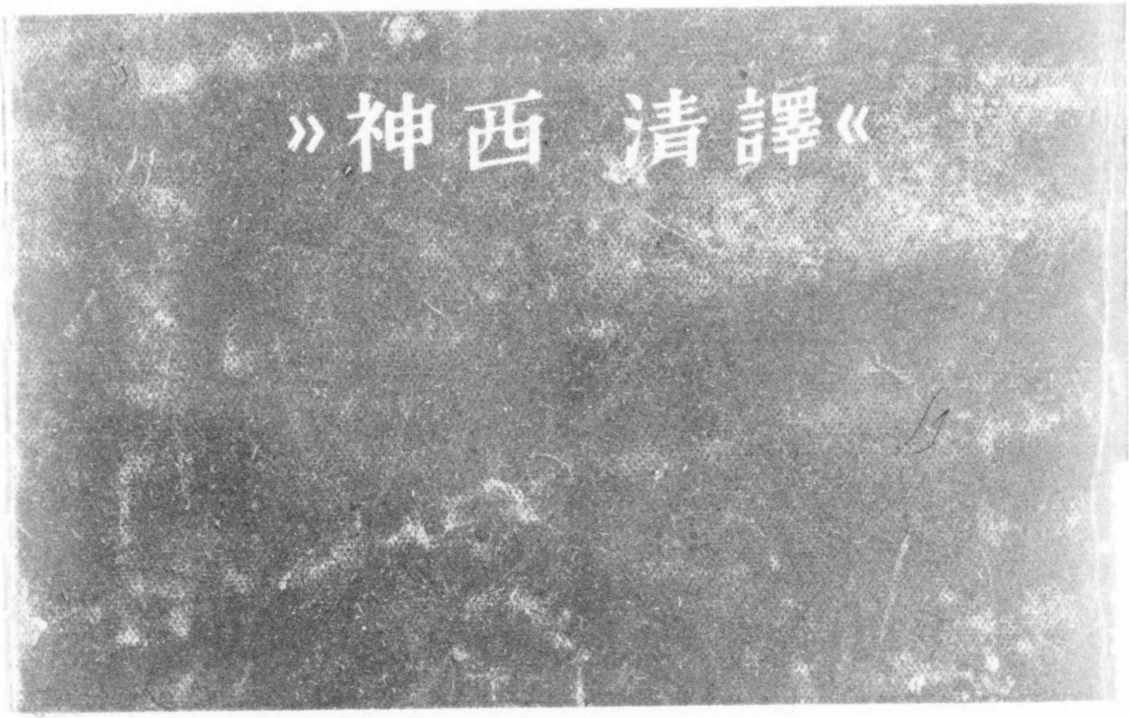
養徳社

始

レスコーフ作

983
84

邪恋



»神西 清譯«

養徳社

レスコーフ作

神西　清譯

邪恋

1949

養徳社

783
84

目次

邪戀……3
——ムツェンスク郡のマクベス夫人——
眞珠の頸飾り……119
かもじの美術家……161
あとがき……215

國立國會
24.5.27
圖書館
20797

邪戀

——ムツェンスク郡のマクベス夫人——

毒くはば皿

——ことわざ——

國立國會圖書館藏書

1

ひよつくり出會つたその時から、たとへ長の年つきが流れたにしても、思ひだすたんびに鳩尾（みぞおち）のへんがドキリとせずにはゐられないやうな——そんな人物に、われわれの地方では時たまお目にかかることがある。商人の妻女のカテリーナ・リヴォーヴナ・イズマイロヴァも、まさしくさうした人物の一人だ。これは、いつぞや怖るべき慘劇をもちあげて、それからこつち土地の貴族連中から、誰やらの減らず口をそのままに、ムツェンスク郡のマクベス夫人と呼びならはされてゐる女である。

カテリーナ・リヴォーヴナは、いはゆる美人ぢやなかつたけれど、見た目の感じのじつにいい女だつた。まだ二十四の誕生日には手のとどかぬ年頃で、小柄ながらも小股のきれあがつた、まるできれいに磨きあげた大理石のやうな頸すぢをした、肩つきのむつちりとまあるい、胸のふくらみのきりりとしまつた、薄手の鼻すぢのよくとほつた、黒い眼のくりくりした、抜け出るやう

に色白な秀でた額つきをした、おまけにもう一つ、漆黒の――いやそれこそ翠の黒髪とでも云ひたいやうな髪の毛をした、――ざつとまあさうした女である。

クールスク縣のトウスカリといふ所から、この土地の商人イズマイロフのところへ貰はれて來たのだつたが、べつにこの男に惚れたわけでもなかつた。ただイズマイロフが貰ひたいと言ふから、よめに來たまでのことで、なにぶん貧乏人の娘であつてみれば、婿がねの選り好みをするわけにも行かなかつたのである。イズマイロフの店といへば、われわれの町でもまづ中どころで、極上のメリケン粉を商なひ、郡部にある大きな製粉所を一つ賃貸しにしてその手に握り、なほその上に郊外にはなかなか實入りのいい果物ばたけもある、市内には立派な貸家の一つもある、といつた身上だつた。商家としてはまづもつて裕福な方である。おまけに家族が至つて小人數で、舅のボリース・チモフェーイチ・イズマイロフはもう八十ちかい老人、だいぶ前からやもめになつてゐる。息子のジノーヴィー・ボリースイチは、つまりカテリーナ・リヴォーヴナの亭主で、これまた五十を越した年配。それに當のカテリーナ・リヴォーヴナと、たつたこの三人だけである。ジノーヴィー・ボリースイチに嫁いでそろそろ五年になるが、カテリーナ・リヴォーヴナには子供がなかつた。ジノーヴィー・ボリースイチも、はじめの細君と二十年ほど連れ添つたあげくに、やもめになつてカテリーナ・リヴォーヴナを

迎へた次第だつたが、やつぱり子供がなかつた。せめて後添ひからでも、屋號と資本の跡をとる子を授かれることだらうと、彼は考へもし期待もしたのだつたが、カテリーナ・リヴォーヴナとのあひだにもやはり、子寶はさづからなかつたのである。

子供のないといふことが、ジノーヴィー・ボリースイチには一方ならぬ惱みの種だつた。いやジノーヴィー・ボリースイチだけではない。ボリース・チモフェーイチ老人にしても、いや當のカテリーナ・リヴォーヴナに至るまでが、口惜しくて口惜しくてならなかつたのである。まづ第一には、高い塀をめぐらし、鎖をはなした番犬どもに守られたこの用心堅固な商人の居城に、明け暮れ日をおくる佗びしさが、ふさぎの蟲をこの商人の若妻の胸にうゑつけたばかりか、時にはそれが狂亂の一歩手前にまで昂じることとも、一度や二度ではなかつたのだ。そんな時、ああ赤ん坊がほしい、ねんねこ唄をうたつてやる赤ん坊がほしい――と思ひつめる彼女の胸のなかは、神樣だつてご存じあるまいといふものである。それにまたもう一つ、『なんだつてわたしは、なんだつてわたしは嫁になんぞ來たんだらう。生まず女のくせに、なんだつて臆面もなく、男一匹の運勢の邪魔だてをしに來たんだらう！』といふ、われとわが身を咎める內心の聲が、二六時ちゆう耳について離れず、ほとほとうんざりしてしまつたのだつた。さながらその聲は、良人にたいしても舅にたいしても、いやそればかりか彼らの曇りない商家の血統にたいしてまで、彼女が何

か犯罪をかしたのだぞと、責めたててゐるやうにひびいた。

何不足ない裕福な身の上だつたとはいへ、舅の家におけるカテリーナ・リヴォーヴナの明け暮れは、世にも辛氣くさいものであつた。よそへお客に行くことも滅多になかつたし、よしんば時たま商人仲間のつきあひで良人と連れだつて馬車に乘つて出かけるにしても、嬉しい氣持は一切しなかつた。世間の目は相變らずきびしく、彼女が椅子にかける物ごしから、部屋へ通る歩きつき、椅子を立つ身ぶりに至るまで、一擧一動細大もらさず見張つてゐる。ところがカテリーナ・リヴォーヴナは、あいにく氣性のはげしい女だつた。おまけに、娘時代を貧乏のうちに送つた彼女は、何ごともざつくばらんにぱつぱとやつてのける癖がついてゐた。言はれれば二つ返事で、すぐさまバケツ兩手に川へ駈けだす。シミズ一枚のあられもない姿で、堤のかげで水浴びもする。木戸ごしにヒマワリの實の殻を、通りすがりの若い衆めがけてぶつけもする。そんな育ちの彼女にとつて、ここは全く別世界だつた。舅と良人は朝はやく床をはなれて、六時にはお茶をたらふく飮んで、すぐさま仕事へ出かけてしまふ。のこる彼女は日がな一日ぽつねんとして、部屋から部屋へうろつき廻つて一人ですごす。どこを見ても小ざつぱりと淸潔だ。どこもかしこもシンとして人つ子ひとりゐはしない。みあかしは聖像の前でちらちらと燃え、家ぢゆうどこにも、生きものの氣配ひとつ、人間の聲ひとつしない。

カテリーナ・リヴォーヴナは、人つ氣のない部屋から部屋へ、さんざ歩きまはつたあげく、退屈のあまりあくびが出て、やがて梯子段をのぼつて夫婦の寢間へあがつて行く。天井の高い、狹い中二階に、ベッドが二つ並べてあるのだ。そこでも暫く腰をおろして、穀倉の前で傭ひ人たちが麻の目方をかけたり、メリケン粉を袋へ入れたりしてゐる有樣を、眺めるともなく眺めてゐるうち、——またしてもあくびの出るのが、彼女には却つて嬉しかつた。これ幸ひとものの小一時間ほど、うとうとと晝寢をして、さて目がさめれば——またしても相も變らぬ退屈さだ。例のロシヤの味氣なさ、商家の晝の辛氣くささで、いつそ首でもくくつた方がましだと、下世話にもいふあれである。カテリーナ・リヴォーヴナは讀書の趣味がなかつたし、それにだいいち本といふしろものが、キーエフ聖者傳一冊のほかには、家ぢゆうどこを搜したつて見つからなかつたのである。

カテリーナ・リヴォーヴナが、裕福な舅の家で、不愛想な良人につれそつて、五年といふ年つきを送つた明け暮れは、ざつと以上のやうなわびしいものだつた。かといつて誰一人、さうした彼女のわびしさに、些かたりとも注意を向ける者のなかつたことも、これまた浮世のならひにはちがひなかつた。

2

カテリーナ・リヴォーヴナが嫁に來て六度目の春のこと、イズマイロフ家の持つてゐる製粉所の堤が決潰した。折も折、まるでわざと狙つたやうに、製粉所は仕事で滿腹のていだつたし、おまけに決潰の個所が案外に大きくて、修理もなかなかはかが行かなかつた。水かさは、空つぽになつた放水溝の土臺をさへ下廻る始末で、その水かさを手つとり早く上げようと色々苦心はしてみたが、いつかな成功しなかつた。ジノーヴィー・ボリースイチは近隣の在所の人手をのこらず製粉所へ驅りだして、自分も夜ひるわかたず現場に附きつきりだつた。町の方の仕事はすつかり老人ひとりで切り盛りすることになつて、カテリーナ・リヴォーヴナは來る日も來る日もなほ一日、獨りぼつちの味氣なさをかこつことになつた。はじめのうち彼女には、良人のゐないのがいささか手持ぶさたに思はれたけれど、やがて結句その方がましなやうな氣がしてきた。ひとりの方が氣樂になつたのである。もともと大して戀しいほどの相手ではなし、おまけに良人が留守なら留守で、とにかくお目付役が一人がた減らうといふものである。

ある日カテリーナ・リヴォーヴナは、例の屋根裏の小窓のそばに陣どつて、これといつて物を考へるでもなく、さかんにあくびを連發してゐたが、やがての果てにあくびをするのが吾ながら

恥かしくなつた。おもてはなんとも云へぬ上天氣だつた。ぽかぽかして、明るくつて、陽氣で、——庭の綠いろに塗つた柵のすきからは、小鳥が嬉々として枝から枝へ樹から樹へ、とび移つてゐるすがたが見てとられた。

『ほんとに、なんだつてまあ、かうあくびばかし出るんだらうねえ?』と、カテリーナ・リヴォーヴナは考へた。——『ええ、いつそ思ひきつて立ちあがつて、中庭をひと歩きしてみるか、それとも庭の方へでも行つてみるとしよう。』

そこでカテリーナ・リヴォーヴナは、花模樣のついた緞子の古外套をひつかけると、おもてへ出ていつた。

そとはさんさんと明るい日ざしで、深ぶかと胸いつぱい良い空氣を吸ひつけた。穀倉の前の差掛のところで、いかにも面白さうな笑ひ聲がしてゐる。

「何がそんなに面白いのさ?」とカテリーナ・リヴォーヴナは、舅の使つてゐる番頭衆に問ひかけた。

「なにしろお內儀さん、ぴんぴん生きた牝豚の目方をはからうつて云ふんでございますよ、はい、エカテリーナ・イリヴォーヴナ」と、年寄りの番頭がいんぎんに答へた。

「牝豚つて、一體なんのことなの?」

「つまりかうでさあ、アクシーニヤといふ牝豚のことなんでさ。やつこさん、めでたく息子のヴァシーリイを出産したのはいいが、おいらを洗禮祝ひに招んでくれなかつたんでねえ」と、悪びれぬ陽氣な調子で、一人の若い衆が説明した。それは鼻つ柱のつよさうな、きれいな顏をした男で、漆のやうに黑ぐろとした渦まき髮と、やつと生えかけたちよび髯が、その顏をふちどつてゐる。

するとその時、秤杆へ吊るさげたメリケン樽のなかから、おさんどんのアクシーニヤの血色のいいハチきれさうな豚づらが、ぬうつとのぞいた。

「ええ、忌々しいよ、のつぺり面の極道者めらが！」と、おさんどんは口汚なく罵りながら、なんとか鐵の杆にとつつかまつて、ぐらぐらする樽から脫け出さうと懸命だつた。

「夕飯前でも結構三十五貫と出たぜ。これで大籠いつぱい干草を平らげようもんなら、分銅の方が足りなくならあ！」と、またもや美男の若い衆が口上を述べて、樽をぐいとかしげざま、片隅に積んであつた叭のうへへ、おさんどんをどさりと拋りだした。

おさんどんは冗談はんぶん惡口雜言をならべながら、みだれた髮や衣裳をつくろひはじめた。

「ねえちよいと、わたしはどのくらゐ掛かるかしら？」とカテリーナ・リヴォーヴナは茶目氣をだして、繩につかまると、ひよいと臺の上へとび乘つた。

「十四貫八百」とおなじ美男の若い衆セルゲイは、分銅を皿へ投げこんで、さう報告すると、

——「へ、呆れたもんだ！」

「何をお前さん呆れたんだい？」

「だつて、おかみさんが十五貫もあるなんてさ、ねえカテリーナ・イリヴォーヴナ。あつしは、かう思ふんですがね、——よしんばまる一んち、おかみさんを兩手で抱つこしてゐろつて言はれたところで、どだいもう苦になるどころか、ただもうぞくぞく嬉しいばかりだらうつてね。」

「ひどいよ、まるでわたしが人間ぢやないみたいにさ、ええ？　そのくせ、いざ抱つこしてみたところが、やつぱしへとへとになつたつてね」と、絕えて久しくそんな輕口を耳にせずにゐたカテリーナ・リヴォーヴナは、ぽつと耳の根を紅らめながら一先づさうやり返したが、と同時にむらむらつと、思ひつきり陽氣な無駄口をたたいてみたい、冗談口の限りをつくしてみたいと、そんな慾望が湧いたのである。

「とんでもねえ！　この世の極樂だといふアラビヤくんだりまでだつて、立派に抱いて行つてお目にかけまさあ」とセルゲイは、こつちも負けず言ひ返した。

「お前さんの考へは、なあ若えの、どうやらまつとうぢやねえぜ」と、粉を袋へ移してゐた小百姓が言つた、——「おいらにさ、なんの目方がかかるもんかね？　目方のかかるのは、第一おいら

の肉體かよ？　おいらのからだはな、なあ若えの、秤にかけりや一匁だつて掛かることぢやねえ。腕つぷしだよ、目方がかかるなあ、俺らの腕つぷしだよ――からだなんぞぢやねえ！」

「さう言や、わたしも娘のころは、これでもとても腕つぷしが強かつたものよ」と、またしても自分を制しきれなくなつたカテリーナ・リヴォーヴナが言つた。――「男にだつてめつたに負けなかつたほどだわ。」

「へえ、さういふことなら一つ、お手をちよいと拜借と行きやせうかね」と、美男の若い衆が言つた。

カテリーナ・リヴォーヴナはちよつとたじろいだが、とどのつまり手を差しだした。

「だめよ、指環をとらなくちや、痛いぢやないの！」と、セルゲイが力まかせに彼女の手を握りしめたとき、カテリーナ・リヴォーヴナは悲鳴をあげて、あいてゐる方の手で男の胸へお突きを喰らはせた。

若者はお內儀の手をはなすと、お突きを喰らつたはずみで、たじたじと二あしほど横つ飛びにすつ飛んだ。

「そら見たことかい、それでやつとお前さんにも、女の底力がわかつたといふもんさ！」と、例の小百姓が頓狂な聲をあげた。

「いんや、なかなかさうでねえ。今度はひとつ、組打ちと行きやせう」とセルゲイは、渦まき髪をさつと後ろへさばきながら、眞向からいどみかかつた。

「いいともさ、さあ掛かつておいでな」と、つい面白くなつたカテリーナ・リヴォーヴナは答へて、兩の肘をもちあげた。

セルゲイは若いお內儀に組みつくと、相手のむつちりと盛りあがつた胸を、じぶんの赤いルバーシカへ押しつけた。カテリーナ・リヴォーヴナは、わづかに兩肩を一搖りゆすり上げようとしたばかりで、セルゲイにまんまと床から釣りあげられ、暫くはそのまま兩手でぎゆつと抱きしめられたあげく、引つり返しの枡の上にふわりとおろされた。

カテリーナ・リヴォーヴナは、得意の腕つぷしを使はうにも、そのひまが結局なかつたのだ。赤いどころか、それこそ眞赤になつた彼女は、そのまま枡に腰かけて、肩からずれ落ちた外套を引きつくらふと、そつと穀倉から出ていつた。いつぱうセルゲイは、威勢のいい咳拂ひを一つして、かう呼ばはつたのである。――

「やいみんな、この間抜野郎め！　ぼかんとしてずに、さつさと粉を入れるんだ、うつかり量り込まずにな。塵もつもれば山となる、つて言はあ。」

今しがたの事なんか、けろりと忘れたやうな顏だつた。

「あれで中々の女たらしなんでございますよ、あのセリョーシカのやつ！」と、よちよちカテリーナ・リヴォーヴナの後ろからついて行きながら、おさんどんのアクシーニヤは説明するのだつた。「あの騙兒め、上背といひ、お面といひ、男つぷりといひ、――ちよいと水際だつてをりますからねえ。この女と見當をつけるが早いか、あの極道者、あつといふ間にもう蕩しこんで、ものにして、果ては身をあやまらせてしまふんですよ。おまけにもう、根が大の浮氣もんでしてね、移り氣も移り氣、――昨日は東、今日は西つて調子なんでございますよ！」

「でどうなの、アクシーニヤ……あの……」と、彼女の前に立つて歩きながら、若いおかみさんが言つた、――「お前さんの子は生きてるかい？」

「生きとりますよ、おかみさん、生きとりますよ――どうして中々！　憎まれつ子、世にはばかるつて、この事でございますよ。」

「いつたい誰の胤なのさ？」

「いえなに！　つまりまあ、父なし兒でございますよ――かうして大勢の男衆にまじつてゐますもんで――父なし兒でございますよ。」

「うちへ來てから長いのかい、あの若い衆？」

「誰でございます？　あのセルゲイのことでございますか？」

「さう。」

「おつつけ一月になりませう。それまでは、コンチョーノフさんの店にをりましたが、旦那に追んだされたんでございますよ。」――と、そこでアクシーニヤは聲をおとして、かう言ひ添へた、――「世間の噂ぢや、なんでも當のおかみさんと、出來あつてゐたとやら申しますよ。……いやはやもう、とんだ極道もんでございますよ、大それた奴でございますよ。」

3

なまぬるい、牛乳のやうな薄ら明りが、町の上にかかつてゐた。ジノーヴィー・ボリースィチは、まだ堤防工事から歸つてこなかつた。舅のボリース・チモフェーイチも留守だつた。古い友達のところへ、名の日の祝ひに招ばれていつて、夜食は待たずに濟ましてくれと言ひ殘したのである。カテリーナ・リヴォーヴナは退屈まぎれに、早目に夕飯をすますと、例の屋根裏の小窓を押しひらき、窓の柱によりかかつたまま、ヒマワリの種子を噛んでゐた。店の者たちは臺所で夜食をすますと、寢場所をもとめて中庭を思ひ思ひに散つていつた。車小屋の軒さきを借りる者もある、穀倉をめざす者もある、香ばしい干草置場へよぢ登つていく者もある。一ばん後から臺所

を出てきたのはセルゲイだつた。彼はしばらく中庭をぶらついてから、番犬の鎖を順ぐりに解いてやり、ややしばし口笛を吹いてゐたが、やがてカテリーナ・リヴォーヴナの窓の下にさしかかると、ひよいと彼女の方をふり仰いで、丁寧にお辞儀をした。

「今晩は」と、小聲でカテリーナ・リヴォーヴナは、屋根裏から聲をかけたが、それなり中庭は、まるで無人境のやうにひつそりしてしまつた。

「奥さん！」——ものの二分もしたかと思ふとき、掛金のかかつたカテリーナ・リヴォーヴナの部屋の戸の向ふで、誰やら言つた者がある。

「だれ？」——思はずぎよつとして、カテリーナ・リヴォーヴナはきいた。

「いや、怪しいもんぢやありません。わつしです、セルゲイです」と、番頭が答へた。

「何か用なの、セルゲイ？」

「ちよいとお耳を拝借したいことがあるんです、カテリーナ・イリヴォーヴナ。なあに、ほんのつまらない事なんですが、ちよいとそのお願ひの筋があるもんでして。ほんの一分ほど、お目通りをねがへませんか。」

カテリーナ・リヴォーヴナは掛金をはづして、セルゲイを入れてやつた。

「なんなのさ？」と彼女はきいて、そのまま小窓の方へ離れていつた。

「じつはその、カテリーナ・イリヴォーヴナ、お願ひといふのは、何かちよいと讀むやうな本が、お手もとにないでせうか。退屈で淋しくつて、まつたくやりきれないんで。」

「わたしんとこにや、セルゲイ、あいにく本なんか一冊もないよ。わたしが第一、讀まないもんでね」と、カテリーナ・リヴォーヴナは答へた。

「じつさい淋しいんでねえ」と、セルゲイは訴へるやうに言ふ。

「何がさう淋しいんだい！」

「まあ察しておくんなさい、どうして淋しがらずにゐられませう。ご覽のとほり若い身ぞらで さ、しかもここの暮らしと來た日にや、どつか修道院か何かにぶち込まれたも同然ぢやありませんか。おまけに身の行く先でわかつてゐることと云つたら、いづれお墓の下で横になるその日まで、どうやらかうして話相手もない境涯のままで、一生を棒にふることになるらしい——といふことだけですしねえ。時にや自棄つぱちにもなりますよ。」

「どうして嫁さんを貰はないのさ？」

「嫁をもらふなんて、奥さん、さう易々と言へるこつてすかね？　一たい誰が嫁に來てくれるといふんです？　まさか旦那のお嬢さんが來てくれるはずもなし、さうかと云つて、何せ金がないもんであつしども仲間と來た日にやみんな、ねえカテリー

ナ・イリヴォーヴナ、奥さんも先刻ご存じのとほり、無教育ものばかりでさあ。さうした家の娘つ子に、ほんとの愛といふもの辨へろと言つたところで、どだい無理といふもんぢやありませんか！　どうです奥さん、これであの連中とお金持との間には、どれほど物の考へやうに隔たりがあるかといふことが、お分りでせうな。早い話が現にあなただつても、かう申しちやなんですが、じぶんの氣持を分つてくれる人間であつてくれさへすりや、たとへそれがどこのどいつであらうとも、ただもうその男一人に身も心もささげて、明け暮れ慰めもし勵ましもしてやらうものをと、そんな氣持でいらつしやるに違ひないんだ。ところがどうです、實際はかうしてこの家で、籠の鳥みたいに圍はれてらつしやるぢやありませんか。」

「さう、あたしだつて淋しいわ」と、カテリーナ・リヴォーヴナは思はず口をすべらした。

「まつたくこんな暮らしぢや、奥さん、淋しがるなつて言はれたつて淋しがらずにやゐられませんよ！　これぢやたとひ、よく世間の奥さんがたがなさるやうに、よしんばほかに誰かいい人があつたにしたところで、一目逢ふことだつて出來やしませんものねえ。」

「え、なんだつて？……そんなことぢやないわ。あたしの言ふのはね、ただこれで赤さんが出來さへすりや、それだけでもう氣が晴ればれするだらうと思ふのさ。」

「ですけどね奥さん、こいだけは申し上げときますがね、赤ちやんが出來るにしたつて、たのほほんとしてたつて駄目なんで、やつぱし何か種がなくちや始まりません。ねえ奥さん、かうしてもう長の年つき旦那がたのとこで暮らして、商家のお内儀といふものの明け暮れがどんなものかといふことも、さんざん見あきるくらゐ見てきてゐながら、それでもやつぱしお互ひ何か胸に思ひあたることはないもんでせうかねえ？　こんな唄がありましたつけ――『心の友がないままに、ふさぎの蟲にとり憑かれ』つてね。ところで奥さん、このふさぎの蟲つていふ奴が、かう申しちやなんですが、ねえカテリーナ・イリヴォーヴナ、じつはほかならぬこのあつしの胸にしたたかこたへましてね、いつそもうあつしは、七首でもつてぐさりとこの胸からそいつを切りとつて、ひと思ひにあんたのそのおみ足へ、叩きつけてやりたいと思ふほどなんです。さうしたらもうその途端に、百層倍もこの胸のなかが輕くなることでせうにねえ……」

セルゲイの聲はわななきはじめた。

「何さ、そのお前さんの胸のなかだの何だのつていふのは一體？　あたしにやそんなこと、面白くも痒くもありやしないよ。もういいから、さつさとあつちへおいでな……」

「いいえ、お願ひです、奥さん」とセルゲイは總身をわなわなと震はせながら、カテリーナ・リヴォーヴナの方へ一あし踏み出しながら言つた。――「あつしは知つてゐます、この眼で見てゐます、いやそれどころか、はつきりこの胸に感じもし、しみじみお察しもしてゐるんです――

あんたの境涯も、あつしに劣らず辛いものだといふことをね。ね、いいですか、今こそ」と彼は、全くかすれきつたせいせい聲で、——「今こそ、成るも成らぬも、萬事あんたの手の振りやう一つなんですぜ、あんたの首の振りやう一つなんですぜ。」

「何を言ひだすんだい？　なにをさ？　一たい何しに來たといふの？　あたし、窓から身を投げるわよ」——とカテリーナ・リヴォーヴナは、名狀すべからざる恐怖の、むかつくやうな厭らしい魔力が、ぐいぐい上から伸しかかつてくるのを感じながら、さう言ひ放つと、さつと窓かまちに片手をかけた。

「おっとどつこい、お前さんのその命はな、おいらにとつちや掛替へのねえ代物なんだぜ！　なんで身投げなんかするんだい？」と、馴れ馴しい口調でセルゲイはささやくと、若いお內儀を窓から引つぱなして、ぎゆっと彼女を抱きしめた。

「あっ！　あっ！　放して」と、小聲でカテリーナ・リヴォーヴナはうめくのだつたが、雨とふるセルゲイの燃えるやうな接吻のもとにだんだん氣力が失せて、われにもあらず男のがつしりしたからだに、ひしと身を寄せかけるのだつた。

セルゲイはおかみさんを、まるで赤ん坊のやうに輕々と兩手でもちあげると、小暗い片隅へはこんでいつた。

部屋には沈默がおとづれた。わづかにそれをみだすものといつたら、カテリーナ・リヴォーヴナの寢臺の枕もとに掛けてある良人の懷中時計が、律義に秒をきざむ音だけだつた。だがこれも、べつだん邪魔にはならなかつた。

「もうお歸りな」と、半時間ほどしてからカテリーナ・リヴォーヴナは、セルゲイの顏は見ずに、小鏡の前で自分の髮のみだれを直しながら言つた。

「へえ、なんだつて今じぶん、こつから出ていけるもんかね」と、さも色男然とした聲で、セルゲイが言ひ返した。

「舅さんが戸をすつかり閉めちまふわよ。」

「いやどうもお前さん、可愛いらしいことを言ふもんだねえ！　一たいその年まで、どこのお大名とばかりつきあつて、女のところへ通ふ道はただもう戸口しきやないなんていふ、お上品なものの考へ方をするんだい？　おいらなんざ、お前さんとこへ來るにしろ歸るにしろ、どこにだつて戸口はあらあな」——と若者は答へて、差掛を支へてゐる柱を、ずうつと一わたり指さしてみせた。

4

ジノーヴィー・ボリースィチは、それからまだ一週間ほど家をあけてゐたので、そのあひだぢゆうお内儀さんは、夜ともなればすつかり明けはなれる時刻まで、セルゲイと乳くりあつてゐた。

その夜ごとに、ジノーヴィー・ボリースィチの寝間では、舅さんの穴倉からこつそり持ちだした酒も飲み放題なら、舌のとろけさうな甘いものも食べ放題、おかみさんのまるでお砂糖みたいな口にはキスし放題、——ふかふかした枕のうへには渦をまくみどりの黒髪がみだれ放題、といふ體たらくだつた。だがしかし、道はかならずしも常に坦々たる街道ばかりとは限らない。川どめもあれば崖くづれもある。

ある夜ボリース・チモフェーイチは寝そびれてしまつた。そこで老人は、まだら染めの更紗のルバーシカ姿で、森閑とした家のなかを、あてもなくうろついた。窓へ寄つて外をながめる。また次の窓へ寄つてみる。そのうち、ふと見ると、嫁女の部屋の窓の下を柱づたひに、こつそりあたりを憚かりながら、若い衆セルゲイの赤シャツがおりてくる。さてこそ珍事！　ボリース・チモフェーイチはおもてへ躍りだしざま、若い衆の兩足をしつかと捉まへた。相手はくるりと振り

むいて、力まかせ横びんたを喰らはさうと身がまへたが、荒だてては事面倒と思ひかへした。

「きりきり白状するんだ」と、ボリース・チモフェーイチは言つた、「てめえ、どこへ行つてきくさつた、ここな大ぬすつとめが？」

「どこさ行つてきようが來まいが」と、セルゲイはいけしやあしやあと、「旦那、あつしはもうそこに居やしませんや、ねえボリース・チモフェーイチ」と切つて返す。

「嫁女のところに泊りをつたのか？」

「さあねえ、旦那。泊つた場所なら、それもあつしは確かに知つちやをりますがね。ところで、これは念のため申しあげときますがね、ボリース・チモフェーイチ、いいですかい——一たん引つくら返つた水は、元へ戻りやしませんとさ。まあ一つ、先祖代々のノレンに疵のつかないやうに、せいぜい御用心を願ひやすぜ。さてそこで、あつしをどうなさるおつもりかね？　どうしたらおなかの虫が收まるんですかい？」

「ええ、この毒へびめが、鞭を五百もくらはせてやらうわい」とボリース・チモフェーイチ。

「こつちの落度だ——どうなりと存分に願ひやせう」と、若者はあつさり折れて出て、「さあ、どこへなりとお伴しますぜ。そして好きなだけあつしの血をすすりなさるがいいさ。」

ボリース・チモフェーイチは、セルゲイを自分の小さな石倉へ引つぱつていつて、革むちでも

つて、自分がへとへとになるまで打ちすゑた。セルゲイは呻きごゑ一つ立てなかつたが、その代り自分のルバーシカの片袖を半分ほど、歯でぼろぼろに咬みしだいてしまつた。

ずく鐵みたいに眞つ赤に腫れあがつた背中が、なんとか元どほりに直るまでのあひだ、ボリース・チモフェーイチはセルゲイを石倉に放つたらかしておいた。素焼きの壺に水をちよつぴり入れて當てがひ、大きな錠前をがちやりとおろすと、すぐさま息子を迎へに人を出した。

ところが昔ながらのわがロシヤの國では、村道づたひに二十五里も馬車を走らせるとなると、けふ日だつてさう手つとり早くはいかない。でカテリーナ・リヴォーヴナは、セルゲイなしでは最早これ以上一刻のがまんもならないところまで來てしまつた。彼女のうちなる女性は、一たん目ざめたとなると忽ち一人前に伸び育つてしまひ、身も世もあらぬその思ひつめやうは、いくらわが身のこととはいへ、たうてい宥めもすかしもできる段ではなかつたのだ。彼女はセルゲイの居場所を嗅ぎつけると、鐵の扉ごしに男とことばをかはし、すぐその足で鍵をさがしにかかつた。それもいきなり、『おとつつあん、セルゲイをゆるしてやつて』と、舅にぶつかつて行つたものである。

聞くなり老人は、唇までまつ青になつてしまつた。よしんば道ならぬことを今度しでかしたとはいへ、それまで永の月日を從順な嫁女であつた女が、よもやそんなあられもない鐵面皮さを發

揮しようとは、思ひもよらないことだつたのだ。

「よくもいけ圖々しく、そんなことが言へたもんだな」と、彼はカテリーナ・リヴォーヴナを面罵しはじめた。

「ゆるしてやつて」と、こちらはいつかなひるまずに、良心にかけて、これだけは誓ひます、——わたしたちの間には、うしろ暗いことはまだこれつぽつちもなかつたんです。」

「うしろ暗いことは」と老人、「なかつただと!——さういふ舌のさきから、ぎりぎり齒がみをしよるわい。——ぢやあ一つお尋ね申すが、いつたいお前たちは毎晩々々、あすこで何をしてゐたといふんだ? 亭主の枕の詰物を、打ち直しでもしてやつてたのかい?」

だがこつちは、ゆるしてやつて、ゆるしてやつて、の一點ばりだつた。

「よおし、さういふことなら」と、ボリース・チモフェーイチは言つた、——「かうしようぢやないか。おつつけ亭主が歸つて來ようが、その上でわしら二人の四本の手でもつて、お前さんといふ天晴れ貞女を、馬小屋で思ひつきり叩きすゑさせて貰はうぢやないか。一方あつちのやくざ野郎は、あすにも早速、牢へ送りつけるとしようて。」

さうボリース・チモフェーイチは、一應ほぞを固めたのだつたが、ただその決心は、殘念ながら向ふからはづれた。

ボリース・チモフェーイチは夜の床に就くまへの腹ふさげに、松露をオートミールにあしらつてすこし食べたが、ほどなく胸やけがして來た。と思ふと急に、みぞおちのへんに差しこみが來て、はげしい吐瀉がそれにつづき、明けがた近く死んでしまつた。老人の穀倉にはかねがね鼠が出るので、カテリーナ・リヴォーヴナは或る危險な白い粉末の保管をゆだねられてゐて、手づから特別の御馳走をこしらへる役目だつたが、まさにその鼠と寸分たがはず、ころりと老人は死んでしまつたのである。

カテリーナ・リヴォーヴナは、大事なセルゲイを老人の石倉からたすけ出すと、まんまと人目にかからずに亭主のベッドに寢かせつけ、舅のふるつた鞭の傷手を、ゆるゆる靜養させることになつた。いつぱう舅のボリース・チモフェーイチは、鵜の毛ほどの疑念すら生むことなしに、キリスト敎の掟にしたがつて埋葬された。いかにも不思議なことだが、ふつと煙のきざしを嗅いだ人さへ、誰一人なかつたのである。ボリース・チモフェーイチは死んだ、まさしく松露を食つて死んだ、松露にあたつて死ぬ人は世間にやざらにある——といふわけだ。おまけにボリース・チ

モフェーイチの埋葬は、息子の歸宅さへも待たずに、さつさと執行されてしまつた。といふのは、何しろ暑氣のはげしい時候だつたし、息子のジノーヴィー・ボリースイチは、使ひの者が行つてみると製粉所にはゐなかつた。なんでも、もう二十五里ほど先へいつた土地に、格安な森の賣物が出たのを聞きつけたとかで、その檢分に出かけたときては分つてゐたが、誰にも行先を言ひのこして置かなかつたのである。

そんな風に埋葬の片をつけてしまふと、カテリーナ・リヴォーヴナは、まるでもう見違へるやうな氣性の烈しい女になつてしまつた。それまでだつて、ただの內氣な女ではなかつたのだが、今度といふ今度はもう、一たい何をやりだす氣なのやら、はたの者にはてんから見當もつかぬ始末だつた。まるでカルタの切札みたいにのさばり返つて、店のことから內證向きのことまで萬事はんたん采配をふるふ一方では、セルゲイは相かはらず一刻もおそばから離さない。雇ひ人たちもさすがに、これはをかしいぞとそろそろ感づきはじめたが、その都度カテリナー・リヴォーヴナからたんまり目潰しの料をくらはされて、たちまち疑念も何もかき消えてしまふのだつた。——『いや讀めたわい』と、雇ひ人たちは推量したものである、『戀の闇路にふみ迷ひ、てなところだな。おかみさん、セルゲイとてつきりアレなんだが、まあそいだけのことさ。——なにもこちらの知つたことぢやなし、因果はやがて、おかみさんの身に報いようといふものさ。』

さうかうするうちにセルゲイは全快して、しやつきりしやんと立ち直り、また元どほりの水も滴たらんばかりの若い衆ぶり——いや、いつそ手飼ひの鷹とでも云ひたいほどの英姿を、カテリーナ・リヴォーヴナの身邊にあらはしはじめて、またもや二人のあひだには愛慾ざんまいの日ごと夜ごとが再開したのだつた。とはいへ、時はなにもこの二人のためにばかり、めぐつてゐたのではない。長らく家を留守にしてゐたまに、顔に泥をぬられた良人ジノーヴィー・ボリースィチも、このとき歸宅の道をいそいでゐたのである。

6

ひる飯のすんだあとは、燒けつくやうな炎暑だつた。おまけに、すばしこい蠅がところ嫌はず張りついて、精根つきるばかりに煩さかつた。

カテリーナ・リヴォーヴナは、寢間の窓の鎧戸をおろしただけでは氣がすまず、そのうへ窓の內側に分厚な毛織りのショールを垂れ掛けて、食後の午睡をとるため、ちよつとした丘ほどの高さは優にありさうな商人のベッドに、セルゲイと共臥しに横たはつた。横になつてはみたものの、カテリーナ・リヴォーヴナは、うとうとしかけては、またはつと目がさめるといつた調子で、夢ともうつつともさつぱり區切りがつかない。ただもう暑苦しくつてたまらず、顏ぢゆう玉なす汗でべつとりの有樣、それにつく息までが、燃えつきさうな息ぐるしさだつた。もうそろそろ目をさましていい時分だ——と、カテリーナ・リヴォーヴナは心のなかで感じてゐる。庭に出ていつて、お茶を飮む時刻だ——とは分つてゐながら、いつかな起きあがる氣持になれない。とうとう仕舞ひに、おさんどんが上つてきて、ドアをとんとん叩いて、『サモヴァルが、林檎の木のしたで、そろそろ燼になりますですよ』と催促する始末だつた。カテリーナ・リヴォーヴナは、むりやりに上半身をぐるりと寢返らせると、すぐその手で猫をくすぐりはじめた。その猫といふのは、おかみさんとセルゲイの間にのうのうと丸まつてゐたのだが、見るからに立派な、灰色の、大柄でむくむくと肥えふとつた奴で、おまけにそのぴんとおつ立つた髭ときたら、小作料を取り立てに歩く管理人にそつくりだつた。

カテリーナ・リヴォーヴナが、猫のふかふかした毛並みに指をさし入れて、もぞつかせはじめると、相手はただもう無性に鼻づらをすり寄せてくるのだつた。もつさりと氣の利かない髭面を、むつちりした胸のふくらみへ押しこんできながら、何やら小聲で鼻唄をうたひだす樣子は、その唄がやがて戀のささやきでもあるかのやうだつた。——『おや、ぜんたいなんだつて、こんな猫がはいつて來たんだらう?』とカテリーナ・リヴォーヴナは考へる、——『凝乳をあたし、あ

の窓わくのところに載つけといたつけが、てつきりこの野良猫め、あれを狙つてゐるんだわ。よおし、追ひだしちまはう』と、彼女は思ひさだめて、その猫をつかまへて拋りださうとしたが、とたんに相手はまるで霞みたいにするりと指のあひだをすり抜けてしまふのだつた。——『それにしても一たいどこから、この猫の奴はいり込んだんだらう?』と、惡夢のなかでカテリーナ・リヴォーヴナは思案をつづける、——『あたしたちの寢室には、ついぞ猫なんかゐたためしはなかつたのにさ。よりによつてえゝ畜生、とんだどら猫が舞ひこんだものだよ!』さう思つて、またも片手で猫をつかまへようとするが、ふたたび相手は影も形もない。——『おや、これは一たい何ごとだらう? 冗談ぢやないよ、あいつ一たい猫かしら?』と、カテリーナ・リヴォーヴナは、ふとさう思つた途端に、ぞおッと總毛だたんばかりの恐怖が身うちを突つぱしつて、夢魔も睡魔も一ぺんに消しとんでしまつた。カテリーナ・リヴォーヴナは、ぐるりと部屋のなかを見まはした。——猫なんぞゐはしなかつた。美男のセルゲイが寢てゐて、その逞ましい片手でもつて彼女の胸を、じぶんの火照つた顏へ押しつけてゐるだけである。

カテリーナ・リヴォーヴナは起きあがると、寢床に横坐りになつて、セルゲイを接吻ぜめにした、愛撫ぜめにした。やがて、もみくちやになつた羽ぶとんの皺を直すと、ひとりで庭へお茶をのみに下りていつた。太陽はもうすつかり傾いてゐて、かつかと熱しきつた大地には、えもいはれぬ蕩かすやうな暮色が、やうやく垂れこめようとしてゐた。

「寢坊しちやつたわねえ」と、カテリーナ・リヴォーヴナは、アクシーニヤに話しかけて、花ざかりの林檎の木の下に敷かれた毛氈に坐りこみ、お茶をのみにかかつた。——「けどねえ、アクシニューシカ、妙なことがあればあるもんだよ」と、彼女は手づから小皿を茶ぶきんで拭き清めながら、おさんどんにそれとなく鎌をかけてみた。

「なんですかね、おかみさん?」

「それがね、どうやら夢らしくもないんだけどね、とにかくかうありありと、どこかの猫が一匹、あたしの寢床へちやんともぐりこんで來たのさ。」

「あら嫌ですよ、おかみさん、まさか?」

「ほんとにさ、猫がもぐりこんで來たんだよ。」

さう言つてカテリーナ・リヴォーヴナは、その猫のもぐり込んでゐた次第を話して聞かせた。

「でもおかみさん、なんだつてそんな猫なんぞを、可愛がつてやんなすつたんですね?」

「うん、つまり、そのことさ! どうして撫でてやる氣になつたものか、われながら合點がいかないんだよ。」

「妙ですねえ、ほんとに!」と、おさんどんは感嘆した。

「當のあたしだつて、考へれば考へるほど不思議でならないんだよ。」
「てつきりそりやあ、誰かがかう、そのうちひよつくりやつて來るといふお告げか、さもなければりや、何か思ひがけないことでもある、といふ前兆かもしれませんねえ。」
「つて言ふと、つまり何だらうね?」
「さあ、つまりこれこれと云ふことになると、そりやおかみさん、誰にだつてはつきりとは申し上げられますまいけれどね、それはまあさうとして、きつと何かありますよ。」
「それまではずつと、お月さまの夢を見てゐたんだがね、それから猫が出て來たのさ」と、カテリーナ・リヴォーヴナは先をつづけた。
「お月さんなら——赤ちやんでございますよ。」
カテリーナ・リヴォーナは頰を紅らめた。
「セルゲイもここへ呼んで、相伴をさしておやんなさいますかね?」と、そろそろ心得顏でせり出しさうな氣合を十分に見せながら、アクシーニヤはお內儀さんの氣を引いてみた。
「ええ、いいわ」と、カテリーナ・リヴォーヴナは應じた、——「なるほど、さうだつたわね。ちよつと迎へに行つてきておくれ、お茶を御馳走してあげるからつて。」
「それそれ、わたしもさう思つてをりましたんですよ、——ここへ呼んでやらうとね」とア

クシーニヤは釘をさして、よちよち家鴨のやうに庭木戸の方へ歩み去つた。
カテリーナ・リヴォーヴナは、セルゲイにも猫の話をして聞かせた。
「なあに、氣の迷ひさ」と、セルゲイは片づけた。
「でもさ、氣の迷ひなら迷ひでいいけど、なぜそれが、今までついぞなかつたんだらうね、ねえ、セリョージャ?」
「今までなかつたことなんぞ、ざらにあらあな! 現に見ねえ、ついこのあひだまでは、おいらは只お前さんを遠目に拜むだけでさ、人しれず胸を焦がすのが落ちだつたもんだが、今ぢやどうだい! お前さんのむつちりと白いからだは、まるまるみんな俺らのもんぢやないか。」
セルゲイは輕がるとカテリーナ・リヴォーヴナを抱きあげると、宙でぐるぐるぶん廻しにして、冗談はんぶん彼女をふつくらした毛氈の上へ投げだした。
「ふうつ、目がまはるぢやないの」と、カテリーナ・リヴォーヴナは勢ひこんで、——「ねえセリョージャ! こつちへおいでな。ずつとそばへ寄つてお坐りよ」と、長々と伸ばした身の曲線を惜しげもなく男の眼にさらしながら、甘えた口調で呼びかけた。
若者は身をかがめて、いちめんに白い花で蔽はれた林檎の下蔭にあゆみ入ると、カテリーナ・リヴォーヴナの足のあひだへにじり込んで、毛氈にどつかと腰をおろした。

「あたしに焦がれてゐたつて、それ本當、セリョージャ？」
「なんで焦がれずにゐられようか、つてことさ。」
「一體どんなふうに焦がれてたのさ？　それを話してお聞かせな。」
「話してきかせろつたつて、ぢやどう言やいいんだい？　焦がれるの何のといふことが、口で講釋できるものだとでもいふのかい？　戀しかつたんだよ、おいら。」
「でもさ、セリョージャ、それほどお前さんが思ひつめてゐてくれたものを、あたしがどうして感じずにゐたんだらうねえ。だつてほら、世間でよく以心傳心なんて言ふぢやないか。」
セルゲイは無言だつた。
「一たいお前さん、あたしがそんなに戀しかつたのなら、なぜあんなに面白さうに唄ばかり歌つてたのさ？　ええ？　だつてあたし、納屋の差掛のところで歌つてゐる聲がよく聞えて來たものだけれど、あれはきつとお前さんの聲だつたに違ひないもの」と、相かはらず甘えながら、カテリーナ・リヴォーヴナは問ひつづけた。
「唄ぐらゐ歌つたつて構はねえぢやないか？　蚊とかブヨとかいふ奴は、生まれるとから死ぬまで歌つてゐるけれど、何も嬉しくつて歌ふわけぢやあるまいぜ」と、セルゲイは素氣なく答へた。

話がとだえた。カテリーナ・リヴォーヴナは、はからずもセルゲイの胸中を聞き知つて、天に昇らんばかりの法悦にひたるのだつた。
彼女はやたらに喋りたがつたが、セルゲイは眉をしかめて默りこくつてゐた。
「まあ、ご覽よ、セリョージャ、すばらしいわ、まるで天國だわ！」とカテリーナ・リヴォーヴナは高らかに叫んだ。その眼は、彼女のうへに蔽ひかぶさつてゐる花ざかりの林檎のぎつしり茂つた枝ごしに、澄みわたつた青灰いろの空をじつと見あげてゐる。そこには滿月が冴え冴えとうかんでゐた。
月の光は、林檎の葉や花のあひだをこぼれて、世にも氣まぐれな明るい斑らを、仰向けに寢てゐるカテリーナ・リヴォーヴナの顏や全身に、さざ波のやうにちらつかせてゐた。大氣はひつそりしてゐた。ただかすかな生暖かいそよ風が、眠たさうな葉並みを時をりさやさやとそよがせて、花をつけた野の草や木々のほのかな香りを、あたりに振りまくばかりだつた。つく息は、なにがなしに惱ましく、さながら怠惰へ、安逸へ、さらには小暗い願望へと、人の心をそそりたてるかのやうだつた。
カテリーナ・リヴォーヴナは、返事がないので、また無言にかへつて、うすバラ色をした林檎の花ごしに、相かはらず夕空を見つめてゐた。セルゲイもおなじく無言だつたが、これはべつに

夕空に氣をとられてゐるわけではなかつた。兩手で膝をかかへたまま、彼は一心ににじぶんの長靴をみつめてゐた。

まさに一刻千金の良夜である！　靜けさ、ほの明り、かぐはしい花の匂ひ、それにまた、人の心をよみがへらせ力づける仄溫かさ。……庭の裏手の、窪地をへだてた遙かかなたで、どこかの男がよく透る聲で唄ひはじめた。垣根のそばの、匂ザクラの茂みでは、夜鳴きウグヒスがまづそつと小手調べをして、やがてのどいつぱいに囀りはじめた。高々とそびえる竿のうへの鳥かごでは、ねぼけたウヅラが何やらぼそつきだすし、馬屋の壁のなかでは肥えふとつた馬が一匹、いかにも切なさうな鼻息を立てる。かと思ふとまた、庭の垣根の向ふにひろがつた牧場を、浮き浮きした犬の群がもの音ひとつ立てずに駈け抜けて、今では廢屋も同然の古い鹽倉の描きだす、あやしげな恰好をした黒い影のなかへ消え失せる。

カテリーナ・リヴォーヴナは、片肘たてて起き返ると、高だかと伸びた庭の草を眺めわたした。その草もやつぱり、木々の花や葉並みにさんさんと砕けちる月光のきらめきと、しきりに戯れてゐる。例の氣まぐれな明るい斑らが、草を一本一本金色に染めあげて、それでもなほ足りずにそのうへにちらついたり搖らめいたりしてゐる有樣は、火のやうな紅蛾のはげしい羽ばたきか、それともその木かげの草むらが、一からげに月の投網に引つかかつて、あちこち泳ぎまはつ

てゐるところか、と疑はれるばかりだつた。

「ねえ、セリョージェチカ、なんて素晴らしい晩だらうねえ！」と、くるりと振り返つて、カテリーナ・リヴォーヴナは聲高にさけんだ。

セルゲイは、くそ面白くもないといつた顏つきで、一應あたりを見まはした。

「どうしたのさ、セリョージャ、そんなつまらなさうな顏をしてさ？　それともう、あたしたちの戀なんか、あきあきしたとでもいふのかい？」

「つまんない事を言ふもんぢやねえ！」と、セルゲイは素氣ない調子で應じて、身をかがめると、さも面倒くささうにカテリーナ・リヴォーヴナに接吻をあたへた。

「浮氣なんだねえ、お前は、ええセリョージャ」と、カテリーナ・リヴォーヴナはつい嫉妬ぢ口をとがらせて、——「だらしがないんだねえ。」

「よしんばそれが、ただの口說にしたところで、おいらにや一向、身におぼえのないことさ」と、セルゲイは落ちつきはらつた口調でこたへた。

「ぢや、なんだつてそんなキスの仕方をするのさ？」

セルゲイは、すつかり默りこくつてしまつた。

「そんなのは、夫婦の仲でしかしないものだよ」と男の渦まき髮をいぢくりながら、カテリー

ナ・リヴォーヴナは言ひつのつた、——「つまり、お互ひに唇の埃を拂ひあふだけのことさ。お前、かりにもあたしに接吻するからにや、そらそのあたしたちの上の林檎の木からね、咲きたての花がポトリと地めんへ落つこちずにはゐないやうにするものだよ。」

「そらね、かう、かうするものさ」と、カテリーナ・リヴォーヴナは囁やきざま、情夫のからだをぎゆつと抱きしめて、情熱に身もだえしながら唇を押しつづけた。

「ねえ、セリョージャ、あたしの言ふことをお聞き」と、カテリーナ・リヴォーヴナは、暫くしてまた言ひだした、「お前さんのことといふと、みんなきまつて浮氣者だと言ふのは、一體どうしたわけなんだらうねえ?」

「そんな惡口を言ひふらす奴は、一體どこのどいつですかい?」

「だつてさ、みんながさう言ふもの。」

「そりや俺らだつて、まるつきり惚れる値うちのない女たちにや、煮湯をのましたこともありまさあ。きつとそんな時のことを言ふんだらうなあ。」

「なんてお馬鹿さんなの、お前は、惚れる値打ちのない女なんかと出來合ふなんてさ? だいいち値うちのない女に、惚れるなんていふ法はないわ。」

「口はなんとでも言へまさあ! だがね、一體全體さうした物ごとが、理窟や分別ではこぶとでも思ふんですかい? ふらふらつと迷ひこむ、ただそいだけのことでさあ。……女がゐる。その女とね、こつちぢや別にこれといふ下心もなしに、あつさりつきあつてゐるうち、ひよいと戒律を犯してしまふ。さうなると女は、こつちの首つ玉へぶらさがつて來て、いつかな離れることぢやない。これがつまり、戀仲つていふもんでさ!」

「いいかい、セリョージャ! あたしはねえ、お前さんにこれまでどんな女があつたかは知らないし、今さら野暮つたくそれを洗ひたてようとも思はないさ。ただね、これだけはお忘れでないよ——あたしたち二人が、今の仲になるまでにや、どんなにお前さんがあたしを口説き立てたかつていふことをさ。お前さん自分だつて忘れちやゐまいねえ、——何もあたしからばつかし好きこのんでこの戀に身を投げたしたわけぢやなくつて、まあ半分がとこはお前さんのワナにはまつたも同然だつたいふことをね。だからさ、もし萬が一お前が、いいかいセリョージャ、このあたしを今更ほかの女に見かへるやうなことがあつたら、よしんばその女がどこのどなた樣であらうがあるまいが、ねえ可愛いセリョージャ、濟まないけどあたしはお前さんと、とても生きちや別れられまいと思ふのさ。」

セリョージャはぶるりと身をふるはせた。

「だつてさ、カテリーナ・イリヴォーヴナ! おいらの大事な掛替のないお前さん!」と、彼

は急に雄辯になつて、――「二人の仲だの何だのつて仰しやるけどね、さういふお前さん自分で、それがどんなもんだか、とつくり檢分してみなさるがいいや。現に今しがたもお前さんは、おいらが今晩は妙に沈んでると言ひなすつたがね、これでもおいらが沈まずにゐられるものかどうかといふ、そこんところを、ちつとも考へちやくれないんだ。おいらの心の臟はね、ひよつとすると、べつとり固まつた血のりの中に、ずぶり浸つてゐるやうなもんだぜ！」

「開かせて、さ、開かせておくれ、セリョージャ、お前さんの苦勞を洗ひざらひ。」

「開かせるも何もありやしねえ！　第一さ、今にもそら、思つてもぞつとするぜ、お前さんの亭主が、がらがらつと馬車で歸つてくる。と、途端にもう、可哀さうなこのセルゲイ・フイリップイチの奴は、さらりと秋の捨て扇だ。すごすご裏庭へ退散して、胴間聲の歌の仲間入りでもして、納戸の軒から指をくはへて、カテリーナ・イリヴォーヴナの寢間に蠟燭がぽつかりともつてるところだの、おかみさんがふかふかした蒲團を叩いて膨らましてるところだの、天下晴れての御亭主のジノーヴィー・ボリースィチとよろしくお床入りの有樣だのを、あつけらかんと眺めてゐなけりやならないんだ。」

「桑ばら桑ばら！」と、カテリーナ・リヴォーヴナは陽氣に聲を引つぱつて、可愛らしい手を振つた。

「なんで桑ばら桑ばらなものかね！　憚りながらあつしだつて、あんたといふ人が所詮さうならずにゐるものでないことぐらゐ、ちやんと心得てゐますさ。だがね、カテリーナ・イリヴォーヴナ、あつしだつても、おいらなりに心もあれば情けもあるんだ。そいで自分がどんなに苦しいだらうかつてことも、ちやんと見えずにはゐないといふわけでさあ。」

「もう澤山。そんな話、もうよして。」

カテリーナ・リヴォーヴナは、いかにもセルゲイらしい嫉妬の表現を耳にするのが愉快でならず、大聲で笑ひだしながら、またもや接吻の雨をふらせはじめた。

「くどいやうだがね」とセルゲイは、肩さきまでむき出しのカテリーナ・リヴォーヴナの兩の腕から、そつと自分の頭を抜けださせながら、なほも言葉をつづけた、――「くどいやうだけどね、もう一つ、ついでに聞いておいて貰ひたい事があるんだ。ほかでもないがそりやあ、かうしてあつしがあれやこれやと、くよくよ男らしくもなく、同じことを一ぺんどころか十ぺんも思案したりするのは、一つにはあつしの境涯が、この通りの賤しい身分だといふせゐもあるんでさ。假りにもしあつしが、いはばまあんたと對等の身分でさ、何かかう旦那とか商人とか云はれる身の上だつたら、それこそもうあつしとあんたとは、ねえカテリーナ・イリヴォーヴナ、あつしの息のある限り離れつこはないんだがなあ。ところが實際は、あんたもよく考へておくんなさい

よ、あんたの前へ出ちやあ、あつしといふ人間は、いつたい何者ですかい？　今にもあんたが、その白い可愛らしい兩手をほかの男の手にとられて、寢室へ連れていかれたにしたところで、あつしは何もかもこの胸一つに、じつとこらへてゐなけりやならないんだ。いやそればかりか、その無念さのおかげで、ひよつとすると一生涯、われながら見さげ果てた腰拔け野郎だと、自分で自分を阿呆あつかひにするやうにさへ、なり兼ねないものでもないんだ。ねえ、カテリーナ・イリヴォーヴナ！　あつしはね、女からただ一時の快樂をせしめさへすりや、あとは野となれ山となれ式の、ほかの奴らとは違ふんですぜ。あつしはかう見えても、戀がどういふものかぐらゐは、ぢかにこの胸で分つてゐるつもりですぜ。そいつがまるで黒い蛇みたいに、あつしの心の臟に吸ひついて離れないことも、ちやんと分つてるんですぜ。……」

「なんだつてお前さん、そんなことをくどくどあたしにお說教するのさ？」と、カテリーナ・イリヴォーヴナは相手をさへぎつた。

彼女はセルゲイが不びんになつて來たのである。

「カテリーナ・イリヴォーヴナ！　つい話がくどくなつちまふんですよ。いやでも、くどくならずにやゐられないんですよ。だつて、さうぢやないですかい、萬事もう事の筋みちがちやんと讀めてゐて、運命はきれいさつぱり決まつてゐるんだ。おまけにそれも、いつか遠い先のことな

んかぢやなくつて、明日の日にもこのセルゲイの奴は、この屋敷うちに影も形もなくなつちまふんだ。これが平氣でゐられますかい？」

「だめよ、いけないわ、そんなこと言ふもんぢやないわ、セリョージャ！　あたしがお前さんから離れて暮らすなんて、そんなこと決してありつこはないわ」と相かはらず情合のこもつた聲で、カテリーナ・イリヴォーヴナは男をなぐさめるのだつた。――「かりに萬一、そんなことになつたとしても……その時は、あの人が死ぬか、あたしが死ぬか――とにかくお前さんは、あたしといつまでだつて一緒だわ。」

「いいや、そいつはとても、ねえカテリーナ・イリヴォーヴナ、望みがありませんや」とセルゲイは、悲しげにまた佗びしげにかぶりを振りながら答へた。――「こんな戀をしたばつかりに、あつしは生きてるのが、さつぱり味氣なくなつちまつた。同じ惚れるにしても、いつそおとなしく、こつちと身分の釣り合つた相手にしといたら、こんな苦しい思ひはせずに濟んだらうになあ。一たいあんたといふ人を、このあつしが末永く戀女にして行けるとでもいふんですかい？　それがあんたの何か名譽になるとでもいふんですかい――あつしづれの色女だといふことがさ？　叶ふことならあつしは、聖なる神の祭壇の前で、あんたの良人になりたいんだ。さうなつたらあつしは、そりや勿論あんたに對しちや自分は一目も二目も置かなけりやならん男だといふことは

二六時ちゆう肝に銘じて忘れないまでも、とにかくあつしは、じぶんの細君を心から尊敬してゐるといふ點にかけちや、立派に良人たる資格のある男だといふことを、大つぴらに世間の奴らに見せつけてやれる自信があるんだがなあ。……」

カテリーナ・リヴォーヴナは、このセルゲイの言葉をきき、彼の嫉妬のはげしさや、自分を妻にしたいといふ願ひを知つて、頭がくらくらつとしてしまつた。なかでもこの最後の願ひは、よしんば當のその男と結婚まへに身も心も許しきつた仲であつたにしろ、女性にとつてはやはり、いつ耳にしても嬉しい言葉なのである。今やカテリーナ・リヴォーヴナは、セルゲイのためなら火にも水にも飛びこまう、牢屋にもはいらうし十字架にものぼらう、といふ覺悟がついた。言ひかへればセルゲイは、女をすつかり惚れこませてしまつて、わが身にたいする女の無邊無量の献身を、まんまとその手に收めたわけである。女はじぶんの幸福に狂氣せんばかりだつた。彼女の血は湧きかへつて、もはやそのうへ男の言葉に耳をかたむける餘裕はなかつた。彼女は、いきなり手の平でセルゲイの唇をおさへると、男の頭をじぶんの胸に押しつけながら、かう口走るのだつた。——

「いいわ、さうなつたらもうあたし、立派な商人にお前さんを仕立てあげてみせるわよ。そしてお前さんと、天下晴れての夫婦ぐらしをするんだわ。ただねえ、お前さん、事がまんまと落

着するまでは、下手にくよくよしてあたしをがつかりさせないでおくれよ。」

そこでまたもや、接吻と愛撫がひとしきりつづいた。

年寄りの番頭は納屋で寢てゐたが、深い眠りのひまひまに、夜ふけの靜寂をみだしてひびいてくるさざめきを、だんだん耳の底に感じはじめた。どうやらそれは、どこかその邊に腕白小僧が寄りあつて、ひとつあのよぼよぼ爺いに一泡ふかせてやらうぢやないかと、さかんに悪計をめぐらしてゐるやうな、ひそひそ聲と忍び笑ひでもあつたし、かと思ふとまた湖の妖精たちが、行き暮れた旅人か何かをなぶり物にしてゐるみたいな、甲だかい陽氣な笑ひごゑでもあつた。それはほかでもない、月の光をぴしやぴしや撥ねかへしたり、ふつくらした毛氈の上をころげ廻つたりしながら、カテリーナ・リヴォーヴナが亭主の使つてゐる若い番頭を相手に、じやれたり、いちやついたりしてゐる聲だつたのである。ひらひらと、またはらはらと、こんもり茂つた林檎の木からは、咲きたての白い花が、二人のうへにしきりにふり注いでゐたが、やがてそれも散りやんでしまつた。さうかうするうちに、夏のみじか夜はいつしか移つて、高くそびえる穀倉の切りたつたやうな屋根のかげに月は沈み、だんだん朧ろめきながら、斜めに地上を照らしてゐた。豪所の屋根からは、けたたましい猫の二重唱がひびいてきた。やがて、唾きをはく音や、腹だたしげな鼻息がきこえたかと思ふと、毛並みをみだした猫が二三匹、屋根に立てかけてある小割板

の束をがさつかせて駈けおりてきた。

「さあ、もう行つて寝ようぢやないの」と、カテリーナ・リヴォーヴナは毛氈からそろそろ身を起こすと、まるで精も根もつきはてたといつた調子で、のろのろとさう言つた。そして、いつのまにかシミズと白いスカートだけになつて寝てゐたそのままの恰好で、ひつそりした、まるで死に絶えたやうにひつそりした商家の構内を、ふらふら歩いていつた。そのあとからセルゲイは、片手に毛氈を、のこる片手には、さつき彼女が興に乗つてぬぎ捨てたブラウズを、かかへてついて行くのだつた。

7

蠟燭を吹き消して、肌着もなにもすつぽり脱ぎすてて、ふかふかした羽ぶとんへもぐり込むが早いか、カテリーナ・リヴォーヴナは忽ちもう、正體もなく寝こけてしまつた。なにしろ、さんざんふざけ抜き、いちやつき抜いたあげくの果てだから、カテリーナ・リヴォーヴナの眠りの深いことといつたら、足もぐつすり寝てゐるといつた鹽梅だつた。とこころが、まもなく彼女は、またもやドアがそつとあいて、さつきの猫がどさりと古靴かなんぞのやうに寢床の上へ落ちた氣配を、夢うつつのうちに聞いたのである。

『ほんとに、なんてまあ忌々しい猫だらうねえ?』と、へとへとのカテリーナ・リヴォーヴナは思案するのだつた。——『今度はあたし、わざわざ自分のこの手でドアの鍵をかけておいたし、窓もしまつてゐる。だのにまたやつて來たわ。よし、さつさと追ん出しちまはう』と、カテリーナ・リヴォーヴナは起きようとしたが、ねぼけた手や足が言ふことをきかない。そのまにも猫は彼女のからだの上を所きらはず歩きまはり、何やら奇妙な鳴き聲をたてるのだつたが、それがまたもや、まるで人間が口をきいてゐるみたいに聞える。しまひにカテリーナ・リヴォーヴナは、からだぢゆうむずむずして來た。

『いいや、これはもう』と、彼女は考へる、——『どうあつても明日になつたら、聖水をベッドに振りかけるよりほかに手がないわ。なにしろかうして、尋常一樣でない變てこな猫に、見こまれたんだからねえ。』

ところで猫は、彼女の耳の上で ニャゴ ニャゴ 鳴きたててゐたが、鼻づらをぬつと差し入れると、こんなことを言ひだした、——『わしがどうして猫なものかよ! 滅相もないわい! さすがは利口なお前だけあつて、まさしくお前の推量たがはず、わしはただの猫ではなくして、實は世に聞えた商人(あきんど)ボリース・チモフェーイチぢやよ。わしが今このやうに落ちぶれたのは、ほかで

もない、嫁女がわしに食はせをつた馳走のおかげで、わしの臓腑がことごとくはじけ破れたからぢや。それ以來』と、猫はことばをつづけて、――『わしはこの通り形が小さくなつて、わしが實は何者かといふことのよく分らぬ者の眼には、猫と見えるやうな仕儀になつてしもうた。ところでお前は、その後きげんはどうかな、ええカテリーナ・リヴォーヴナ？　戒律はよう守つてをるかな？　わしがかうして、わざわざ墓場から出てきたのは、お前がセルゲイ・フィリップィチと二人がかりで亭主の寢床を暖ためてをる有樣を、一目みておきたいからぢやよ。ごろごろごろ』とそこで猫は喉を鳴らして、――『ただ無念なことには、わしの眼は何ひとつ見えんのだ。わしを怖がらんでもいいわ、――それこの通り、お前の馳走のおかげで、わしは目玉までが拔けてしまつたわい。な、わしの眼をよくごらん、怖がることはないわい！』

カテリーナ・リヴォーヴナは一目みるなり、ぎやつとばかり悲鳴をあげた。自分とセルゲイのあひだには、またしても猫が寢そべつてゐて、しかもその猫の頭ときたら、遺骸になつたボリース・チモフェーイチのと寸分たがはぬ大きさだつた。おまけに兩眼の代りに、一對の炎の輪がついてゐて、それが四方八方にぐるぐる廻つてゐるではないか！

セルゲイは目をさまして、カテリーナ・リヴォーヴナをなだめると、また眠つてしまつた。しかし彼女は、睡氣もなにも消しとんでしまひ、――それが却つて幸ひになつた。

目をあいたまま横になつてゐると、とつぜんその耳に、何者かが門を乘り越えて、中庭へはいつて來たらしい音がきこえた。と、たちまち犬が飛びかからうとしたが、すぐまたおとなしくなつたのは、てつきり尻尾をふつて甘えかかつてゐるのに相違ない。それからまた一分ほどすると、階下で掛金のはね返る音がして、戸がギイとあいた。――『この音はみんな、わたしの空耳かしら。さもなけりやあれは、うちのジノーヴィー・ボリースィチが歸つて來たのだ。あの人の持つてゐる合鍵で戸があいたところを見ると』――さうカテリーナ・リヴォーヴナは考へて、いそいでセルゲイの小脇をつついた。

「ほら、お聞きよ、セリョージャ」と彼女は言ふと、自分も片肘ついて身をもたげ、聽き耳をたてた。

階段を忍びやかに、一あし一あし用心ぶかく踏みしめながら、ほんとに誰かが、寢室の錠のおりたドアへ近づいて來るのだつた。

カテリーナ・リヴォーヴナは、シミズ一枚でぱつと寢床からとび出すと、小窓をあけ放つた。間髪をいれずセルゲイは、はだしで差掛の屋根へとび下りざま、兩の足をしつかと柱にからみつけた。その柱づたひに、おかみさんの寢間から拔けだすのは、何もこれが初めてではなかつた。

「いいえ、それには及ばないわ、それには！　そのへんでちよいと横になつておいでな……遠

くへ行かずにね」と、カテリーナ・リヴォーヴナはささやくと、男の靴と服を窓のそとへ抛りだしておいて、自分はまた毛布へもぐりこみ、じいつと待ち受けた。

セルゲイは、カテリーナ・リヴォーヴナの言ふとほりにした。彼は柱づたひに滑りおりずに、差掛の上に積んであつた菩提樹の皮のかげに身をひそめた。

そのまにもカテリーナ・リヴォーヴナの耳には、良人がいよいよ戸の外までやつて來て、息をころして聽き耳をたててゐる氣配が、手にとるやうに傳はつてきた。そればかりか、姙娠に燃えるその心臟が早鐘をつく音までが、聞きとれるほどだつた。しかし、カテリーナ・リヴォーヴナの胸にこみ上げて來たのは、同情の念ではなくて、毒をふくんだ笑ひだつた。

『をととひお出で』と彼女は、心のなかでつぶやいた。その顏には微笑がただよひ、息づかひは、罪のない幼な兒のやうに安らかだつた。

さうした狀態が、ものの十分ほどつづいた。やがての果てにジノーヴィー・ボリースィチは、ドアの外にたたずんで妻の寢息をうかがつてゐるのが、もうこれ以上やりきれなくなつた。彼はノックした。

「だあれ?」と、早からず遲からず間あひを計り、ねぼけ聲をとりつくろつて、カテリーナ・リヴォーヴナは應じた。

「おれだよ」と、ジノーヴィー・ボリースィチが答へた。

「まあ、あなたなの、ジノーヴィー・ボリースィチ?」

「うん、おれだ! なんだい、この聲が聞えないみたいにさ!」

カテリーナ・リヴォーヴナは寢てゐたままのシミズ一つで飛びだして行くと、良人を部屋へ入れてやり、また元のぬくぬくした寢床へもぐりこんでしまつた。

「夜明けがたは何だか冷えて來ますのねえ」と彼女は、毛布にくるまりながら言つた。

ジノーヴィー・ボリースィチは、じろじろ見廻しながらはいつてくると、安着の祈りをとなへ、蠟燭をともして、またあたりを見廻した。

「どうだい、元氣かね?」と、彼女は細君に問ひかけた。

「ええ」とカテリーナ・リヴォーヴナは答へると、上半身をおこして、前ボタンのない紗のブラウスを著はじめた。

「サモワルでも立てませうか?」と、彼女はたづねた。

「まあいいさ、アクシーニヤを呼んで、立てさせたらいい。」

カテリーナ・リヴォーヴナは、はだしに靴をつつかけると、駈けだしていつた。半時間ほども彼女は戻つて來なかつた。その間に、彼女は自分でサモワルに火を入れて、それが濟むと、飛ぶ

やうに差掛の上のセルゲイのところへ忍んで行つた。
「ここにゐるんだよ」と、彼女はささやいた。
「いつまで一體?」と、やはりひそひそ聲でセルゲイが聞いた。
「まあ、なんて分らずやなのさ! あたしが言ふまで、ゐりやいいんだよ。」
さう言つてカテリーナ・リヴォーヴナは、手づから男をもとの場所へ坐りこませた。
さうして差掛の上にゐると、寢室のなかの樣子がすつかりセルゲイには聞えて來た。またドアをばたんと云はせて、カテリーナ・リヴォーヴナが良人のところへ戻つて來た音がする。話し聲も、いちいち手にとるやうに聞える。
「えらく手間どつたぢやないか?」と、ジノーヴィー・ボリースィチが細君をとがめる。
「サモワルを立ててゐたんですの」と、彼女がすまして答へる。
話がとだえた。ジノーヴィー・ボリースィチがフロックを洋服掛へかけてゐる音が、セルゲイには聞える。やがて顏を洗ひにかかつて、鼻をかんだり、水を四方八方へはねかしたりする音がする。おいタオルをくれ、と言ふ。それからまた話がはじまる。
「一たいなんだつて、とつつあんの葬式を出すやうなことになつたんだね?」と、良人がたづねる。

「ただもう、ぽつくり亡くなつたもんで」と細君、「とりあへずお葬ひを出しましたの。」
「しかし、なんぼなんでも意外だつたなあ!」
「神樣の思召しですわ」とカテリーナ・リヴォーヴナは答へて、茶碗をかちやかちや云はせはじめた。
ジノーヴィー・ボリースィチは、沈みこんで部屋の中を行きつ戻りつしてゐた。
「ところでお前さんは、おれの留守のあひだ、どんなふうに暮らしてゐたかね、退屈ぢやなかつたかい?」と、またもジノーヴィー・ボリースィチが細君を根ほり葉ほりしはじめる。
「うちの樂しみといつたら、世間にもおほよそ知れ渡つてゐるはずですわ。舞踏會へ行くぢやなし、お芝居なんぞ尙更のことですわ。」
「それにどうやら、亭主の顏を見ても、大して嬉しくもなささうだね」——じろりと横目を呉れながら、ジノーヴィー・ボリースィチが切りこんだ。
「あら、おたがひもう、ほやほやの御夫婦ぢやあるまいし、久しぶりで會つたからつて、まさか無分別にのぼせあがりも出來なかちうぢやありませんか。この上、どんな風に嬉しがつて見せろと仰しやるの? わたし、かうしてふうふう駈けずり廻つて、あんたの御機嫌をとつてゐるのにさ。」

カテリーナ・リヴォーヴナは、サモワルを取りにまた部屋から駈けだした次手に、またもやセルゲイのところへ駈けつけると、袖をぐいと引つぱつて、かう言つた、――『ぼやぼやおしでないよ、セリョージャ！』

セルゲイは、一たい何事がおつぱじまるのやら、さつぱり合點が行かなかつたが、とにかく身構へだけはしたのである。

カテリーナ・リヴォーヴナが戻つて來てみると、ジノーヴィー・ボリースイチは寢床の上で兩膝をつきながら、枕もとの壁に南京玉の紐のついた自分の銀時計を掛けてゐるところだつた。

「こりや一體どうしたわけだね、ええカテリーナ・リヴォーヴナ、一人で寢るのに二人分もふとんを敷いてさ？」と、さも怪訝さうに、彼はだしぬけに細君にきいた。

「しよっちゆうお歸りを待つてたんですわ」と良人の顏を平然と見すゑながら、カテリーナ・リヴォーヴナは答へた。

「これまた、厚くお禮を申しあげにやならんわけだな。……ところでと、こんな物が羽ぶとんの上に落ちてゐたが、こいつは一體どこから舞ひ込んだわけだらうな？」

ジノーヴィー・ボリースイチは敷布の上から、セルゲイの細い羅紗のバンドを拾ひあげると、その端つこをつまんで細君の眼のまへに突きつけた。

カテリーナ・リヴォーヴナは、ちつともたじろぐ色もなく、

「お庭で拾つたんですの。丁度いいので、下紐がはりに使つてゐましたの。」

「なるほどなあ！」と、ことさら語氣をつよめてジノーヴィー・ボリースイチは言ひ放つて、――「おれも實は、そのお前さんの下紐のことで、何かと聞き及んでゐるんだがな。」

「一たい何をお聞きになつたんですの？」

「まあ、お前さんのいい事を色々とな。」

「わたしべつに、いい事なんぞありやしませんのにさ。」

「まあいい、いまに分るさ、洗ひざらひ分つちまふさ」と、飲みほした茶碗を細君の方へ押しやりながら、ジノーヴィー・ボリースイチが答へた。

カテリーナ・リヴォーヴナは默りこくつてゐた。

「とにかくお前さんたちの一件はな、カテリーナ・リヴォーヴナ、すつかり明るみに出さずに置かんつもりだよ」と、まただいぶ長く續いた沈默のあとで、細君に眉根をしかめて見せながら、ジノーヴィー・ボリースイチが吐きすてるやうに言つた。

「憚りさま、このカテリーナ・リヴォーヴナは、それほど臆病ぢやありませんわ。大してびくついてもゐませんですわよ」と、彼女はやり返した。

「なに！　なんだと！」と、思はず聲をあらげて、ジノーヴィー・ボリースィチが叫んだ。
「いいえ別に――みんな濟んだことですわ」――と彼女は答へた。
「おいおい、ちつと氣をつけたがよからうぜ！　お前いつのまにか、えらく口が達者になつたなあ！」
「おや、口が達者になつてはいけませんでしたの？」と、カテリーナ・リヴォーヴナは投げかへす。
「それよりかな、もうちつとわが身を省みたがよからう、といふことさ。」
「あたし何も、省みることなんかありやしませんもの。そのへんの金棒引きが、あること無いこと口から出まかせに言ひふらす。その中傷沙汰を、一つ殘らずこのあたしが背負ひこまなけりやならないんだわ！　そんな話つて一體あるもんかしら！」
「ところが金棒引きどころか、世間にやもう立派に、お前たちの色戀ざたが知れわたつてゐるんだぜ。」
「あら、どんな色戀沙汰ですの？」と、今度は本氣でさつと顏を紅潮させて、カテリーナ・リヴォーヴナが金切聲をたてた。
「いやなに、ちやんとおれには分つてゐる。」

「分つてらつしやるんなら、いいぢやありませんか、もつとはつきり仰しやつたつて！」
ジノーヴィー・ボリースィチは暫く默つてゐたが、やがてまた空つぽの茶碗を細君の方へ押しやつた。
「そら御覽なさい、なんにも言へないぢやありませんか」と、興奮のあまり良人の小皿へ手荒く茶さじを投げこみざま、さも見さげ果てたといつた口調でカテリーナ・リヴォーヴナは切つて返した。――「さ、仰しやつたらいいでせう、相手は誰だといふ御注進でしたの？　あたしがあなたに不貞を働らいたといふ、その相手の男は一たいどこの誰だといふんですの？」
「今にわかる、さうあわてんでもいい。」
「わかつたわ、あのセルゲイのことでせう、あなたの耳にはいつたその相手の男とやらいふのは？」
「今にわかる、今にわかるよ、カテリーナ・リヴォーヴナ。お前さんにたいするわしの實權は、まだ誰にも横取りされたわけではなし、また誰にしたところで、横取りはできないはずだ。……結局お前さんが、口を割ることになるのさ。……」
「ち、ちッ！　さうまで言はれちや、もう我慢がならないわ」と、齒ぎしりをしてカテリーナ・リヴォーヴナは絶叫すると、さつとハンカケのやうに蒼ざめて、やにはにドアの外へ躍りだして

いつた。

「さあ、連れて來ましたわ」と、何秒かののち、セルゲイの袖をぐいぐい引つぱつて、部屋へ引きずり込みながら、彼女は口走つた。——「ご存じの筋は何なりと、この人になりあたしになり、片つ端からおたづねになるがいいわ。ひよつとすると、知りたいと思つてらつしやる以上のことが、何かお耳にはいるかも知れませんわよ。」

ジノーヴィー・ボリースィチは、かへつて呆氣にとられてしまつた。彼は、戸口の柱ぎはに突立つつてゐるセルゲイを見やつたり、あるひは腕組みをしてベッドのふちに平然と腰をおろした細君を見やつたりしてゐたが、一たいこの騒ぎはどういふことになるものやら、さつぱり見當がつかないのだつた。

「一たいどうしようつて云ふんだ、毒婦め?」と、やつとの思ひで口を切つたが、肘かけ椅子に坐りこんだままだつた。

「よく知つてらつしやるといふその事を、どしどしお尋ねになるがいいでしよ」と、カテリーナ・リヴォーヴナはしやあしやあと答へた。——「あんたは、威かしさへすりやあたしが震へあがるとでも、思つてらつしやるらしいけれど」と、意味ありげな流し目を一つくれて、言葉をつづけた、——「さうは問屋がおろさないことよ。あたしはただ、あんたのその威し文句をうかがふ

先から、あんたに對してかうしようとちやんと胸のなかで決めてゐたことを、そのまま實行するだけのことですわ。」

「そりやなんのことだ? ええ出て失せろ!」と、ジノーヴィー・ボリースィチはセルゲイをどなりつけた。

「おつとどつこい!」と、カテリーナ・リヴォーヴナがおひやらかした。

彼女はすばやくドアの錠をおろすと、鍵をポケットへ押しこみ、例の更紗のブラウス姿で、またもやどしりとベッドにおみこしを据ゑた。

「ちよいと、セリョージェチカ、こつちへおいでな。ねえ、おいでつたら、おまへ」と、彼女は番頭を手まねきした。

セルゲイは、渦まき髪をさつと一振りゆすりあげると、勇敢にずかりとおかみさんのそばへ腰をおろした。

「やれやれ! あさましいわい! 一體なんたることだ? 犬畜生ぢやあるまいし、それは一たい何たるざまだ!」と、滿面さつと紫色に變じて、肘かけ椅子から立ちあがりながら、ジノーヴィー・ボリースィチはわめき立てた。

「どう? お氣に召さなくつて? まあとつくり見て頂戴な、とつくりとね。これがあたしの

若い鷹ですわ、どう、いい男振りでしよ！」

カテリーナ・リヴォーヴナは大聲で笑ひだすと、良人の目の前でセルゲイに熱い接吻をあたへた。

とその瞬間、彼女の頬つぺたにがあんと一發、横びんたが飛んだかと思ふと、ジノーヴィー・ボリースィチはあけつぱなしの小窓めがけて突進した。

8

「おやまあ、おいでなすつたわね！……ところがどつこい、さうは行きませんてことさ。どうせそんなことだらうと思つてたよ！」と、カテリーナ・リヴォーヴナは金切聲をたてた。——「さあ、かうなつたらもう山は見えたわ……お互ひ、泣かうが笑はうが……」

ぱつと一振り、彼女はセルゲイを突きのけると、すばやく良人に追ひすがつて、ジノーヴィー・ボリースィチが窓へ跳びあがるその前に、うしろからその喉もとへ自分のほつそりした指をからませたかと思ふと、忽ち相手のからだを、しめつた麻束よろしくの體で、床べたへ引つくり返した。

どさりと地ひびきを立てて倒れる拍子に、うしろ頭をいやつとこさ床にぶつけたジノーヴィー・ボリースィチは、完全に目をまはしてしまつた。彼としては、かうも手つとり早く大詰が來ようとは、夢にも思ひまうけぬことだつたのだ。自分の身に最初の暴力が加へられた瞬間、その下手人がげんざいのわが妻であればあるだけ、さてはこの女め、このおれから自由にならうためなら、手段をえらばぬ必死の覺悟だな、と直覺して、これは容易ならんことになつたわいと、咄嗟に感じたのであつた。ジノーヴィー・ボリースィチは、さうした一切のことに、倒れる刹那ぱつと思ひあたつたのだつたが、さりとて悲鳴ひとつあげなかつたのは、聲を立てたところでどうせ誰の耳にもとどきはすまい、みすみす斷末魔を早めるのが落ちだと、見さだめが附いたからである。彼は無言のまま、一わたりあたりを見廻すと、その兩眼に怨むやうな咎めるやうな苦しみ悶える やうな色をうかべ、現に自分の喉もとを細つそりした指でぐいぐい締めつけてゐる妻の顏を、じいつと見つめた。

ジノーヴィー・ボリースィチは、べつに抵抗しなかつた。兩の腕は、ぎゆつと握りこぶしを固めたまま、床べたに伸びきつて、時どき引つつるやうにぴくついてゐた。片つぽは全く自由だつたが、のこる一本はカテリーナ・リヴォーヴナの膝がしらで、床へ押しつけられてゐた。

「ちよいと押さへてゐておくれな」——彼女は平氣な聲でセルゲイにさう囁くと、言葉なかば

でまた良人の方へ向きなほつた。

セルゲイは旦那のうへに馬乗りになると、もろ膝で相手の腕をおさへつけ、むんずとその手を、カテリーナ・リヴォーヴナの兩手の下から相手の喉へかけようとしたが、とたんに思はずギヤッと悲鳴をあげてしまつた。じぶんの女房を寢とつた男の姿が目にはいると、血なまぐさい復讐の一念が、ジノーヴィー・ボリースィチの體内に殘つてゐた力のありたけを、一擧にふるひ立たせたのである。彼は猛烈な勢ひで身をもがくと、セルゲイの膝の下敷きになつてゐる兩手を引き抜き、それでセルゲイの黑い渦まき髮をひつつかみざま、まるで獸みたいに彼の喉もとへ咬みついた。が、その瞬間、ジノーヴィー・ボリースィチは一二度呻いて、がくりと頭を落した。

カテリーナ・リヴォーヴナは眞蒼な顏をして、ほとんど息も通はぬ有樣で、良人と情夫の頭のうへに立ちすくんでゐた。その右の手には、ずしりと重い鐵の燭臺が、重たい方を下に向けて、あたまの方で握られてゐた。ジノーヴィー・ボリースィチのこめかみから頰へ、一すぢの細い紐をなして、鮮血がながれてゐた。

「坊さんを……」とジノーヴィー・ボリースィチは、自分のうへに馬乗りになつてゐるセルゲイから、さも厭らしさうに頭をできるだけ遠方へそむけながら、鈍い聲でうめいた。——「ざんげが、したい」——髮の毛の下かげで次第に濃くなつてゆく生溫い血を、橫目で見やりながら、そ

ろそろ顫へのつきはじめた彼は、一そうかすかな聲で言つた。

「大丈夫よ、そんなことしないだつて」とカテリーナ・リヴォーヴナはささやいた。

「さあさ、いつまでこの人のお相手をしてたつて始まらないよ」と、今度はセルゲイに向つて——「もつときゆつと、その喉をお締めな。」

ジノーヴィー・ボリースィチは、ぜいぜい聲をもらしはじめた。

カテリーナ・リヴォーヴナはしやがみ込むと、良人の喉にかかつてゐるセルゲイの兩手を、じぶんのもろ手でぐいと押しつけ、耳をその胸に當てがつた。沈默の五分間がすぎると、彼女は身をおこしてかう言つた。——「さあよし、往生したらしいわ。」

セルゲイも立ちあがつて、ふうつと息をついた。ジノーヴィー・ボリースィチは死んで橫たはつてゐた。喉は締めあげられ、こめかみは裂けてゐた。頭のしたには、左手にあたつて、小さな血のしみが溜つてゐた。しかし、傷口はべつとり髮の毛がはりついて固まつてゐたので、血はもう流れてはゐなかつた。

セルゲイはジノーヴィー・ボリースィチを、穴倉へかついで行つた。それは當のセルゲイ自身がついこのあひだ、今は亡きボリース・チモフェーイチの手で閉ぢこめられた覺えのあるあの石倉の、地下に設けられたものであつた。そこへ拋りこむと、彼は屋根部屋にとつて返した。その

まにカテリーナ・リヴォーヴナは、例の更紗木綿のブラウスの袖をたくしあげ、裾を高々とはしよりあげて、ジノーヴィー・ボリースィチがおのれの寝間の床にのこしていつた血のしみを、束子にシャボンをつけて入念に洗ひおとすのだつた。サモヴァルのなかの湯は、まだ冷めてはゐなかつた。その湯で淹れた毒入りの茶を、一杯また一杯と重ねながら、つい今しがたまでジノーヴィー・ボリースィチは、どうにか一家のあるじの沽券をみづから慰めてゐたものだつたが、とにかくその湯のあるおかげで、血のしみは跡形もなくきれいに落ちてしまつたのである。

それからカテリーナ・リヴォーヴナは、銅のうがひ茶碗と、シャボンを塗りつけた束子を持つて、

「さあ、明りをたのむよ」とセルゲイに言ひつけ、戸の方へ歩いていつた。――「明りをお下げな、もつと低く」――さう言ひながら彼女は、セルゲイがジノーヴィー・ボリースィチの死體を引きずつたと思しい床板のうへを、穴倉の入口までまんべんなく檢査していつた。

わづか二タ所だけ、ニス塗りの床のうへに、さくらんぼほどの大きさの血の痕が、ちよつぴり二つ着いてゐた。カテリーナ・リヴォーヴナが束子でこすると、すぐ消えてしまつた。

「よく覺えときなさいよ、これがつまり、自分の女房のところへ泥坊みたいに忍び寄つたり、立ち聞きしたりするもんぢやないといふ戒しめなのさ」――とカテリーナ・リヴォーヴナは、まづすぐ腰をのばして、穴倉の方をふり返りながら言ひ放つた。

「これで目出たし目出たしか」――セルゲイはさう言つたが、われとわが聲の響きにぎよつとした。

二人が寢室にもどつて來たとき、曉を告げるほつそりした紅ゐの筋が一本、東の空をつらぬきはじめて、花におほはれた林檎の木々をうつすらと金色に染めながら、庭の柵のみどり色をした格子ごしに、カテリーナ・リヴォーヴナの部屋へ射しこむのだつた。

中庭をよこぎつて、羊皮の半外套を肩へ引つかけ、あくびまじりに十字を切りがら、納屋から臺所へ、年よりの番頭がよちよち歩いていつた。

カテリーナ・リヴォーヴナは、紐であけたてする鎧戸を用心ぶかくそつと引くと、ふり返つていつとセルゲイを見つめたが、その眼はまるで彼の魂を見透さうとしてゐるやうだつた。

「さあ、これでお前さんは、れつきとした商家の旦那だよ」と彼女は、セルゲイの肩にその白い兩手をかけて言つた。

セルゲイは、うんともすんとも返事をしなかつた。

そのセルゲイの唇は、わなわなと顫へてゐて、のみならずその全身も、まるで熱病やみのやうに顫へてゐた。カテリーナ・リヴォーヴナはどうかといふと、唇だけが冷え冷えしてゐた。

それから二日すると、セルゲイの兩の手のひらには、鐵挺や重たいシャベルを使つたらしく、大きなマメが幾つもあらはれた。その甲斐あつて、穴倉のなかのジノーヴィー・ボリースィチは、すこぶる手際よく始末されて、かうなつたらもう當の後家さんかその情夫の口を借りなければ、死人がみんな復活するといふあの最後の審判のその日まで、誰にも嗅ぎつけられる氣づかひはないまでになつてゐた。

9

セルゲイは喉に眞紅なハンカチを卷きつけて、どうしたものだか喉が腫れふさがつて困つたと言ひふらしてゐた。ところが、ジノーヴィー・ボリースィチがセルゲイの喉もとにのこした齒形の、まだ直りきらないうちに、カテリーナ・リヴォーヴナの良人の行方不明が、人の口の端にのぼりはじめた。當のセルゲイが誰よりも一ばん多く、旦那のうはさをしだしたのである。宵の一刻を、若い衆にまじつて木戸のそばのベンチに腰かけなどしてゐる時、『それにしても、なあみんな、妙な話ぢやねえかい、うちの旦那が未だに歸つてござつしやらねえなんてさ』——といつた調子で、口火を切るのである。

若い衆もやはり、不思議だなあと首をかしげる。

さうかうするうちに製粉所から報らせが來て、旦那は何頭だてかの馬車をやとつて、もうとうの昔に家路についたことが分る。その車の馭者にきいてみると、ジノーヴィー・ボリースィチはじめから加減がよくない樣子だつたが、そのうち變てこな場所で車を乘りすてた。といふのはつまり、町までまだ一里ちかくもあらうといふ時分、修道院のそばでいきなり車をおりると、皮袋をさげて、そのまま行つてしまつた——といふのである。そんな話を耳にするにつけ、一同はますます怪訝に思ふのだつた。

ジノーヴィー・ボリースィチが行きがた知れずになんなすつた——結局はまあそこに落ちついてしまふ。

そこで捜索がはじまつたが、何ひとつ見つからなかつた。商人は水へでももぐつたみたいに掻き消えてしまつたのである。逮捕された馭者の陳述で分つたことは、例の修道院のそばを流れてゐる川つぷちで商人が車をおりて、そのまま行つてしまつた——といふことだけだつた。事件は結局うやむやになつて、そのままにカテリーナ・リヴォーヴナは、後家の身の誰に遠慮もしやくもない氣樂さで、セルゲイと思ふぞんぶん乳くり合つたのである。ジノーヴィー・ボリースィチの姿を、どこそこで見かけた、いやどこそこで見かけたなどと、當てずつぽうを言ひだす者も出て

きたが、それでもやつぱり戻つてはこず、第一どうしたつて戻つてこられるはずのないことを、誰よりもよく知りぬいてゐるのは、當のカテリーナ・リヴォーヴナに違ひなかつた。

かうして一ト月たち、二タ月たち、三月目がすぎると、カテリーナ・リヴォーヴナは生理に異狀をおぼえた。

「どうやら私たちの元手ができたらしいよ、セリョージェチカ。つまり跡とりが出來たのさ」と、彼女はセルゲイに告げて、さつそく町會へ訴願におよんだ。かう〳〵かういふわけで、察するところどうやら——姙娠したらしくあるが、一ぱう店の仕事は、そろそろとどこほりだしてゐる。この際わたしに一家の切り盛りをお許しねがひたい——といふのである。

商賣が臺なしになるとあつては一大事である。それにカテリーナ・リヴォーヴナは、まさにその良人の正妻であるに相違ない。うち見たところ負債もない様子である。であつてみれば、よろしく彼女に家督をゆるすべきである。——といふわけで、彼女は家督をゆるされた。

さうしてめでたく、カテリーナ・リヴォーヴナの天下になつた。彼女の意志によつて、セルゲイはもはやセリョーガなどと呼び捨てにされずに、セルゲイ・フィリップィチと立てられることになつた。ところがそこへ、天から降つたか地から湧いたか、思はぬ厄介ごとが持ちあがつた。リーヴニといふ町から町長のところへ手紙が舞ひこみ、その文面によると、ボリース・チモフェ

ーエヴィチが商賣を營んでゐたのは、自分の資本一本によるものではなくて、運轉資本のなかには彼の甥にあたるフョードル・ザハーロフ・リャーミンといふ未成年者の金が、じつは彼自身の金よりも多く混つてゐたものであるから、この事業は一應せんぎを要すべく、カテリーナ・リヴォーヴナ一個の手に歸せしむべきではない、といふのであつた。この注進が舞ひこんで、町長はそのことをカテリーナ・リヴォーヴナの耳に一先づ入れたのだつたが、驚くなかれ一週間後にはなんと、遙々リーヴニくんだりから、婆さんが年端もゆかぬ少年をたづさへて、ひよつこり到着したのである。

「わたしはね、亡くなつたボリース・チモフェーイチの從妹でしてね、この子はわたしの甥のフョードル・リャーミンでござんす」——といふ挨拶。

カテリーナ・リヴォーヴナは二人を中へとほした。

兩人が到着するとから、カテリーナ・リヴォーヴナが中へ通すまで、一部始終をうかがつてゐたセルゲイの顏は、ハンカチのやうに眞つ靑になつた。

「どうかしたの?」——お客さんのあとから彼がはいつて來て、じろじろ二人の樣子を眺めながら控室に立ちどまつた時、その死人のやうな色の蒼さを見て、おかみさんが尋ねた。

「いいやべつに」と、控室から玄關へ引き返しながら、番頭は答へた。——「ただね、このリ

ヴニのお客さんがたは、氣分に障りやすぜ」——さう彼は、玄關の戸を後ろ手にしめながら、溜息まじりに洒落のめした。

「さてそこでと、一體どうしたもんですかな？」——とセルゲイ・フィリップイチが、カテリーナ・リヴォーヴナに問ひかけたのは、二人がサモヴァルに向つて腰をおろした時だつた。——

「どうやらこれぁ　ねえカテリーナ・イリヴォーヴナ、あつしらの大望もおじやんですぜ。」

「なぜおじやんなんだい、ええセリョージャ？」

「だつてさ、これで何もかも洗ひざらひ、分け取りつてことになるんでせう。その擧句に殘つたなけなしの物ぢや、さつぱり主人になり甲斐がなからうぢやありませんかい？」

「おや、セリョージャ、お前さんには少なすぎるとでも言ふのかい？」

「いいや、べつにあつしにどうのかうのと言ふんぢやありませんがね。ただちよいと心配なのは、さうなるとつまり、あつしたちの仕合せにも差し響きはすまいかと、そんな氣がするもんでしてね。」

「そりやまたなぜなのさ？　どうして仕合せまでが消えてなくなるんだい、ええ、セリョージャ？」

「ほかでもありませんがね、あんたが可愛いくつてならねえあつしの氣持にしてみりや、ねえカテリーナ・イリヴォーヴナ、あんたが正眞正銘の奥樣ぐらしをこそして貰ひたいんで、これまでみたいなミミッチイ暮らしなんぞ、まつぴら御免でさあ」と、セルゲイ・フィリップイチは答へた。——「ところが賽の目はがらり外れて、今度かうして元手が減つたおかげで、あつしたちは今までにくらべてさへ、二段も三段もさがつた暮らしをしなけりやならないんでさあ。」

「けどねセリョージャ、あたしはべつに、贅澤なんかしたくはないことよ。」

「なるほどそりやあ、ねえカテリーナ・イヴォーヴナ、あんたにして見りや、痛くも痒くもないことかも知れませんや。だがね、少なくもあつしの身にしてみりやあ、あんたを大事に思へばこそ、また一つにや、燒いたり妬んだりしてゐる世間の野郎どもの目に、あつしたちの暮らしがどう映るだらうかと思ふにつけ、なんとしてもこりや辛いことでさあ。あんたは勿論、平氣の平左でゐられるかも知れませんがね、あつしはどうも、萬一そんな工合になつたら、とても仕合せな氣持ぢやゐられさうもありませんや。」

といつた調子で、追つかけ引つかけセルゲイは、カテリーナ・リヴォーヴナを焚きつけるのであつた。つまり、自分はあのフェーヂャ・リャーミンのおかげで、みじめな男に成り下つてしまつた。それといふのも、彼女——すなはちカテリーナ・リヴォーヴナを、商人仲間ぜんたいの

前に、天晴れ堂々たる御寮人様として押しだすすべを、今ではなくしてしまつたからだ……といふのである。そして、この口說にセルゲイがつける結論はいつもきまつて、もしあのフェーヂャといふ者がなく、おまけに彼女――すなはちカテリーナ・リヴォーヴナが、良人の失踪の日からかぞへて九ケ月に滿たぬうちに、首尾よく赤んぼを生み落しさへしたら、資本は殘らずごつそり彼女のものになつて、さうなつたらもう彼ら二人の幸福には終りも涯しもあらうはずはあるまいと、結局はそこに落ちつくのであつた。

10

ところがその後、セルゲイはぱつたり跡取り息子の話をしなくなつた。セルゲイの口に、跡とりの話がのぼらなくなるや否や、フェーヂャ・リャーミンの面影は却つてはつきりと、カテリーナ・リヴォーヴナの腦裡にも胸中に根をおろしてしまつた。それのみか、彼女は物思ひがちになり、當のセルゲイに對しても、愛想のない顏を見せるやうになつた。夢寐の間だらうが、店の采配を振つてゐる最中だらうが、神に祈りをささげる時だらうが、彼女の想ひはただ一つ、――『そんな筈つてあるもんだらうか？　まつたく、なんだつてわたしは、あの子のために資本も子もなくしちまはなくちやならないんだらう？　何しろわたしは、ここまで辛い思ひをして來たのだ。……ここまで罪障ぶかい眞似までして來たのだ』と、カテリーナ・リヴォーヴナは考へるのである、――『だのにあいつは、のほほんと此處へやつて來て、濡手で粟と掻つ浚つて行くんだ。……それも一人前の男ならまだしものこと、たかが口のまはりに卵の黃味のついた子供のくせにさ。……』

はやくも初霜がおりはじめた。ジノーヴィー・ボリースィチが、相變らず消息不明だつたことは、申すまでもあるまい。カテリーナ・リヴォーヴナはむくむく太りだして、しよつちゆう眉の根を寄せてゐた。町ぢゆうもう彼女の噂でもちきりで、あのイズマイロフの若女房は、これまですつと生まず女で、だんだん瘠せこける一方だつたものが、それが急に正面がせり出して來たのは、そもそもどういふ譯だらうかと、しきりに評定し合ふのだつた。その一方、まだ頑是ない共同相續人のフェーヂャ・リャーミンは、ふわりとした栗鼠の外套を著て、屋敷うちをぶらついたり、水たまりに張つた薄氷を割つたりしてゐた。

「あれまあ、坊つちやん！　あれまあ、フョードル・イグナーチエヴィチ！」と、おさんどんのアクシーニヤが中庭を小走りに拔けながら、頓狂な聲で小言をいふのだつた、――「れつきとした商家の坊つちやんのくせしてさ、いけませんよ、水たまりを掘つたりなすつちや！」

ところがこの共同相續人たるや、自分がカテリーナ・リヴォートヴナやその意中の人にとつて、それほど目の上のたん瘤だらうなどとは露知らず、あどけない子山羊のやうにただもう跳ね廻つてゐるばかり、且つはまた夜ともなれば、おもり役のおばあさんの胸にもぐり込んで、更に一そうあどけない眠りに落ちて、この自分が誰かの邪魔になつたり、その仕合はせを削つたりしてゐようなどとは、夢にも思ひも考へもしない始末だつた。

やがての果てに、フェーヂャは水疱瘡にかかり、そのうへに感冒性の胸の痛みが併發して、そこで少年は病ひの床についた。はじめは藥草だ本草だと手をつくしてみたが、そのうちとうとう醫者を迎へにやつた。

醫者がしげしげと通つて來て、いろいろと處方をしてくれ、その藥を時間どほりに、おばあさんが手づから嚥ませるのだつたが、時にはカテリーナ・リヴォーヴナが頼まれることもあつた。

「お手數ですがの」と、おばあさんが頼むのである、——「な、カテリーヌシカ。お前さんも追つつけお母さんですわの。その通り身重になつて、神さんの思召しを待つばかりのお前さんに、こんな厄介をかけてはまことに濟まんがの、まあ宜しくお頼まうしますよ。」

カテリーナ・リヴォーヴナは、婆さんの頼みを、はいはいと聽いてやつた。婆さんが、『いたつきの床に臥してをる童子フョードルの本復』を祈願に、晩禱に出かけたり、聖パンを頂きに早朝のミサに出かけたりするたびに、カテリーナ・リヴォーヴナは病床に附添つて、のどが渇くといへば水を飲ませる、時間どほりに藥をあたへる、といふ甲斐々々しさだつた。

さてある晩のこと、婆さんは聖母宮入祭の前夜の夕拜と晩禱に出かけ、フェーヂュシカの看病をカテリーヌシカに頼んでいつた。その頃はもう少年はだいぶ快方に向つてゐた。

カテリーナ・リヴォーヴナがフェーヂャの寢間へはいつて行くと、少年は栗鼠の外套をきてベッドに腰かけて、聖者傳を讀んでゐるところだつた。

「何を讀んでるの、フェーヂャ?」と、カテリーナ・リヴォーヴナは肱掛椅子にかけて、少年にたづねた。

「聖者傳ですよ、おばさん。」

「おもしろいこと?」

「ええ、とても面白いの、おばさん。」

カテリーナ・リヴォーヴナは片手で頰杖をついて、フェーヂャのもぐもぐ動いてゐる唇を見まもつてゐたが、そのとき急に惡魔が鎖から拔けだしでもしたかのやうに、いつもながらあの考へ——つまり、この子のおかげで自分はひどい迷惑を蒙つてゐる、この子がゐなかつたらさぞさばさばするだらうに、といふ考へが、むらむらつと胸に湧いてきた。

『ほんとにさうだつたわ』と、カテリーナ・リヴォーヴナは思ふのだつた、——『この子は病氣で、藥をのんでるんだわ。……病氣のときは、えてして色んな故障が起りがちなものだ。……萬一のことがあつたところで、醫者がつい盛り違へをしたんだらう——くらゐなところで、濟んでしまふに決つてるわ。』

「そろそろ藥の時間ぢやないこと、フェーヂャ?」

「ええ、どうぞ、おばさん」と少年は答へてスプーンを一啜りすると、かう言ひ添へた、——「とても面白いですよ、おばさん、いろんな聖者さまのことが、うまく書いてあるんですよ。」

「へえ、まあたんとお讀みな」——カテリーナ・リヴォーヴナはぽつりと言つたが、冷やかな眼ざしで部屋のなかを見まはしながら、やがて霜の繪模様がべつたり附いてゐる窓に視線をとめた。

「窓の鎧戸をおろすやうに言はなくちやいけないわ」と彼女は言ふと、客間へ出てゆき、そこから廣間へ拔けて、やがて二階の自分の部屋へはいると、ちよつと腰をおろした。

五分ほどすると、その二階の部屋へ、羊皮の半外套にふかふかしたオットセイの笹べりのついたやつを着込んだセルゲイが、むつつり默つてはいつて來た。

「窓は閉めさせたかい?」とカテリーナ・リヴォーヴナは聞いた。

「閉めさせました」とセルゲイは答へると、心切りで蠟燭の心をつまみ、ストーブの前に立ちどまつた。

沈默がおとづれた。

「今夜の晩禱は、なかなかお仕舞ひにやならないだらうね?」と、カテリーナ・リヴォーヴナがたづねた。

「大祭日の前夜ですからね、お勤めは長いはずですよ」と、セルゲイが答へる。

またもや話がとだえた。

「ちよつとフェーヂャを見に行つてくるわ、一人ぼつちでゐるからね」と、腰をもちあげながら、カテリーナ・リヴォーヴナが言つた。

「一人ぼつちですつて?」——じろりと上眼づかひに、セルゲイが聞き返した。

「一人ぼつちさ」と、ひそひそ聲で彼女は答へて、——「それがどうしたの?」

ふと二人の眼から眼へ、なにか稻妻のやうなものが閃めきだした。だがもうそれつきり、お互ひに一ことも言はなかつた。

カテリーナ・リヴォーヴナは下へおりて、人氣のない部屋から部屋へと拔けていつた。どこもシンとしてゐる。みあかしが靜かに燃えてゐる。壁づたひに自分の影が走りまはる。鎧戸のしま

つた窓は、そろそろ融けはじめて、しづくが筋をひいて流れる。フェーヂャは相變らず腰かけて、本を讀んでゐる。カテリーナ・リヴォーヴナの姿を見て、彼はただかう言つただけだつた。——

「おばさん、この本をしまつて下さいな。それから濟みませんが、聖像棚にのつてゐるあの本を取つて下さい。」

カテリーナ・リヴォーヴナは甥の頼みをきいて、その本を取つてやつた。

「そろそろ寢たらどう、フェーヂャ?」

「いいえ、おばさん、僕おばあさんの歸るまで起きてゐます。」

「起きてゐたつて仕樣がないぢやないの?」

「だつて、晩禱の聖パンを頂いて來てあげるつて、約束したんですもの。」

カテリーナ・リヴォーヴナは急に青い顏をした。腹のなかのわが子が、みぞおちの邊で初めてぐるんと動いて、寒氣が胸のなかを突つぱしつたのである。暫くそのまま部屋のまん中にたたずんでゐたが、やがて冷めたくなつた兩手をこすりこすり出ていつた。

「さあ!」——彼女はそつと自分の寢室へあがると、さうささやいた。セルゲイは相變らずストーヴの前の、元の場所に立つてゐたのである。

「え?」——聞えるか聞えないくらゐの聲でセルゲイは問ひ返し、そこで唾にむせた。

「一人ぼつちでゐるのさ。」

セルゲイはぴくりと眉をうごかし、苦しさうな息づかひになつた。

「さ行かう」——ぱつと扉の方へ向きなほつて、カテリーナ・リヴォーヴナが言つた。

セルゲイは手ばやく長靴をぬぐと、かうたづねた。

「何を持つていく?」

「いらない」——氣音だけでカテリーナ・リヴォーヴナは答へると、男の手を引いてそつと導いていつた。

11

病氣の少年は、三たびカテリーナ・リヴォーヴナがはいつてくるのを見ると、ぎくりとして、本を膝へとり落した。

「どうかしたの、フェーヂャ?」

「ああ、おばさん、僕ただ、なんだかびつくりしたの」と少年は、おづおづと頰笑みながら答へて、ベッドの隅へ身をにじらせた。

「何をびつくりしたのさ?」
「だつて、誰か一緒に來たんぢやなかつた、おばさん?」
「どこに? 誰も一緒になんか來やしませんよ。」
「だあれも?」
少年はベッドの裾の方へ伸びあがつて、眼をすぼめて、今しがたおばさんのはいつて來たドアの方角を眺めたが、それで安心がいつたらしい。
「きつと、そんな氣がしただけだつたのね」と、少年は言つた。
カテリーナ・リヴォーヴナは立ちどまると、甥のベッドの枕もとの屏風板へ兩肘をついた。
フェーヂャはおばさんの顏を振り仰いで、なぜだかひどく顏色がわるいのねと言つた。
さう圖星を指されてカテリーナ・リヴォーヴナは、出まかせに空咳を一つしてみせ、期待のまなこで客間のドアを見やつた。そこではただ床板が、みしりと微かに鳴つただけだつた。
「今ね、ぼくの守り神の聖フェオドル・ストラチラートの一代記を、讀んでるところなんです。神樣に仕へるつていふのは、なるほどあれでこそ本當なんですね。」
カテリーナ・リヴォーヴナは默然と立つてゐた。
「ねえおばさん、そこへお掛けにならない、僕もう一ぺん讀んであげるから。いいでせう?」

と、甥は甘えかかつた。
「ちよつと待つて。今すぐ、廣間のお燈明を直して來ますからね」と、カテリーナ・リヴォーヴナは答へるなり、いそぎ足で出ていつた。
やがて客間で、じつに微かなひそひそ聲がした。だがそのささやきは、何せあたりが森閑としてゐるものだから、子供のさとい耳につたはつて來た。
「おばさん! それなあに? そこで誰と、そんなひそひそ聲で話してるの?」と、少年は涙ごゑで呼びかけた。——「ここへいらつしやいよ、おばさん。僕こはい。」
さう、一秒ほどすると少年はまた追つかけて、これはもう殆ど泣聲になつて呼んだが、と同時にカテリーナ・リヴォーヴナが客間で『さあ!』と言つたのが聞え、少年はそれを自分に掛けられた聲かと思つた。
「何がこはいのさ?」とカテリーナ・リヴォーヴナは、決然たる足どりでつかつかとはいつて來ながら、なにか嗄れたやうな聲で問ひかけて、そのまま客間のドアをわが身で病人の眼からさへぎるやうな恰好で、ベッドの前に立ちふさがつた。——「もうお寢」と、すぐまた續けて彼女は少年に言つた。
「だつておばさん、ぼく睡くないもの。」

「いいえ、フェーヂャ、いい子だからもうお寢なさい……時刻ですよ……もうお寢なさい」と
カテリーナ・リヴォーヴナはくり返した。
「どうしてなの、おばさん！　僕ちつとも睡くないのにさ。」
「いいえ、寢なくちや駄目、寢なくちや駄目」と、カテリーナ・リヴォーヴナは又しても聲變
りのした、おどおど聲でくり返しさま、少年の腋の下をかかへて、むりやり枕につかせた。
その瞬間、フェーヂャは狂氣のやうな悲鳴をあげた。眞蒼な顏をして跣足ではいつて來たセル
ゲイを、少年は見たのである。
カテリーナ・リヴォーヴナは自分の手の平でもつて、おびえあがつた子供が恐怖のあまり開け
た口をふさいで、かう叫んだ。——
「さ、早くおし。しつかり抑へて、じたばたさせるぢやないよ！」
セルゲイがフェーヂャの兩手兩足をつかまへると、カテリーナ・リヴォーヴナはあッといふ間
もない早業で、受難のあどけない小さな顏を大きな羽根枕でふさいで、その上から自分のぴちぴ
ちした硬い胸でもつて、ぐいと乘りかかつた。
ものの四分間ほど、部屋のなかは墓場のやうな沈默だつた。
「さ、お陀佛だ」と、カテリーナ・リヴォーヴナはささやいて、どれ後始末をしようと身をも

たげたその刹那、度かさなる犯罪を祕めて森閑としてゐるその家の四壁が、耳を聾せんばかりの
打擊を受けて、ぴりぴりと震動しだした。窓がかたつく、床板がゆらゆらする、吊るしてあるお
燈明の鎖がふるへだす、といふ騷ぎである。それのみか、壁から壁へまぼろしのやうな影が、ち
らちらする始末だつた。
セルゲイはがたがた顫へて、一目散に駈けだした。カテリーナ・リヴォーヴナはそのあとを追
つたが、ざわめき立つ物音も二人のあとを追つて來た。さながらそれは、何かしら地上のものな
らぬ威力が、罪ぶかい家を土臺骨まで搖さぶつてゐるやうだつた。
カテリーナ・リヴォーヴナの心配したのは、セルゲイが恐怖のあまり我を忘れて中庭へ駈けだ
し、そのとりみだした態度で衆人の疑念を買ひはしまいかといふことだつたが、案に相違して彼
は、まつすぐ屋根裏へ突進していつた。
階段を駈けあがりきつたところで、セルゲイは暗がりの悲しさ、半びらきになつてゐたドアに
嫌つとこさ額をぶつけて、ううんと一こゑ、いきなり下へ轉がり落ちた。迷信の手つだつた恐怖
のあまり、まつたく無我夢中だつた。
「ジノーヴィー・ボリースィチ、ジノーヴィー・ボリースィチ！」と、彼は呟やきながら、ま
つさかさまに階段をころげ落ちるのだつたが、その拍子にカテリーナ・リヴォーヴナも足をさら

はれて、とんだ道づれにされたのである。

「どこにさ?」と彼女がたづねた。

「そら、あつしらの頭のうへを、鐵板を持つて飛んで行きやしたぜ。そらそら、また來た!うわあ!」と、セルゲイがさけぶ。——「鳴りだした、また鳴りだした!」

もうその頃は、事情はすこぶるはつきりしてゐた。つまり大勢の人が手んでに窓を表から叩いてゐるのだ。なかには玄關の戸を押し破らうとしてゐる者もある。

「馬鹿だね! お起き、みつともない!」と、カテリーナ・リヴォーヴナはどなりつけると、その聲の終らぬうちにいつさんにフェーヂャのところへとつて返し、少年の死首をいかにも自然に眠つてゐるやうな恰好に枕のうへに安置してから、群衆が押しこまうと犇めきあつてゐる玄關の戸を、しつかりした手で明けはなつた。

見るもすさまじい光景だつた。カテリーナ・リヴォーヴナが、玄關をとり卷いてゐる群衆の頭ごしに見渡すと、高い塀を乘り越え引つ越え一波また一波と、見知らぬ連中が屋敷うちへなだれ込んでくる。往來はまた往來で、人ごゑが一つの呻き聲になつて立つてゐる。

カテリーナ・リヴォーヴナが呆氣にとられてゐるうちに、玄關をかこんでゐた群衆は彼女をもみくしやにして、どつと室内へ押し戻してしまつた。

ところでこの大騒ぎは、じつはかういふわけだつた。——年に十二の大祭日の前夜におこなはれる晩禱には、たかだか郡役所のある町にすぎぬとはいへ、カテリーナ・リヴォーヴナの住んでゐるやうなかなり大きな工業都市になると、教會といふ教會はぎつしり人波でうづまるのであつたが、しかもそれが、あす祭壇のしつらへられる教會だと、境内は林檎の實ひとつ落ちる隙もなくなつてしまふ。そこでは通例として、商家の若者から選抜された唱歌隊が、おなじく聲樂のアマチュアの中から選ばれた特別の音頭とりに率ゐられて歌ふことになつてゐる。

わが國びとは信心ぶかく、教會がよひがなかなか熱心であるが、したがつてまた、それ相應に藝術ずきでもある。けだし教會の諸式に莊嚴をつくし、きれいにそろつた『たへなる』の唱歌を聽くことは、彼らにとつて最も高尚でも最も清らかでもある慰めの一つなのだ。唱歌隊がうたふと聞くと、そこには忽ち町の人口の半ばちかくが押し寄せるのだが、とりわけ熱心なのは商家の若者たちである。番頭衆も子供たちも若い衆も、大小さまざまの工場の職工も、それのみか當の主人たちまでが細君同伴で、われもわれもと一つ教會へ押しかける、それがみんな、せめて表の

昇り口にでも割りこめさへしたらいい、いや焼けつくやうな炎暑の日だらうと、ぴりぴりするやうな酷寒の日だらうと、窓の下でさへ結構がまんするが、とにかく音程がいかに歌ひこなされるか、そして天馬空をゆく如きテノールが氣まぐれ千萬な前打音（フォルシラーク）をいかにやつてのけるかを、しかと聽きとどけずには氣の濟まぬ連中なのである。

イズマイロフ家の檀那寺には、聖母の宮入りを祝ふ祭壇があつたので、さてこそこの祭日の前の晩、あたかもフェーヂャの一件がおこなはれた丁度その時刻には、町ぢゆうの若者がその寺に集まつてゐたのであつたが、やがて騒々しい人波をなして退散しながら、さすがは音に聞えたテノールだけあつて天晴れな歌ひぶりだつたとか、おなじく有名なバスでありながらどこそこでトチッたとか、口々に評定しあふのだつた。

ところで、みんながみんな聲樂の批評に夢中になつてゐたかと云ふと、必ずしもさうではなくて、群衆の中にはほかの問題に興味をもつた連中もあつたのである。

「だがね皆の衆、あのイズマイロフの若女房にも、變てこな噂があるぢやないか」と、イズマイロフの店さきに差しかからうとするころ口火を切つたのは、ある商人がその蒸汽じかけの製粉所のためペテルブルグから引つ張つて來た若い機關士で、――「世間の噂ぢや、あの女はわが家の番頭のセリョーシカと明けても暮れても乳くり合つてるといふぢやないか……」

「そいつはもう、隱れもない語り草さ」と靑もめんで表を張つた手皮外套の男が應じた。――「現に今晩だつて、お寺にや姿を現ばさなかつたぢやないか。」

「どうしてお寺どころかい？　あの淫亂ものと來た日にや、すつかり性根が腐つちまつて、神さまも、良心も、人目も、何ひとつ怖いものなしだよ。」

「おい見ろよ、あかりがついてるぜ」と機關士が、鎧戸のすきから漏れる光の筋を指しながら言つた。

「ひとつ覗いて見るんだね、一たい何をしてござるか」と、二三人の聲が合はさつた。

機關士は仲間の肩二つを足場に伸びあがつて、やをら鎧戸に眼をあてがつたと思ふととたんに頓狂な大聲をあげた。――

「おいおい、みんな！　首をしめてるぞ、おい、首をしめてるぞ！」

さう言ひざま、もろ手で必死に鎧戸をたたきはじめた。十人ほどの同勢がそれにならつて、窓にとびついて拳をふるひはじめた。

みるみるうちに群衆は數を增して、先刻われわれの見たやうなイズマイロフ家の包圍が現出したのである。

「あつしが見たんです、この眼でしかと見とどけたんです」と機關士はフェーヂャの死體につ

いて證言するのだつた、——「この子をベッドの上に組み伏せて、二人して首をしめてゐたんです。」

セルゲイはその晩ただちに拘引され、カテリーナ・リヴォーヴナは上の部屋へ押しこめられて、見張りが二人ついた。

イズマイロフの家は、とても堪らぬほど寒かつた。ストーヴに火の氣はないし、ドアも片時として閉まつてゐるひまがなかつた。物見だかい連中がぎつしり群れをなして、入れ替り立ち替り押しかけたのである。一同がやつて來る目あては、お棺のなかに寢てゐたフェーヂャと、もう一つ、幅のひろい掛布で蓋ごとすつぽり蔽はれてゐる大きな棺を見ることだつた。フェーヂャの額ぎはには、聖像を描いた繻子のきれが載つてゐて、頭蓋骨を解剖したあとに殘つた赤い傷痕を隱してゐた。警察醫が解剖した結果、フェーヂャは窒息死をとげたものと判明したが、やがて死體の前へ引きだされたセルゲイは、おそろしい最後の審判のことや、悔い改めぬ者たちにくだる刑罰のことを、坊さんがやをら說きはじめると、忽ちさめざめと涙をながして、フェーヂャ殺しを正直に白狀に及んだばかりでなく、埋葬の手續きもとらずに彼が埋めてしまつたジノーヴィー・ボリースイチを掘り出して頂きたいと願ひでた。カテリーナ・リヴォーヴナの良人の死體は、乾いた砂の中に埋められてゐたのでまだ腐れ切つてはゐなかつた。そこで引つぱり出して、大きな

棺に納めた。この二つの犯罪の共謀者としてセルゲイが擧げたのはほかならぬ若い內儀（かみさん）の名だつたので、世間はふるへあがつてしまつた。カテリーナ・リヴォーヴナはいくら訊問されてもただもう『知らぬ存ぜぬ』の一點ばりだつた。そこでセルゲイに對決させて、彼女の口を割らせることになつた。男の自白をきくをはると、カテリーナ・リヴォーヴナは呆れて物も言へぬといつた風に彼をみつめたが、さりとて怒りの色は見えず、やがて平氣な顏でかう言つた。——

「この人がそれを言ふ氣だつたのなら、何もわたしが頑ぼることはありません。いかにも殺しました。」

「どうしてそんなことをしたのか？」と訊かれると、

「この人のためにです」と、うなだれてゐるセルゲイを指して答へた。

犯人は別々に收監され、そして世間の注目と憤慨の的になつたこの兇惡事件は、すこぶる手つとり早く判決がくだつた。二月の末、セルゲイと、第三級商人の寡婦カテリーナ・リヴォーヴナの二人は、刑事裁判所で刑の申渡しを受けたが、それによると、まづその居住する町の市場で笞打ちを受けたのち、二人とも徒刑地へ送られることになつた。三月のはじめ、凍てつくやうな寒い朝、刑吏はカテリーナ・リヴォーヴナのむき出しになつた白い背中の上に、定めの數だけの青むらさきのミミズ腫れをしるしづけ、つづいてセルゲイの兩肩にもきまつた本數の鞭をふるつ

た上、彼の美しい顔に徒刑の焼印を三つおしたのである。

さうした處刑のあひだ、一般の同情はどうしたわけだか、カテリーナ・リヴォーヴナよりも遙かに多くセルゲイの上に集まつた。全身あぶら汗と血にまみれて、彼は黒い處刑臺から下りるとき何べんか前へのめつたが、カテリーナ・リヴォーヴナは落着きはらつて下りてきた。ただ厚地の肌着と、ごわごわした囚人外套が、なま傷だらけの自分の背中にへばり着かぬやうに氣をくばつてゐただけのことだつた。

監獄病院で、生まれ落ちた赤んぼを渡された時でさへ、彼女は『ふん、もう用無しだわ！』と言つたきり、くるりと壁の方へ寢がへりを打つて、うめき聲一つ、泣きごと一つ立てるではなしに、ごつごつした板どこに胸をぶつけるやうに倒れたのだつた。

13

セルゲイとカテリーナ・リヴォーヴナの加はつた囚人隊の出發は、春とはいつてもほんの暦の上だけのことで、太陽がまだ下世話に云ふとほり、『ぎらぎらしちや來たが、まだぼかぽかして來ねえ』頃のことになつた。

カテリーナ・リヴォーヴナの生んだ子の養育は、ポリース・チモフェーヴィチの從妹にあたる例の婆さんにまかされた。罪の女の殺された良人の嫡男と認められた以上、この子は今やイズマイロフ家の全財産を相續すべき唯ひとりの人物となつたわけである。カテリーナ・リヴォーヴナはこれを頗る滿足に思つて、しごく冷靜な態度で赤んぼを引渡した。情熱的すぎる女の愛はえてしてさうしたものだが、子どもの父親にたいする彼女の愛は、いささかたりとも子どもの上には移らなかつたのである。

とはいへ、彼女にとつては今やこの世に、光明も暗黒も、不幸も幸福も、わびしさも喜びもなかつた。彼女にはなんにも分らず、誰ひとり愛するでもなければ、自分を愛する氣もしなかつた。彼女はただもう囚人隊の出發の日を待ちこがれ、さうなれば可愛いいセリョシカに再會するとばかりで、子どものことなんかてんで念頭になかつたのだ。

カテリーナ・リヴォーヴナの希望は裏ぎられなかつた。重たさうな鎖をひきずり、顔に焼印をおされたセルゲイは、彼女と同じ組になつて、監獄の門をあとにしたのである。

一たい人間といふものは、どんな忌はしい境遇に陷つても、なんとかしてそれに馴染まうとするものだし、どんな境遇にあつても、できるだけは自分の無けなしの喜び求める力を失はぬものである。ところがカテリーナ・リヴォーヴナにとつては、順應などといふ面倒な手數はてんから

入らなかつた。セルゲイとの再會がかなつた——彼さへゐてくれれば、徒刑地への道中も幸福に光りかがやくのである。

カテリーナ・リヴォーヴナが縞の麻袋に入れて持つて出た金目のものは、ほんの僅かだつたし、現金に至つては尚更のこと少なかつた。しかもそれをみんな、まだニジニ・ノーヴゴロドにも着かない先に、護送の下士どもに振りまいてしまつた。道中をセルゲイと肩をならべて歩かせてもらひ、闇の夜には囚人用驛舍の寒い廊下の隅つこに彼と抱きあつて小一時もゐさせてもらふ——その目こぼしにあづかるためにである。

ただし、カテリーナ・リヴォーヴナの燒印つきの情夫は、どうしたものかひどくつれない態度を見せるやうになつた。何か言ひかけては、ぶつりと默りこんでしまふ。こつそり逢瀨を樂しみたいばかりに、彼女が飮まず食はずで我慢して、ともしい財布の底から虎の子の二十五錢玉を叩れてやつてゐるのに、セルゲイは大して嬉しい顏を見せないばかりか、却つてかう言ひしたものだつた。

「なあお前さん。こんな廊下の隅つこへ俺とべたつきに出てくるよか、その下士にやつた錢を俺によこしたらいいになあ。」

「たつた二十五錢しかやりやしないのよ、セリョージェンカ」と、カテリーナ・リヴォーヴナ

が言譯をする。

「二十五錢は金のうちにやはいらないのかい？　その二十五錢玉といふ奴を、お前さんだいぶ道々拾つてゐたつけが（譯者註。投錢を拾ふのである）、ばらまいた數だつて、もう相當なもんだぜ。」

「だから、セリョージャ、ちよいちよい逢へたぢやないの。」

「ふん、飛んだこつた。さんざ辛い目をした擧句に、ちよつとやそつと逢へたところでくそ面白くもねえぢやないか！　自分の命を呪ふのが本當だ、逢曳どころの騷ぎぢやねえぜ。」

「でもセリョージャ、あたしは平氣だよ。お前さんに逢へさへすりやあ。」

「ばかなはなしさ」とセルゲイは答へる。

さうした返事を聞くたびに、カテリーナ・リヴォーヴナは思はず唇を、血のにじむほど嚙みしめる。さもなければ、ついぞ泣いたことのない彼女の眼に、無念さ怨めしさの涙が夜更けの逢瀨の闇にまぎれてあふれ出る。けれど彼女はじつと腹の虫をおさへて、じつと口に蓋をして、われとわが心をあざむかうと努めるのだつた。

そんなふうな新らしいお互ひどうしの關係のまま、二人はニジニ・ノーヴゴロドに着いた。ここで彼らの囚人隊は、やはりシベリアをめざしてモスクヴァ街道からやつて來た別の一隊と落ち合つた。

それは大人數の一隊だつたが、色々さまざまな連中がどつさりゐる中で、婦人班にすこぶる附きの上玉が二人ゐた。一人はヤロスラーヴリから來たフィオーナといふ兵隊の女房で、その大柄な身丈といひ、ふさふさした黑い渦まき髮といひ、惱ましげな鳶色の眼のうへにさながら何か摩訶ふしぎなヴェールのやうに濃い睫毛がかぶさつてゐるところといひ實になんとも素晴らしい派手な感じの女だつた。もう一人は十七になるきりりとした顏だちの金髮娘で、白い肌にはうつすらとバラ色が射し、口もとは小さく締まり、若々しい兩の頰にはエクボがあつて、金色に光る亞麻色の捲毛が、囚人用の縞入り頭布のすきから額へちらちらこぼれかかる、といつた風情だつた。この娘をその隊ではソネートカと呼んでゐた。

美人のフィオーナは、柔和なしまりのない氣性の女だつた。彼女の隊で、その肌を知らない男はまづないと言つていいくらゐだつたが、さて首尾よく彼女をせしめたところで大して恐悅がる男もなければ、彼女が次の男に全く同じ首尾をさせるところを見せつけられても、誰ひとり悲觀する者もなかつた。

「うちのフィオーナおばさんは觀音さんみたいなものさ。誰の氣もそらさねえからな」と、囚人たちは異口同音にそんな冗談口をたたくのだつた。

ところがソネートカになると、話ががらりと違ふ。

「ありやあウナギの性だよ。手のまはりをぬらりくらりするばかりで、いつかな手に入らねえや」といふ評判である。

ソネートカにはちやんと好みがあり、一歩も讓れぬ註文があつた。それも只の註文ではなく、頗るきびしい註文と言へるかも知れない。色戀を生のまま皿に盛つて出したのでは彼女はいつかな食指を動かさない。ぴりりと舌にくる藥味——つまり苦勞や犧牲が、ぜひとも入用なのだ。それに引きかへフィオーナは、例のさばさばしたロシヤ流儀まる出しで寄つてくる相手に『うるさいわね』などと劍突を食はすことさへ第一面倒くさく、自分が女一匹だといふことのほかは何一つ念頭にないのだつた。かうした女性は、集團强盜とか囚人隊とか、またはペテルブルグの社會民主主義團體とかいつた仲間では、殊のほか珍重されるのである。

さて右のやうな二人の女性が、セルゲイやカテリーナ・リヴォーヴナと一つ隊の仲間として出現したことは、後者（カテリーナ）にとつて悲劇の種になつたのだつた。

14

一つに合さつた囚人隊はニジニ・ノーヴゴロドを立つて、カザンをさして進みはじめたが、さ

うしてまだ三日とたたぬうちから、セルゲイは目に見えて兵隊の女房フィオーナの機嫌をとりだし、めでたく肱鐵砲を食はずに濟んだ。惱ましげな眼をした美女フィオーナは、持前の氣の好さから、今日まで誰にも惱みを與へなかつたと同樣に、セルゲイをも惱まさなかつたのである。三度目か四度目の宿營地に着いた日、カテリーナ・リヴォーヴナは薄暗くなるかならぬうちから例の袖の下を使つて、可愛いセリョージェチカとの逢曳の手筈をととのへ、一まづ橫にはなつたが眠らずにゐた。當番の下士がはいつて來て、そつと自分の小脇をつつき、『おい早く行け！』と耳うちしてくれるのを、今か今かと待ち構へてゐたのだ。戶が一度あいて、どの女だかすばやく廊下へ姿を消した。もう一ぺん戶があいて、やがてまた板どこから跳び起きてやはり案內人のあとについて消え失せた女囚があつた。暫くするとやつとのことで、カテリーナ・リヴォーヴナのすつぽりかぶつてゐる外套が、ぐいと引かれた。若い女は、囚人たちの脇腹でつるつるに磨きのかかつた板どこから素早くとび起き、外套を肩に羽織つて前に立つてゐる案內人をつついた。

カテリーナ・リヴォーヴナは廊下を歩いて行きながら、ただ一箇所ほの暗い燈明皿の明りがにぶく照らしてゐる場所で、二タ組だかの連中に突きあたつたが、遠見にはそこに人がゐる朋しなんぞさつぱり見えないのだつた。カテリーナ・リヴォーヴナが男囚の監房の前に通りかかると、戶についてゐる覗き窓から、忍び笑ひの聲がきこえた。

「ええ、やつてゐくさる」と、カテリーナ・リヴォーヴナの案內人は腹だたしげに呟いて彼女の肩をつかむと、隅の方へぐいと一突きし、そのまま向ふへ行つてしまつた。

カテリーナ・リヴォーヴナが手さぐりすると、片手には外套とあご鬚がさはつた。もう一方の手には火照つた女の顏がさはつた。

「誰だ？」と、セルゲイが小聲できいた。

「おや、お前さん何してるの？　誰が相手なの？」

カテリーナ・リヴォーヴナは暗がりの中で讐仇の頭布を引つぺがした。向ふはするりと橫へ拔けると、一目散に逃げだしたが、廊下の中途で誰かにぶつかつて、でんぐり返しを打つたらしい。

男囚の監房からどつと笑ひ聲がおこつた。

「わるもの！」とカテリーナ・リヴォーヴナはささやいて、男の新らしい女の頭から引つぺがしたばかりの布の端で、セルゲイの顏を打つた。

セルゲイは手を振り上げようとした。けれどカテリーナ・リヴォーヴナはひらりと身がるに廊下を駈け拔けて、じぶんの監房の戶に取りついた。男囚部屋の笑ひ聲は、彼女の後ろからまたもやどつと揚つたが、それがあんまり高かつたので、ちようど燈明皿の前に無念無想のていで佇ん

で、じぶんの長靴の先つぽに唾を吐きかけてゐた番兵が、思はず首をもたげて、

「シーツ！」と叱咤したほどだつた。

カテリーナ・リヴォーヴナは黙つて横になると、そのまま朝までじつとしてゐた。彼女は自分に向つて、『もうあの人には愛想がつきたわ』と言つて聞かせたかつたが、そのじつ内心では可愛いさ戀しさが一そうつのる思ひだつたのだ。あの人の手のひらがあいつの首の下のあたりでわなわなと顫へてゐた、のこる片手はあいつの火照つた肩を抱きしめてゐた……そんな光景が、追つても追つても目蓋を去らなかつた。

因果な女はとうとう泣きだして、ああ今この時こそあの手のひらが自分の首の下のへんにあつてくれればいい、そして殘る片手が自分のヒステリックに波うつ肩をじつと抱きしめてくれればいいと、われにもあらず心に念ずるのだつた。

「まあ、とにかくさ、あの頭の布だけは返しておくれよ」とあくる朝、兵隊の女房のフィオーナが彼女を揺りおこした。

「おや、ぢやあお前さんだつたの？……」

「後生だから返しておくれよ。」

「けどね、なんだつて仲を裂くやうな眞似をするんだい？」

20797

「仲を裂くなんて、とんでもないよ。今さらあたしに、好いた惚れたの沙汰があるもんかね！尖んがらかることは、ちつともないさ。」

カテリーナ・リヴォーヴナはちよつと思案したが、やがて枕の下から昨夜ひつぺがした頭布をとり出すと、ぽいとそれをフィオーナに投げてやり、壁の方へ寢返りをうつた。

それで氣が輕くなつた。

「チエッ」と彼女はひとりごちた、——「あんな盥に目鼻みたいな女のことで燒餅をやくなんてさ？　さつさと失せやがれ！　自分をあんな奴と並べて考へるさへ汚らはしいよ。」

「ねえ、カテリーナ・イリヴォーヴナ、いいですかい」と、あくる日の道中でセルゲイが話しかけた、——「あつしは何もお前さんに對してジノーヴィー・ボリースイチぢやねえんだし、またお前さんにしたところで、今ぢやもう大のれんの内儀さんぢやないんだ。そこんとこをよく考へてな、後生だからあまりつんつんして貰ひますまいぜ。いくら角を生やしたつて、ここぢやもう賣物にやならねえからなあ。」

カテリーナ・リヴォーヴナはそれには何とも答へず、その後一週間ほどは、セルゲイと言葉もかはさず眼も見かはさず、ただその傍を歩いていつた。そこまで面子（メンツ）をつぶされながら、それでも彼女は氣位だけは持ちつづけてセルゲイとの間にはじめて持ちあがつたこの痴話げんかに、あ

へてこつちから和解の第一歩を踏みだす氣にはなれなかつたのだ。

さて、そんなふうにカテリーナ・リヴォーヴナが、セルゲイに腹を立ててゐるうちに、セルゲイは例の色白のソネートカを相手に、むだ口を叩いたりふざけたりしはじめた。『おおわが女王さま』とか何とか言つて最敬禮をするかと思へば、にやにや笑つて見せたり、出會ひがしらにぐいと抱きしめようと隙をうかがつたりする。カテリーナ・リヴォーヴナはそんな様子を見るにつけ、胸の中はますます煮えくり返るばかりだつた。

「そろそろ仲直りをした方がいいのぢやあるまいか？」とカテリーナ・リヴォーヴナはつまづきながら、しかも足もとを見やりもせずに、ただもう思案にふけるのだつた。

だがこつちから先に折れて出るのは、今となつてはせんだつてより以上に、自尊心がゆるさない。さうかうするうちに、セルゲイのソネートカに對するじやらつきやうは益々執拗になつて、もはや衆目のみるところ、ウナギのやうにぬらりくらりするばかりで手に入らない難攻不落のソネートカも、とみに軟化の色を見せはじめた。

「ねえ、お前さんいつぞやあたしのことを怨んだつけが」と、フィオーナがカテリーナ・リヴォーヴナに言つた。——「一たいなんの悪い事をあたしがしたかね？　あたしのことなんか、あれつきりもうさばさばしたもんだけど、今度のソネートカにや油斷しないがいいよ。」

『くだらない自尊心なんか鬼に食はれちまへ。今日こそ是が非でも仲直りをしなけりやあ』とカテリーナ・リヴォーヴナは決心して、なんとか巧い仲直りのきつかけはないものだらうかと、そればかり思ひつめるのだつた。

この難局から救ひだしてくれたのは、意外にもセルゲイその人だつた。

「イリヴォーヴナ！」と、彼は小休止のとき彼女を呼んだ。——「今夜ちよいと來てくれないか。話があるんだ。」

カテリーナ・リヴォーヴナは默つてゐた。

「おやおや、まだ怒つてゐるのかい——ぢや來ないのかい？」

カテリーナ・リヴォーヴナはこれにも返事をしなかつた。

だがセルゲイのみならず、その日カテリーナ・リヴォーヴナの様子を見てゐた連中の目には、そろそろ營舍が近くなりだすとともに彼女がしきりに古參の下士につきまとひはじめて、とうとうしまひに、婆婆の人びとの投げ錢を拾ひあつめた十七錢を、その下士に握らせるのが見てとれた。

「また溜つたらもう十錢あげるわよ」と、カテリーナ・リヴォーヴナは一生けん命だ。

下士は袖口の折返しに小錢をしまつて、

「よしよし」と言つた。

セルゲイは、この談判がめでたく終了するのを見とどけると、咳ばらひをして、ソネートカに目くばせした。

「ああ、おれの大事なカテリーナ・リヴォーヴナ！」と彼は、營舍の昇り口のところで彼女を抱きしめながら言つた。——「なあみんな、なんぼ世界が廣くたつて、この女に及ぶやうなのは一人もゐないぞ。」

カテリーナ・リヴォーヴナは、嬉しさのあまり赤くなつたり息をはずませたりだつた。夜が更けたかと思ふと、そつと戸があいたので、彼女はいきなり跳び起きた。わくわくしながら、暗い廊下にセルゲイを兩手でさぐつた。

「おれのカーチャ！」と、ぎゆつと抱きしめざまセルゲイが言つた。

「ああ、あんた、憎らしい人！」と、涙ごゑでカテリーナ・リヴォーヴナは答へると、そのまま雨の唇で吸ひついた。

番兵が廊下を行つたり來たりしてゐて、ふと立ちどまつて長靴の先に唾をする。そしてまた歩きはじめる。戸のなかでは疲れた男囚たちがいびきをかき、鼻がストーヴのかげで鷲ペンをかじる。コホロギがわれ劣らじと聲をはりあげて歌つてゐる。カテリーナ・リヴォーヴナは、まだう

つとりとわが身の幸に醉つてゐる。

だがやがてその陶醉にも倦きがきて、散文が聞えだすのはけだし止むをえない。

「死にさうに痛むんだよ。くるぶしの附け根から膝がしらのとこまで、骨ががくんがくんて唸りやがるんだ」とセルゲイが、廊下の隅の床べたにカテリーナ・リヴォーヴナと寄り添つて坐りながら、ぐちをこぼす。

「どうしたらいいだらうねえ、セリョージェチカ？」男の外套の裾にもぐりながら、彼女が心配さうにきく。

「まあ仕方があるまいな、カザンの病院に入れてでももらふほかにや。」

「まあ、緣起でもない、どうしたのさ、セリョージャ？」

「だつて仕樣がないぢやないか、今にも死にさうに痛むんだものな。」

「ぢやあ、お前さんが後に殘つて、あたしだけ追つ立てられて行くのかい？」

「どうも仕方がないさ。こすれるんだ、それこそ猛烈にこすれるんだよ、まるで鎖がまるごと骨の中へ食ひこみでもするやうにな。せめて毛の長靴下でも穿いてたらいいんだがなあ」と、やや間合ひを置いてセルゲイが言ひだした。

「長靴下だつて？　そんならあたしのとこにまだあるよ、ねえセリョージャ、新らしいのが

さ。」

「いいや、それにや及ばねえよ！」と、セルゲイは答へた。

カテリーナ・リヴォーヴナはそれなりもう何も言はずに、すばやく部屋の中へ姿をかくすと、寝板のうへの自分の背負ひ袋をかきまはして、また急いでセルゲイのそばへ取つて返した時には、厚手の青い色をした旅行用の長靴下のけばけばしい側筋のはいつたものを、一足ぶらさげてゐた。

「やあ、これでもう大丈夫だ」とセルゲイは、カテリーナ・リヴォーヴナと別れしなに彼女の最後の靴下をとりあげながら言つた。

カテリーナ・リヴォーヴナはしんから嬉しくなつて、じぶんの寝板へ戻つてくると、ぐつすり眠つてしまつた。

眠つた彼女の耳にはきこえなかつたが、じつは彼女が戻つてきて暫くすると、ソネートカが廊下に出ていつて、そろそろ夜の白みだす頃に、こつそり歸つてきたのである。

それはカザンまであと二丁場といふ晩の出來事だつた。

寒々と暗雲の垂れこめた日が、時をり思ひだしたやうに吹きつける風と雨を伴なつて、雪をさへちらつかせながら、息づまるやうな營舍の門をあとにした囚人隊を、劍もほろろに出迎へた。カテリーナ・リヴォーヴナはかなり元氣な樣子で出て來たが、隊伍に加はつたかと思ふと、たちまち全身わなわなと顫へがついて、まつさをな顔になつてしまつた。眼のなかはまつ暗やみになり、節々はうづきだして、今にもへたへたと崩折れさうだつた。カテリーナ・リヴォーヴナの前に立つてゐるソネートカのはいてゐたのは、例のけばけばしい側筋のはいつた、まがふ方ないあの青い毛の靴下だつたのである。

カテリーナ・リヴォーヴナは、まつたく生きた心地もないままで、その日の道中に出でたつた。ただその兩眼は裂けんばかりにセルゲイをみつめて、片時もその顔からそれなかつた。

最初の小休止のとき、彼女は落着きはらつてセルゲイのそばへ寄つていつて、『恥しらず』とさやいた拍子に、思ひもかけずその顔へ眞向から唾を吐きかけた。

セルゲイは彼女に躍りかからうとしたが、はたの者に引きとめられた。

「覺えてろ、この女め！」と彼は言つて唾をふいた。

「だがどうも大したもんだぜ、あの女、おめえなんかにビクともしねえや」と、囚人たちがセルゲイをからかふ中で、一きは賑やかな笑ひ聲を立てたのはソネートカだつた。

ソネートカが一役買つて出たこのちよいとした一幕は、ぴつたり彼女の好みに合つたのである。

「なんにしろこのままぢや濟まねえから、さう思つてろよ」と、セルゲイはカテリーナ・リヴォーヴナに捨ぜりふを言つた。

悪天候のもとの強行軍にへとへとになつてカテリーナ・リヴォーヴナは次の營舍の板どこの上で、傷ついた胸をいだきながら、その夜ふけ不安な夢路をたどつてゐた。したがつて彼女は女囚部屋へ二人の男がはいつて來た氣配をさとらなかつた。

彼らがはいつて來ると、ソネートカが寢板から身をもたげて、無言のままカテリーナ・リヴォーヴナを指さして見せると、またごろりと横になつて、外套にくるまつてしまつた。

と、その瞬間、カテリーナ・リヴォーヴナの外套がぱつとその頭にかぶさつたかと思ふと、目の粗いシャツ一枚の彼女の背なかへ、二重により合はせた縄のずんぐりした先つぽが、百姓のくそ力いつぱいに、ぴしりぴしりと振りおろされはじめた。

カテリーナ・リヴォーヴナは、きやつと悲鳴をあげたが、なにせ外套をすつぽり頭にかぶされてゐるので、聲はさつぱり聞えない。その兩肩には屈強な囚人が坐りこんで、兩腕をがつしり抑へてゐた。

「五十」——やつと數へ終つたその聲は、誰が聞いても紛ふかたないセルゲイの聲だつた。そこで深夜の訪問者たちは、ぱつと戸のそとへ掻き消えてしまつた。

カテリーナ・リヴォーヴナは頭の蔽ひを拂ひのけて、はね起きた。誰もゐなかつた。ただその邊で、誰かが外套を引つかぶりながら、さも小氣味よげにヒッヒと笑つてゐるだけだつた。

カテリーナ・リヴォーヴナにはそれがソネートカの笑ひ聲だとわかつた。

かうなつてはもう、通り一ぺんの口惜しさではなかつた。その刹那カテリーナ・リヴォーヴナの胸に煮えくり返つた憤念も、無邊無量のものがあつた。彼女は無我夢中で前へつき進んで、とつさに抱きとめたフィオーナの胸へ、おなじく無我夢中で倒れかかつた。

そのむつちりした胸は、ついこのあひだカテリーナ・リヴォーヴナの不實な情人に、みだらな歡樂を滿喫させたものに違ひなかつたが、今や彼女はほかならぬその胸の上で、じぶんのやるせない歎きを、泣いて泣いて泣きつくさうといふのである。まるで母親にすがる子どものやうに、愚かなだらけきつた戀仇にぴつたり抱きついてゐるのである。今ではもう二人は同格だつた。二人とも同じ捨値をつけられて、あつさり拋りだされたのだ。

二人は同格なのだ！……行きあたりばつたりに身をまかせるフィオーナと、愛慾の悲劇を身をもつて演じつつあるカテリーナ・リヴォーヴナとが！

とはいへカテリーナ・リヴォーヴナは、もうちつとも口惜しくなかつた。すつかり泣きつてしまふと、彼女は石のやうな無表情な顔になつて、木彫り人形さながらの落着きすました物ごしで、點呼に出る仕度をはじめた。

太鼓がタッ・タララッ・タッと鳴ると、營庭へ囚人たちがなだれを打つて出てくる。足に鎖のついた者、足に鎖のつかない者、セルゲイもゐる、フィオーナもゐる、ソネートカもゐれば、カテリーナ・リヴォーヴナもゐる。分離派信者がユダヤ人と一つ鎖につながつてゐるかと思へば、ポーランド人とタタール人の二人三脚もある。

みんな集合してしまふと、やがてどうにか隊伍らしいものを組んで、さて出發だ。

ゆううつ極まる光景である。世間からはもぎ離され、前途に明るい望みの片影をすら抱くことのかなはぬ人間の一團が、どろ道の冷たい黒いぬかるみの中に、足をとられとられ動いて行くのだ。あたり一面、見るも怖ろしいほどのあさましさだ。涯しもないぬかるみ、灰色の空、濡れそぼつた柿の裸木、そのひろがつた枝々には羽を逆だてた鴉のむれ、風がうめく、いきりたつ。かと思ふと叫えたてる、わめいて過ぎる。

聞くだけでもう魂がかきむしられる思ひのするその地獄のやうな風音こそ、あたり一帶のむさんな光景に瞳を點ずるものなのだが、その音のなかからは、聖書にあるヨブの妻の忠告が響いて

くるやうだ、——『汝が生まれし日を呪ひて死ねよ』と。

この言葉に耳をかたむける氣になれず、これほどの悲境に陷つてもなほ死ぬといふ考へに心をそそられるどころか却つて恐怖を感じるやうな人は、その叫えたける聲を消すために、何かもつとおそましいものに一生けんめい縋りつかなければなるまい。さうした事情を、單純な人間は實によく心得てゐるものだ。そこで彼らは、持前の素朴な野獸性を思ふさま發揮して、馬鹿のかぎりをつくしだす自分を嘲弄し、他人を愚弄し、人情を冷笑する。それでなくても大して柔和な人間でもなかつた彼らは、ここに至つて二層倍も兇暴になるのだ。

*　*　*

「どうですね、おかみさん？　あひ變らず　方さまには、ご機嫌うるはしくいらせられますかい？」——そんな鐵面皮な挨拶をセルゲイがカテリーナ・リヴォーヴナに向つてしたのは、ゆうべ泊つた村がびしよ濡れの丘のかげにだんだん隱れて、つひに囚人隊の眼界から沒し去つた頃だつた。

さう言ふと、彼はくるりとソネートカの方へ向き直つて、じぶんの外套の裾で彼女をくるんでやり、高らかな裏聲でこんな歌をうたひだした。

小窓のなかの　小暗いところで
　亞麻色あたまが　ちらつくよ。
まだ起きてるね　わが惱みの種
　眠られないのか　にくいやつ。
裾ですつぽり　くるんでやらうよ
　人目にかからぬ　用心に。

さう歌ひながらセルゲイは、ソネートカを抱きしめて、隊のみんなの目の前で、音たかだかとキスをした。……

カテリーナ・リヴォーヴナはその一部始終を、見てゐたとも言へ、見なかつたとも言へる。彼女は歩いてこそゐたけれど、實はもう生きた心地もなかつたのだ。みんなは彼女をつついたり小突いたりして、セルゲイがソネートカを相手にいちやついてゐる有様を、見せようと節介を焼きだした。彼女はいい笑ひ物にされたのである。

「觸らずにおおきよ」とフィオーナは、つまづきつまづき歩いてゆくカテリーナ・リヴォーヴナを隊の誰かがからかはうとする度ごとに、さう言つて彼女をかばふのだつた。「お前さんたちには分らないのかい、この悪黨め、この人がひどく加減のわるいことがさ?」

「てつきり、おみ足がずぶ濡れになつたせゐだらうな」と、若い男囚がまぜつ返した。

「當りめえよ、歷乎とした商家のお生まれでいらせられる。おんば日傘でお育ちあそばしたんだぞ」と、セルゲイが合の手を入れる。

「それや勿論、せめてあのおみ足に、もそつと温々した靴下でもお穿かせ申したらなあ、さうなりやあ、これほどのお惱みもあるめえにさ」と彼が言葉をつづけた。

カテリーナ・リヴォーヴナは、はつと目が覺めたみたいだつた。

「まむし、毒へび!」と、彼女は勘忍ぶくろの緒を切らして口ばしつた、——「笑ひたいならいくらでもお笑ひ、まむしめ!」

「いいや、俺あね、おかみさん、何も笑ふのなんのつて言ふ段ぢやないんだぜ。ただねこのソネートカの奴がとても上等な靴下を賣りたがつてるんでね、そこで一つ、おかみさんそれを買つたらどうだらうと、かう思つただけなんだがね。」

おほぜいしてドッと笑つた。カテリーナ・リヴォーヴナは、ゼンマイ仕掛の自動人形みたいに歩いてゐた。

天氣はますます悪くなつて來た。空をおほつてゐる灰色の雲から、水氣の多いぼた雪が落ちは

じめて、地面にふれるかふれないうちに融けては、底なしのぬかるみを益々ふかくした。とうとう行く手に、どんよりと鉛いろをした帯が見えはじめた。その向ふ側は見わけがつかない。この帯がつまり、ヴォルガ河だつた。ヴォルガの上には風が吹き廻つて、ゆつくりと大きな口をあけてもちあがる暗い波を、前へ押したり後ろへ引いたりしてゐる。

全身ぬれ鼠になつて、ふるへあがつた囚人の一隊は、のろのろと渡し場にたどりついてそこで停止して渡し船を待つた。

これもずぶ濡れの黒い渡し船がやつて來た。乘組員の案內で、囚人たちが乘りこみはじめる。

「なんでもこの渡し船にや、誰かヴォートカをこつそり賣つてくれる奴がゐるつて話だぜ」と、ある男囚が言ひだしたのは大きなぼた雪がさかんに降りかかる渡し船が岸をはなれて、そろそろ荒れだした河の面に立つうねりのまにまに、揺れはじめた頃だつた。

「さうさな、さしづめこんな時こそ、ちよいと一杯やるなあ悪くあるめえな」とセルゲイは應じて、ソネートカの御機嫌とりに、カテリーナ・リヴォーヴナをいぢめる手をゆるめず、——「どうだい、おかみさん、昔のよしみに免じて、一ぺえ買つちやあ貰へまいかね。まあさう吝つたれるなつてことよ。昔やそれでも、おれの色女ぢやねえか。おたがひ大あつあつだつた頃にや、仲よく遊び廻りもしたし、秋の夜長をしんみり語り明かしたこともあるぢやねえか。お前さんの身うちの誰かれを、お寺さんの厄介にならずに、二人であの世へお送り申したこともある仲ぢやねえか。」

カテリーナ・リヴォーヴナは、寒くつて全身がくがく震へてゐた。いや、びしよ濡れの着物をとほして骨までも沁みこむ寒さばかりでなくて、カテリーナ・リヴォーヴナの體內には、何かもつと別の現象までが起つてゐた。頭が燃えるやうにかつかとしてゐた。瞳孔はひろがつて、ぎらぎらする光をちらつかせながら、じいつと浪のうねりを見つめてゐた。

「ヴォートカはいいわね、あたいも御相伴したいわ。まつたく、かう寒くつちやりきれないい」と、ソネートカが鈴を振るやうな聲を出した。（譯者註　ソネートは鈴の意）

「ねえ、おかみさん。おごれよ、なんだい！」と、セルゲイが喰ひさがる。

「なんぼなんでも、それや阿漕だよ！」とフィオーナが思はず口走つて、咎めるやうに頭をふり立てた。

「あんまりやると男がさがるぜ」と、ゴルヂューシカといふ少年囚が、兵隊の女房に助太刀をする。

「ほんとだよ。お前さんとこの人との相對づくなら、何を言はうと勝手だらうがね、なんぼこの人だつて少しや傍目といふものがあらうぢやないか。あんまり阿漕だよ。」

「へつ、しやら臭えや、この冬瓜の化けものめ！」と、セルゲイがフィオーナに食つてかかる。——「阿漕たあ、一體どつちのこつた！　俺あ何も、そんなこと言はれる覺えはねえや！　もともとこんな女におつ惚れた俺でもあるめえしさ……とにかく今になつちやあこんな赤禿げだらけの猫婆アの面よか、ソネートカのぼろ靴下の方がよつぽど有難えや。ええどうだい、これに何か文句があるかい？　浮氣がしたけりや、この口ん曲がりのゴルヂューシカでも可愛がるがいいや。さもなけりや……（と彼は、袖無し外套にくるまつて、徽章のついた軍帽をかぶつてゐる乘馬の老いぼれ士官の方を顎でしやくつて見せ、ことばを續けた——）さもなきや、いつそあの護送さんにでもべたついたらよからうぜ。あの外套にすつぽりくるんで貰や雨にだけは濡れずに濟まうといふもんだ。」

「おまけにみんなが、士官の奥さんと呼んでくれるだらうしね」と、ソネートカが鈴をふる。

「あたりめえよ！……それに靴下だつてもお茶の子さいさい手にはいるぜ」と、セルゲイが相槌をうつ。

カテリーナ・リヴォーヴナはべつに言葉を返さなかつた。彼女は相變らずじつと波を見つめて、唇をふるはしてゐた。セルゲイの下卑た長廣舌の合間々々に、彼女の耳には、かつと口をあいたりまた閉まつたりする川浪のなかから、唸り聲や呻き聲がきこえてくるのだつた。と突然、

ざざーッと崩れかかつた浪がしらの中から、ボリース・チモフェーイチ老人の青い顏が現はれたかと思ふと、つづく波間からは、うなだれたフェーヂヤを抱きしめた良人のすがたが、ひよいと覗いてゆらゆらした。カテリーナ・リヴォーヴナは祈禱の文句を思ひださうとして唇を動かしたが、その唇はわれにもあらず、「お互ひ仲よく遊び廻りもしたし、秋の夜長をしんみり語り明かしたこともあるぢやねえか。むごい殺し方をして、身うちの誰かれをあの世にお送り申したことも あるぢやねえか」——と、ささやくのだつた。

カテリーナ・リヴォーヴナはわなわなと震へた。それまで定まらなかつた彼女の眼ざしは、しだいに据わりはじめて、兇暴な色を帶びてきた。兩の腕が一ぺん二へん、當てもなく中有にさしのべられたが、またがくりと落ちた。また暫くすると——不意にその全身がふらつきだして、暗い波の面にじつと見入つたまま、前へかがみこんだかと思ふと、いきなりソネートカの兩足をひつつかんで、相手もろともさつとばかり船ばたから身をおどらした。

一同は唖然として聲をのんだ。

カテリーナ・リヴォーヴナは浪がしらにちよつと姿を見せたが、またもぐつてしまつた。つぎの波がソネートカを表へせり出した。

「鉤竿だ！　鉤竿を投げろ！」と、渡し船の上でわめき立てる。

眞珠の頸飾り

——クリスマスの物語——

長いロープのついた重たい鉤竿が、宙を舞つて、水に落ちた。ソネートカはまた見えなくなつた。ものの二秒ほどすると、流れに乗せられてぐんぐん船から離れてゆく彼女は、もう一ぺん兩手をふりあげた。が、それと同時に、べつの波間からカテリーナ・リヴォーヴナの姿がほとんど腰のへんまで水面にあらはれて、さながらぴちぴちしたカマスがひよわい小鯉に飛びかかるやうに飛びついたかと思ふと、二人はもう二度とふたたび姿をあらはさなかつた。

さる教養ある家庭で、友人たちがお茶のテーブルをかこみながら、文學談をやつてゐた。やがて仕組みとか筋とかいつた話になる。なぜわが國では、さうした方面がだんだん貧弱でつまらなくなつて行くのだらうと、口々に慨歎する。わたしはふつと思ひ出して、亡くなつたピーセムスキイの一風變つた意見を披露した。彼によると、さうした文學上の不振は、まづ第一に鐵道がふえて來たことと關係がある、けだし鐵道は商業にとつてこそ有益だが、文藝にはむしろ害をなす、といふのである。

「今日の人間はずいぶん方々を旅行してまはるが、ただそれが手つとり早い暢氣な旅なのだ」と、ピーセムスキイは言ふのである、「だから別にこれといふ強烈な印象ものこらないし、とつくり觀察しようにも、相手の物もなければ暇もないから、——つまり上つ滑りになつてしまふ。だから貧弱になるわけさ。ところが昔はモスクヴァからコストロマーまで、替馬なしで乘りとほす

なり、乘合馬車で搖られて行くなり、宿場々々で乘り換へて行くなりしてみれば、——とんだもうろう駄者にぶつかることもあらうし、圖々しい相客に出くはすことも、はたごの亭主が惡黨で、おさんどんが鼻もちのならぬ不潔もの、といつた非運に際會することもあるわけで、たんと色んな目にあへるといふものである。おまけにとうとう堪忍ぶくろの緒が切れたとして（たとへばスープの中に何か變てこなものがはいつてゐたのでもいい——）、そこでそのおさんどんを怒鳴りつけてでもみたまへ。向ふはその返禮に、十そう倍もの惡態を投げ返してくることになつて、その印象たるやちつとやそつとでは拔け出られぬ深刻なものがあらうことは、まづもつて請合ひである。しかも印象が、ぐつぐつと胸の底のへんに疊なはつてゐる有樣は、一日一晩オーヴンの中へ入れつぱなしで醱酵させた麥粥にことならず、——だからつまり、書く物のなかへだつて、ぐつぐつと濃く出てくるのは理の當然であるところで今日ぢや、さうした一切が鐵道式のテンポで運ばれるのだ。皿を手にとる——問答無用である。口へ拋り込む——嚙むなんて暇はない。ヂリヂリヂーンと發車のベルが鳴りだせば、もうそれで萬事休すだ。汽笛一聲、またポッポッポと出てゆく。そして殘る印象といへばせいぜい、ボーイが釣錢をちよろまかしをつたといふことぐらゐなもので、そいつを腹の虫のをさまるまで取つちめてやらうにも、今や時すでに遲しなのである」云々。

すると客の一人が乘りだして、なるほどピーセムスキイの見方は一應おもしろいが、惜しむらくは當つてゐないと言ひ、ディッケンズの例をもちだした。この作家は、すこぶるスピード旅行のはやる國でものを書いたのだが、それでゐてその見聞も觀察もなかなか豐富で、その小說の筋には、別段これといつた內容の貧寒さは見られないではないか、といふのである。

「もつともこれは、彼の書いたクリスマス物語だけは例外ぢやあるけれどね。勿論あれだつて立派なものにちがひないが、なんといつても單調なところがある。とはいへ、作者の罪を鳴らすのきは不當だよ。なにしろあれは、形式があんまり固くきつちりと決まつてゐて、作者が身うごのとれない感じのする、そんな文學上の一ジャンルなのだからね。いやしくもクリスマス物語と名乘る以上は、ぜひともクリスマスの晚におこつた出來ごと——つまり御降誕から洗禮祭までに起つた事件をあつかはなけりやならんし、それにまた、ある程度までファンタスティクたることを要するし、なんらかの敎訓（よしんばそれが、有害なる迷信を打破するといつた性質のものにしてもだ——）を含まなければならんし、も一つおまけに、是が非でもめでたしめでたしで終らなければならんのだ。ところが人生には、さうしたお誂へ向きの事件はまことに少ないのだから、作者は否でも應でも、その註文にあてはまつた筋書をひねり出したり、でつち上げたりしなければならん羽目になる。だからつまりタリスマス物語には、作爲の跡だの單調さだのが、ひどく目

につくことになるのさ。」

「なるほどね。だが僕は、必らずしも君のその見解には贊成できないね」と、三人目の客がそれに應じた。これはなかなか立派な人物で、その發する一言はよく肯綮にあたるものがあつたのである。だから一同は、よろこんでその聲に耳をかたむけた。

「僕はかう思ふな」と彼はつづけた、——「もちろんクリスマス物語には一定のワクはあるにしてもそのワクの中で色々と趣向を變へることが出來るはずだし、その時代なり時の風俗だのを反映させて、興味津々たる多彩多様さを發揮できもするはずだとね。」

「だが、君はその意見を、いつたい何をもつて實證するつもりかね？　なるほどと思はせるためには、君自身ひとつ、ロシヤ社會の現代生活のなかから、そんな事件をとり出して見せてくれるべきだね。時代とか現代人とかいふものも立派に反映してをり、しかもそれなりにクリスマス物語の形式にも註文にもあてはまつて、——つまりちよいとファンタスティクでもあり、なんらかの迷信の打破にも役だつものであり、おまけにめそめそしたのぢやない、明るい結末のついたものでもある、——そんな奴をね。」

「おやすい御用さ。お望みとあらば、そんな話を一つお目にかけてもいいがね。」

「そいつは是非たのむぜ！　ただね、これだけは一つ、しつかり願ひたいんだが、その話といふのは、ほんとにあつた事でないと困るぜ！」

「ああ、そこは大船に乘つたつもりでゐたまへ。僕がこれから話さうといふのは、本當も本當、正銘いつはりなしの實話な上に、その登場人物がまた、僕にとつて頗る親密かつ親愛なる連中なのさ。實をいふとその主人公は、ほかならぬ僕の實の弟なのだ。あれは、たぶん諸君もご承知かと思ふが、なかなか心がけのいい役人でね、それなりにまた、世間の評判もなかなかいい男なんだよ。」

一同は異口同音に、いかにもそれは兄貴のいふ通りだと相槌をうつた。のみならずその多くは、この語り手の弟なる人物は、まつたく一點の非の打ちどころもない立派な紳士だと、太鼓判をおしさへしたのである。

「でまあ」と、相手はこたへた、——「つまり僕は、諸君が立派な紳士だと言つてくださる、その男のことを話さうといふわけなのさ。」

2

さう、三年まへの話だがね、弟はクリスマスの休みを利用して、田舍から僕のうちへ泊りに出

てきた。當時あいつは、田舎まはりの役人をしてゐたのだ。ところでその様子が、いつにない猛烈な劍幕でね、――乘り込んでくるなり、いきなり僕や家内にむかつて、是が非でも「女房を持たせてくれ」と切りだしたものなのさ。

僕たちは初めのうち、冗談だらうぐらゐに思つてゐたところが、どうして奴さん大まじめで、「女房を世話してください、後生です！　このやりきれない孤獨地獄から、ぼくを救つてください！　獨身生活はもうつくづく厭になりました。田舎の連中の小うるさい陰口や根も葉もない取沙汰には、もうこりこりです。――自分の家庭といふものが欲しいんです。夜のひと時を自分のランプのほとりで、可愛い女房と差し向ひになりたいんです。女房を世話してくださいよ！」と、しつこくせがみつづける始末なのさ。

「だがまあ、さう足もとから鳥の立つみたいなことを言つたつて」と、われわれは一應なだめざるを得ない、――「なるほどそれは一々結構なことだし、お前さんの好きなやうにするがいいさ。神様から良緣をさづかつて、結婚するのがよからうさ。ただね、さうせつかちなこごと言つても困るなあ。だいいち、お前さんの氣持にもすつぽりはまり、先方でもお前さんが大好きだといふやうな娘さんを、まづ捜してかからなくちやなるまいぢやないか。それには何といつても時間がかかるよ。」

ところが弟の返事は、

「だからさ、時間はたつぷりあるぢやないですか。聖期節の二週間は、結婚式をあげるわけには行かないのですから、その間に緣談を決めてくだされればいいんですよ。そして洗禮祭の晩になつたら結婚式をあげて、すぐその足で田舎へたつんです。」

「おやおや」と僕は呆れて、――「だがね、お前さん、獨身生活のわびしさで、少々氣がふれんぢやないかね。（『精神病』なんて氣の利いた言葉は、當時まだ使はれてゐなかつたものでね。）僕はかう見えても、お前さん相手にマンザイの眞似をしてゐられるほどの閑人ぢやないんだよ。これからすぐ、裁判所へ出勤せにやならん。まあ僕の留守のまに、うちの女房を相手に、好きなだけ夢物語をやるがいいさ。」

僕にしてみれば、弟の話はどだい問題にならんナンセンスか、まあさうでないまでも、とにかく實現性のすこぶる薄い一片の空想としか思へなかつたのだ。ところが豈はからんや、その日の夕飯どきに歸宅してみると、柿はすでに熟してゐた次第なんだ。

家内が僕に言ふには、――

「あのね、マーシェンカ・ヴァシーリエヴナさんが見えましてね、晴着の寸法をとるんだから一緒について行つてくれと仰しやるんですの。そこでわたしが着替へをしてゐますと、そのひま

に二人は（といふのはつまり、弟のやつとその娘さんだがね――）お茶のテーブルで差向ひになつてゐましたの。そのあとで弟さんは、『そら、あんな素晴らしい娘さんがゐるぢやないか！　この上なんのかんのと選り好みをすることがあるもんですか、――あの人を貰つてください！』つて、そりやもう大騒ぎなんですの。」

僕はかう返事をした、――

「さてさて、舍弟はいよいよ以て御亂心と決つたわい。」

「まあ、なぜですの」と、家內は逆襲してきた、――「なぜこれが『御亂心』にきまつてゐますの？　常ひごろ、あんなに尊重してらしたことを、なんだつていきなり手の裏を返すやうなことを仰しやるの？」

「僕が尊重してたつて、そりや一體なんのことだい？」

「そろばん拔きの共鳴よ、心と心の觸れ合ひよ。」

「いやはや、おつ母さんや」と僕は言つたね、――「さうは問屋が卸さんぜ。それが良いも悪いも、時と場合によりけりだよ。その觸れ合ひといふやつが、何かしらかうはつきりした意識、つまり魂や心のはつきり目に見えた長所美點といつたものの認識――に元づいてゐるやうな場合なら、それももとより結構さ。だがこいつは、――一體なんのことかね……一目みたとたんにも

う、一生涯の首かせが出來あがつちまふなんて。」

「そりやまあそんなものだけど、ぢや一體あなたは、あのマーシェンカのどこが惡いと仰しやるの？――あの子は現にあなたも仰しやる通りの、頭のいい、氣だての立派な、親切で實意のある娘さんぢやありませんか。それに、あの子の方でも、弟さんがすつかり氣に入つてしまつたのよ。」

「なんだつて！」と僕は思はず絶叫したね、――「するとお前はもう、あの子の氣持をまで、まんまと確かめたといふわけかい？」

「確かめたと言つちや、なんですけれど」と家內はちよつと言ひよどんで、――「でも、見れば分るぢやないの？　愛といふものは、憚りながらわたしたち女の領分ですわよ、――ちよつとした芽生えだつても、一目みりや一目瞭然ですわ。」

「いやはや君たち女といふものは」と、僕は言つてやつた、――「みんな實に卑劣きはまる仲人だなあ。誰かを一緒にしさへすりやそれでいいんだ。その先がどうならうと、――あとは野となれ山となれなんだ。自分の輕はずみからどんな結果になるか、少しは空恐ろしく思ふがいいぜ。」

「だつて、ちつとも」と家內はすましたもので、――「空恐ろしいことなんかありませんわ。何しろわたしは、二人ともよく知つてゐますもの。弟さんはあの通り立派な紳士だし、マーシャは

マーシャで、あの通り可愛いらしい娘だしさ。おまけに二人は、ああしてお互ひの幸福のため一生けんめい盡しますつて約束した以上、きつと約束は守るにちがひないわ。」

「な、なんだつて！」と、僕はわれを忘れて情けない聲を立てた。——「あの二人は、もう約束まで交したのかい？」

「ええ」と家内は答へる、——「そりやあ、まだ口に出してこそ言なかつたけど、そこは以心傳心といふものよ。二人とも趣味も好尚もぴつたり合つてるわ。だからわたし、今晩弟さんと一緒に先方へ出かけていつて來ますわ。——弟さんはきつと老人夫婦の氣に入るにちがひないし、その先は……」

「へえ、その先は？」

「その先は、二人でいいやうにすればいいわ。ただね、餘計な口を出さないで下さいよ。」

「いいとも」と僕はいふ、——「いいとも。そんな馬鹿々々しい問題に口を出さずにゐられるのは、すこぶる有難い仕合せだよ。」

「馬鹿げたことなんかになるもんですか。」

「それは結構。」

「とてもうまく行くにきまつてるわ。幸福な夫婦ができあがつてよ！」

「ありがたい仕合せだな！　ただしだね」と僕は言ふ、——「弟のやつもお前も、これだけは一應心得ておいても無駄ぢやあるまいが、マーシェンカの親父さんは、世間に誰知らぬ人とてない金持の握り屋だぜ。」

「それがどうかしましたの？　殘念ながらわたしも、その事だけは反對の餘地はありませんけど、かといつて別だんあのマーシェンカが、立派な娘さんでなくなるわけでも、立派な嫁さんになれなくなるわけでも、ないぢやありませんか。あなたは、きつと忘れておしまひになつたのね、ほら、二度も三度もわたしたちが論じ合つたあの事を。ねえ、思ひだしてごらんなさいな、——トゥルゲーネフの小説に出てくる立派な女たちは、選りに選つてみんな、すこぶる俗つぽい兩親を持つてゐるぢやありませんか。」

「いや、僕の言ふのはそんな事ぢやないんだ。いかにもマーシェンカは、實に立派な娘だよ。ところが考へてごらん、あの親父と來たら、上の二人の娘を嫁にやるとき、婿さんを二人とも一杯くはせて、びた一文つけてやらなかつたんだぜ。——マーシャにだつて、一文もよこさないに決つてるよ。」

「どうしてそれが分りますの？　あの親父さんは、あの子が一ばん可愛いのよ。」

「いや、おつ母さんや、まあたんと皮算用をしたけりやしなさいだがね。嫁にやつてしまふ娘

にたいするあの連中の『格別の』愛情なるものが、一體どんなものだか、ちやんと分つてゐるぢやないか。みんな一杯くはされるんだよ！　それにまた、あいつにして見りや、一杯くはさずに濟ますわけには行かんのさ、——何しろそれが、あの男の立つてる土臺なんだからねえ。世間のうはさぢや、あの男が財産を築きあげたそもそもの始まりは、非常な高利で抵當貸しをしたことだといふぢやないか。人もあらうにそんな男から、お前は愛情だの氣前のよさだのを捜し出さうとかかつてゐるんだよ。參考までに言つておくが、上の娘たちの婿さんは、二人とも一筋繩ではいかんなかなかの曲者なんだ。それでゐながらまんまとあの男に一杯くはされて、今日ぢや犬猿もただならざる仲になつてゐるとすりや、ましてやうちの弟なんぞは、何しろ子供の頃からおつそろしく御念の入つた弱氣な奴だから、指をくはへて追つ拂はれることなんか、朝飯まへだぜ。」

「一たいなんのことですの？」と家内は聞きかへす、——「その指をくはへる、つて仰しやるのは？」

「まあ、おつ母さんや、そらつとぼけなさんな。」

「いいえ、そらつとぼけてなんかゐませんわよ。」

「ぢやお前、知らないのかい、『指をくはへる』つてことを？　マーシェンカにはびた一文よこすまいつてことさ、——困るといふのは、つまりそこだよ。」

「まあ、そんな譯でしたの！」

「うん、その通りさ。」

「その通り、全くその通りだわ！　そりやまあ、そんなことかも知れませんけど、ただわたしはね」と家内はいつかな敗けてはゐず、——「たとへ持參金はなからうと、ちやんとした嫁さんを貰ふことが、あなたのお考へだと『指をくはへる』ことにならうとは、ついぞ今まで思ひも及ばなかつたわ。」

どうです、いかにも女らしい可憐な筆法、ないし論理ぢやありませんか。ひらりと體をかはす拍子に、お隣づきあひの誼みで、ちくりと一本くるんですからねえ。……

「僕はなにも、自分のことをとやかく言ふんぢやないぜ。……」

「いいえさうです、ぢや一體なぜ……？」

「いやはや、そりや酷すぎるぜ、ねえお前（マ・シェール）！」

「何がひどすぎますの？」

「なにが酷すぎるつて、僕が自分のことなんか一言も言やしないのにさ。」

「でも、考へてらしたわ。」

「いいや、だんぜん考へてもゐなかつた。」

「ぢや、想像してらしたわ。」
「なにを、ばかな。夢にだつて想像してゐなかつたよ！」
「まあ、なんだつてそんな金切り聲をお立てになるの？」
「べつに金切り聲なんか立てやしないさ！」
「だつて『なにを』だの……『ばかな』だのつて。……そりや一體なんですの？」
「それはお前、お前の言ふことを聞いてると、ついむしやくしやしてくるからさ。」
「へえ、それで分つたわ！　そりやわたしが金持の娘で、持參金をかかへて來たら、さぞよかつたでせうとも……」
「げッ、むむゥ！……」
といつた次第でね、僕はとうとう嚇として、亡くなつた詩人トルストイの言草を借用すれば、『初めは神の如く、終りは豚の如し』の體たらくになつちまつたのさ。僕はさも憤然とした様子をして、——けだし正直のところ、あらぬ濡衣をきせられた感じだつたからね、——頭をふりふり、くるりと相手に背を見せると、書齋へ引揚げてしまつた。それも、いざ後ろ手にドアをしめる段になつて、なんとしても腹の虫がをさまらず、——わざわざドアをまた明けて、かう言つてやつた、——

「おい、なんぼなんでも卑劣だぞ！」
すると家内は澄まし返つて、
「憚り様、あなた。」

3

「ええ、くそ、なんてざまだい！　おまけにそれが、とつても幸福な、ほんの一瞬の間だつて波風ひとつ立つた例しのない、夫婦生活四年間のあげく果てと來てやがる！……忌々しい、業つ腹だ——やり切れん！　なんて馬鹿げたこつたらう。しかも事の起りはそもそも何だ！……みんな弟のやつのせゐぢやないか。おまけにこの俺が大人氣もなく、こんなにカンカンに息み返るとは、なんてざまだい！　弟のやつはもうちやんと一人前の大人で、どこの誰が好きにならうと、どこの誰を嫁にもらはうと、じぶんで判斷する資格があるわけぢやないか？……やれやれ、今どきぢやもう、生みの息子にだつてそんな指圖をするのは流行らんといふのに、未だに弟は兄貴の言ひなり放題にならなきやならんと云ふのかい。……第一そんな監督をする權利がどこにある？……そもそもこの俺が、これこれの嫁をもらへば行末はこれこれになるなんて、確信をもつて豫

言できるやうな、千里眼になれるとでもいふのかい？……マーシェンカはまつたく素晴らしい娘だし、うちの女房だつてなかなかいい女ぢやないか？……おまけにこの俺だつて、有難いことに、世間から後ろ指をさされたことはない。だのにその俺たち夫婦が、四年もつづいた幸福な、束の間だつて波風ひとつ立つた例しのない暮らしのあげくに、かうして熊公お鍋みたいに悪態の吐き合ひをしちまつたんだ。……それといふのも元を糺せば、一向くだらん、たかが他人の馬鹿馬鹿しい氣まぐれからぢやないか。……」

僕はとたんに吾ながら穴へでもはいりたいほど恥かしくなる一方、家内が可哀さうで可哀さうでならなくなつた。けだし、家内の吐いた屁理窟なんかはきれいに棚へ上げて、何から何まで自分一人のせゐにしちまつたわけだね。まあ、さうした佗しくも遣瀬ない氣分で、僕は書齋のソファの上で、ぐつすり寝込んぢまつたといふ次第さ。ほかならぬわが最愛の女房が手づから縫つてくれた、ふかふかした綿入れの部屋着にくるまつてね。……

しなやかな細君の手で、良人のために縫ひあげられた着心地のいい不斷着といふやつは——全くへんに情にからんでくる代物だよ！　じつに工合がいいし、じつに懐かしいし、おまけに折よくにしろ折あしくにしろ、まざまざとわれわれ男子の罪惡を思ひださせてくれもするし、いやそれのみか、縫つてくれた白い柔手までがまざまざと思ひだされて、いきなりそれに接吻して、俺

が悪かつた、赦しておくれ——と言ひたくなつちまふ。

「赦しておくれ、ねえお前、さつきはついお前の言葉で、むらむらつとしてしまつたが。もうこれからは氣をつけるからね。」

そいつがまた、白狀するとね、一刻も早く謝まりたくつて矢も楯もたまらず、その拍子についた目が覺めちまつて、起きあがりざま、書齋からのこのこ出ていつたものさ。

見ると——家ぢゆう眞つ暗がりで、シンとしてゐる。

「奥さんはどこだい？」

つて女中にきくと、

「奥さまは弟さまとご一緒に、マリヤ・ニコラーエヴナのお父様のところへ、お出ましになりました。只今すぐお茶をお入れしますから」といふ返事だ。

『こりや驚いた！』と僕は思つたね、——『するとつまり、あいつとうとう我を張りとほすつもりだな——相變らず弟のやつを、マーシェンカと一緒にしようつて云ふんだな。……ええ、どうなりと勝手にするがいい。そしてマーシェンカの狸親父に、上の二人の婿さん同樣、まんまと化かされてみるがいい。いいやどうして、その段ぢや濟むまいぜ。あの婿さんは二人とも相當な曲者だつたが、うちの弟ときた日にや、あの通りの正直權現、弱氣地藏だからなあ。まあいいさ、

——弟のやつも女房のやつも、たんと瞞くらかされるがいいや。月下氷人といふ役がどんなに難かしいものか、第一課でうんと手を焼いてみるがいいや。』

僕は女中の手からお茶のコップを受けとると、坐りこんで訴訟書類に目をとほしはじめた。それは明日から裁判のはじまる事件で、僕にとつてはちよつと骨の折れる仕事だつたのだ。

調べ物につい氣をとられて、氣がついた時はもう眞夜中をだいぶ越してゐたが、家内と弟とは二時といふ時刻に、二人ともすこぶる御機嫌さんで歸つてきた。

家内が言ふことにや、——

「いかが、コールド・ビーフを、葡萄酒に水をあしらつて召しあがらないこと？　わたしたちは、ヴァシーリエヴナさんところで、お夜食をすませて來ましたの。」

「いや」と僕、——「御好意は忝けないがね。」

「ニコライ・イヴァーノヴィチさんたら、すごく氣前を見せてね、わたしたちすつかり御馳走になつちまつたわ。」

「なるほどね。」

「ええ、——とても愉快で、時のたつのも忘れたほどでしたの。おまけにシャンパンまで出たわよ。」

「そりやよかつた！」と僕は答へて、さて肚の中でかう考へた、——『ははぁ、あのニコライの悪黨め、うちの弟の御面相から、一目でこりやいい鴨だわいと見破りをつて、腹に一物の御馳走ぜめとおいでなすつたな。まづ當分は、いづれ緣談が本ぎまりになるまで、ちやほやしておいて、それから矢庭に、——爪牙をあらはさうつて寸法だな。』

その一方、家内にたいする僕の感情は又ぞろ惡化して、さつきは別に惡氣はなかつたんだから赦してをくれ——なんていふ口上は、今更をかしくつて言ひ出せなくなつた。いや、それどころか、もし僕にこれといふ差迫つた用事もなくて、この御兩人がおつぱじめた戀愛遊戲の一進一退に、いちいち茶々を入れられるほどの閑人だつたとしたら、てつきり僕は又しても堪忍ぶくろの緒を切らして、何かしら餘計な口出しをして、とどのつまり、出ていけ出ていきます——ぐらゐの騒ぎになつたに相違ないんだが、幸ひにして僕はそれどころぢやなかつた。つまり、さつきも言つたその訴訟事件といふのが、ひどく手ごわい代物でね、僕たちはもう二六時ちゆう裁判所に詰めきりといふ始末、この分ぢやちよつとクリスマスまでに片づく見込みも立たず、したがつて僕は家へはただ飯を食つて一寢入りするために歸るだけ、日中と夜の一部分とは法律（テミス）の女神（ミス）の祭壇の前ですごすといつた體たらくだつたのさ。

その一方、家の方では、事はどしどし運んでゐてね、いよいよクリスマス・イーヴといふそ

の夕方に、やつとこさで法廷の仕事から解放されて、ほつとして僕が歸宅してみると、待つてましたとばかりいきなりもう、豪勢なバスケットを眼の前へ突きつけられて、さあ一つ檢分して頂戴といふ註文なんだ。そのバスケットには、弟のやつがマーシェンカへ贈物にする高價な品々が詰まつてゐるのさ。

「こりやあ一體なんだい？」

「花聟さんから花嫁さんへのプレゼントですわ」と、家内が説明する。

「うへッ！　もうそこまで來たのかい！　いやお目出たう。」

「勿論よ！　弟さんは、もう一ぺんあんたと相談した上でなくちや、正式の申込をするのはいやだと言ふんですけど、とにかくああして婚禮をいそいでらつしやるでせう。ところがあなたといつたら、まるでわざと意地わるをしてゐるみたいに、あの厭らしい裁判所に入りびたりなんですもの。とても待つちやゐられなくなつて、婚約をとりかはしてしまつたのよ。」

「一段と結構ぢやないか」と僕、「ぼくを待つことなんかありやしないさ。」

「あなた、それは皮肉ですの？」

「皮肉だなんて、とんでもない。」

「それとも、當てこすりですの？」

「いいや、當てもこすりもしやせんよ。」

「どつちにしたつて無駄骨ですわよ。だつて、いくらあなたがギヤアギヤア仰しやつたところで、あの二人とても幸福な御夫婦になるにきまつてますもの。」

「無論さね」と僕、——「君が太鼓判をおす以上、さうなるにきまつてるさ。……諺にもあるぢやないか、『思案あまつて貧乏くじ』つてね。選り分けるなんてことは、もともと出來ない相談なのさ。」

「まあまあ」と家内は、プレゼントの籠の蓋をおろしながら、——「あなたつたら、わたくしどもも女を選り分けるのは、さもあなたがた男の特權みたいに思つてらつしやるのね。ところが本當は、そんなこと愚にもつかない空中樓閣なんですわ。」

「へえ、どうして空中樓閣なんだい？　願はくは、娘さんの方で婿えらびをするのぢやなしに、婿さんの方から娘さんに求婚するのでありたいものだよ。」

「そりや、なるほど求婚はしますわ、——けれど、念入りに選り分けるとか愼重に選り分けるなんていふことは、とてもあり得ないことですわ。」

僕はかぶりを振つて、かう言つた。——

「もう少し、自分の言つてることを、檢討して見ちやどうかね。例へば僕はかうして、君とい

ふものを選んだぢやないか——それといふのも、君を尊敬し、君の長所を見抜いたからぢやないか。」

「嘘ばつかり。」

「嘘だつて？」

「嘘ですとも、——だつて、あなたがこのわたしを選んだのは、決して長所を見ぬいたためなんかぢやないんですもの。」

「ぢや、なんだといふんだい？」

「わたしのことを、ちよいといい女だ、と思つただけのことだわ。」

「いやはや、君はじぶんには長所なんかないとでも言ふのかい！」

「とんでもない、長所ならちやんとあります。でもあなたは、わたしのことをいい女だとお思ひにならなかつたら、やつぱり結婚はなさらなかつたでせうよ。」

僕は、なるほどこれは一本参つたと思つたね。——「僕はまる一年も待つて、君の家へかよつたぢやないか。どうして僕がそんな眞似をしたと思ふかね？」

「さうは言ふけどね」と、僕は陣容を立てなほして、

「わたしの顔が見たかつたからよ。」

「ちがふ、——僕は君の性格を研究してゐたんだ。」

家内は、ほゝゝゝと笑ひだした。

「そら笑ひはよしてくれ！」

「そら笑ひなんかぢやなくてよ。そんなこと仰しやつたつて、結局なに一つわたしの研究なんかなさらなかつたのよ。それに第一、お出來になるはずもなかつたのよ。」

「どうしてだい？」

「言つてもよくつて？」

「ああ頼む、言つてくれ！」

「それはね、あなたがわたしに戀しちまつたからよ。」

「まあ、それもよからう。だがそれが僕にとつて、君の精神的な性質を見るうへの妨げになつたわけでもあるまい。」

「なつたわ。」

「いいや、ならん。」

「なつたわ。しかも誰にだつて妨げになるものなのよ。だから、いくら長いことかかつて研究したところで、なんの役にも立ちやしないのよ。あなたは、相手の女に戀してゐながら、しかも

その女を批判的に見てらつしやるおつもりだけれど、實は空想的にぼんやり眺めてらつしやるに過ぎないのよ。」

「ふうむ……だがなあ」と僕、——『どうも君は、なんだかその……ひどく現實的だなあ。」

そのじつ内心では、なるほどその通りだ！　と思つたね。

家内はことばをつづけて、——

「思案はもう澤山だわ、——とにかく幸先はいいんだから、さあ早く服を着かへて、一緒にマーシェンカのところへ行きませうよ。わたしたち、今日はあの家でクリスマスを迎へることになつてゐるのよ。それにあなたも、あの子や弟さんに、お目出たうを言はなくちやいけないわ。」

「恐悦至極」と僕は言つて、一緒に出かけた。

4

先方に着くと、まづ贈物の捧呈式があり、ついで祝詞の言上があり、それからわれわれ一同は、シャンパーニュ州の妙なる美酒にいいかげん酩酊した。

もはや斯くなる上は、思案も相談も諫止も、いつさい手おくれだ。殘されたことはただ一つ、

婚約の二人の行手に待つてゐる幸福にたいする信念を、一同の胸中に守り立てて、シャンパンを飲むだけである。まあそんなあんばいで、あるひは僕の家で、あるひは花嫁の實家で、日は夜につぎ、夜は日についだといふわけだつた。

さうした氣分でゐると、時の長さを覺えるなんてことはまづあるまいね？

全くあつと思ふまもあらばこそ、たちまちもう大晦日が來てゐた。よろこびを待ちまうける氣分は、ますます濃くなつてくる。世間の人は誰もかれも、よろこびごとを祈念して胸をわくつかせてゐるが、もとより僕たちも敢へて人後に落ちなかつた。僕たちは又もやマーシェンカの實家で新年を迎へたが、それこそわれらが先祖の言葉ぢやないが『たらふくたべ醉うた』もので、まさに『飲む樂しみはロシヤならでは』といふ先祖の名言を、みごと實證してのけた次第だつた。

そのなかで、ただ一つだけ芳ばしくないことがあつた。といふのは他でもない、——マーシェンカの親父さんは、相變らず持參金のことはおくびにも出さずにゐたが、その代り娘に、奇妙きてれつな贈物をしたのだ。いや、奇妙なばかりぢやなくて、後になつて僕にも分つたことだが、それは全く許すべからざる、緣起のわるい贈物だつたのだ。彼は夜食の最中に、一同の眼のまへで、手づから娘のくびに、立派な眞珠の頸飾りをかけてやつたのだよ。……われわれ男連中は、その品物を一瞥して、むしろ『こいつは素晴らしいわい』と思つたものだつた。

「ほほう、——あれは一體どのくらゐの値打ちのものかな？　何しろあれほどの品であるからには、名門出の富豪連中がまだ質屋へものを曲げにやるまでにならず、何かひどく金のいるやうな時には、むしろこのマーシェンカの親父さんみたいな内密の高利貸の手に、財物を委托する方を快しとした、そんなふうの天下泰平な大むかしからそんなことを考へた次第なのさ。

その眞珠は大粒で、ふつくらと圓みがあつて、ひどく冴え冴えした色氣のものだつた。のみならず頸飾りの作りは、いかにも昔風の好みで、いはゆるルフィール型とか瓔珞型とか呼ばれるあれだつた。——つまり背後のところは、小粒ながら一ばんまん圓なカーフィム眞珠でもつて始まつて、だんだん大粒になるブルミート眞珠がそれにつづき、やがて下へ垂れるあたりになると大豆ほどの粒がつらなつて、最後のまん中の部分には三顆のびつくりするほど大きな黒眞珠が、群を抜いて美しい光耀をはなつてゐる、といふ仕組みなのだつた。この見事でもあり高價でもある贈物の前に出ては、うちの弟のプレゼントなんかは月夜の星も同然、すつかり氣おされてしまつた。手みじかに言つてしまへば、われわれむくつけき男連中は、一人のこらずマーシェンカの親父さんの贈物を素晴らしいと思ひ、おまけにその頸飾りを渡すにあたつて老人の述べたことばまでが、氣に入つたといふ始末だつた。つまりマーシェンカの親父さんは、その重寶を娘にかけて

やつてから、かう言つて聞かせたのだ、——『さあ娘や、これをお前に上げる。ついでに呪文を附けておかうね、——この品は錆も朽ちさすことなく、ぬすびとも奪ふことなく、まんいち奪うたとしても、かならず業報あり。これは、とこしなへぢやや』とね。

ところが婦人れんになると、何につけてもめいめい小うるさい一家言をもちだすものだし、當のマーシェンカなどは、頸飾りをもらつてから、さめざめと泣きだしたものだつた。僕の家内にいたつてはなんとしても腹の虫を抑へかねて、うまい機會をつかむと、早速ニコライ・イヴァーノヴィチを窓のところへ引つぱつて行つて、文句を並べ立てさへしたものだ。相手はまあ親類のよしみで、おしまひまで我慢して拝聽してゐたがね。なぜ眞珠を贈物にして文句を言はれたかといふと、つまり眞珠といふものはなみだの象徴でもあり前兆でもあるといふのだ。だから眞珠は決して新年の贈物には使はれないといふのだ。

ところが相手もさるもの、ニコライ・イヴァーノヴィチは、まんまと冗談で言ひまぎらしてしまつたのさ。

「いやそれは」と奴さんは言ふんだ、——「まづ第一に、單なる迷信にすぎんですわい。もし誰か奇特な仁があつて、ユスーポフ公の奥方がゴルグーブスからお買上げになつた眞珠の一顆を、このわしに贈物にしようと言はれるなら、わしは卽座に頂戴しますわ。このわしも、な奥さん、

やつぱり昔は一通りそんな緣起をかつぎ廻したものでしてな、贈物には何が禁物かぐらゐは、ちやんと心得てをりますよ。娘さんがたに贈つてならんのは、あのトルコ玉ですて。といふわけは、ペルシヤ人の考へで行くと、トルコ玉といふものは戀患ひで死んだ人間の骨ださうですからなあ。また、奥さんがたに贈つてならんのは、キューピッドの矢のはいつた紫水晶ですて。もつともわしは、そんな紫水晶をためしに贈物にしたことがありますが、奥さんがたは受納されましてな……」

家内は思はずほほゑんだ。相手はことばをつづけて、——

「そのうちあなたにも、そんなのを一つ差上げるとしませうて。さて眞珠のことですが、一口に眞珠といつてもじつに千差萬別でしてな、かならずしも眞珠はどれもみんな、泣きの涙で採集されるものとは限りません。ペルシヤ眞珠もあれば、紅海で採れるのもある。淡水——すなはちオー・ドゥスで採れたのもあつて、これなら採集に涙はいりません。あの多感なマリ・スチューアートは、スコットランドの川でとれた所謂ペルル・ドー・ドゥスでなければ身につけなかつたけれど、それがべつに幸運を運んで來てくれもしなかつたですわい。わしは何を贈物にしたらよいかといふことを、ちやんと心得てゐて——そのよいものを娘に贈るのですが、あなたは騒ぎ立ててあの子を怖氣づかせなさる。そのお禮に、キューピッドの矢のはいつたのを差上げることは

取りやめにして、代りにあの冷靜な月光石を獻ずることにしませう。さ、娘や、もうお泣きでない。わしの今やつた眞珠が涙を運んでくるなどといふつまらん考へは、頭から掃き出してしまふがいい。これはそんなのとは譯がちがふ。お前の婚禮がすんで翌る日になつたら、わしはお前にその眞珠の祕密を明かすとしよう。その時になつたらお前にも、迷信なんぞちつとも怖れることはないと、合點がいくだらうて。……」

といつた次第で、その場の騒ぎもおさまつて、うちの弟とマーシェンカの婚禮は、主顯節がすむと早々あげられた。さてその翌る日、僕たち夫婦は、若夫婦のご機嫌奉伺に出かけていつた。

5

行つてみると、向ふの御兩人は今しがた起きたところで、ご機嫌も常になく上々吉だつた。弟のやつは、新婚の日にそなへてあらかじめ旅館にとつておいた部屋のドアを、手づから開けて、喜色滿面、からからと高笑ひしながら、われわれを迎へてくれた。

それを見て僕は、ある古い小説を思ひだしちまつた。それは新郎が嬉しさあまつて發狂するといふ話だつたが、僕がそいつを、當てられた腹いせがてら弟に話してやると、奴さんこんな返事

をした、——

「いや、ちやうど兄さんの言はれるやうなことが、じつさい僕の身にも起りましてね、こいつはどうも吾ながら氣が變になつたのぢやあるまいかと、さう思つてた矢先なんです。今日ここに初日をあけた僕の家庭生活は、わが最愛の妻に期待してゐたよろこびを僕にもたらしたのみならず、舅どのからまで、豫期せざる福運を授けてもらつたといふ次第なんです。」

「そりやまた一體、何ごとがもちあがつたんだい？」

「まあ、ずつとお通りください、お話ししますから。」

家内は僕に耳うちして、

「てつきりあの古狸のやつに一杯くはされたんだわ。」

僕はこたへて、

「おれの知つた事ぢやないよ。」

さてわれわれが通ると、弟は封の切つてある一通の手紙をわれわれに示した。それはその朝はやく市内郵便で、兩人の名宛で配達されたもので、次のやうな文面だつた、——

『眞珠にからむ迷信などにびくつくこと一切無用なり。あの眞珠はにせものなれば。』

家内は、どうとばかり尻餅をついちまつた。そして、

「ちえつ、ひどい奴！」と、ただ一言。

ところが弟は、マーシェンカが寢室で朝化粧をしてゐる方角を、あごで指してみせながら、かう言ふのだ、——

「姉さん、そりや違ひます。あの老人のやり方は正々堂々たるもんですよ。僕はこの手紙をうけ取つて、一讀おもはず呵々大笑しましたね。……一體なんの泣きべそかくことがあるんです？僕のさがしてゐたのは、女房だけです。だから、あの頸飾りの眞珠が本物ぢやなく、じつは似せ物だつたそれが欲しいとも言ひやしませんでした。僕のさがしてゐたのは持參金ぢやなく、またそれと聞かされたところで、僕はちつとも痛くも痒くもありやしません。よしんばあの頸飾りの値打ちが一萬三千ルーブリぢやなくて、ただの三百ルーブリだとしても、——僕の女房が仕合はせでゐてくれさへすりや、要するにどうだつていいことぢやありませんかね。……ただ一つ僕が心配だつたのは、これをどうマーシャに傳へたらいいか、といふことでした。思ひあぐねて、窓の方を向いて坐りこんだまま、ドアの掛金をおろし忘れたことに、つい氣がつかなかつたんです。五六分してから、ふと振り返つてみると、僕のすぐうしろに思ひがけず舅どのが立つてゐて、片手に何かハンカチに包んだものを握つてゐるんです。そして、

——おはよう、婿さんや！』といふ挨拶。

僕はとびあがるやうに立ちあがつて、舅さんを抱擁し、かう言ひました。

——いや恐縮です！　もう一時間もしたら、二人そろつて伺ふつもりでゐたのに、そちらからわざわざ……。これぢやすつかり順序があべこべで……恐縮とも有難いとも。……』

——なあんだ、そんな固苦しいことを！　他人ぢやあるまいしさ。わしは今、ミサにお參りしてな、——お前たち夫婦のことを祈つて、それこのとほり聖餅（ホスチヤ）を頂いて來てやつたといふ次第なのさ。』

僕は、もう一ぺん舅どのを抱擁して、接吻しました。

——して、わしの手紙はとどいたかな？』と聞きます。

——そりやもう、とどきましたとも。』

と僕はこたへて、おもはず大聲で笑ひだしました。

向ふは呆氣にとられて、

——何がさうをかしいのかな？』と聞きます。

——だつて、仕様がないぢやありませんか？　とつても痛快なんですもの。』

——痛快だとな？』

——ええ、さうですとも。』

——まあいいから、あの眞珠を出してごらん。』

頸飾りは、ついそこのテーブルの上に、ケースに納めて置いてありました。僕は出して渡しました。

——虫めがねはあるかな？』

ありません、と僕は答へます。

——そんなら、わしが持つてゐる。昔からの習慣で、いつもかうして持つて歩いてゐるのさ。さあひとつ、留め金のパチンのところを、とつくり見てごらん。』

——見てどうするんです？』

——まあいいから、見てごらん。お前さん、ひよつとすると、わしに擔がれたとでも思つてやしないかの。』

——そんなこと、思つてやしませんよ。』

——いいから見てごらん、見てごらん！』

そこで虫めがねを當ててみると、そのパチンの一ばん目につかないところに、模造眞珠（ブルギニヨン）といふフランス文字が、毛彫りになつてゐました。

——得心が行つたかな、これがほんとに似せものの眞珠だといふことに？』

——わかりました。』

——そこで、わしに何か言ひたいことはないかな？』

——さつき申しあげた通りです。と云ふのはつまり、僕としては痛くも痒くもないといふことです。もつとも、たつた一つお願ひがあるんですが……』

——いいとも、いいとも、遠慮なく言ふがいい！』

——これをマーシャには黙つてゐて頂きたいんですが。』

——ほう、それはまたどうしてかな？』

——ただそれだけです。……』

——いや、その謂はれが聞きたいのだ。あれにがつかりさせたくないとお言ひなのかい？』

——ええ、まあ、それもあるんですけど。』

——まだそのほかに何かあるのかい？』

——ええ、じつはもう一つ、あれの胸の底に、なにかお父さんにたいする反感のやうなものが、芽ばえては困ると思ふんです。』

——お父さんにたいする反感？』

——ええ。』

——なあんだ、父親にとつて、あれはもう切りとつたパンの一片みたいなものさね。もとのパンの塊まりとは縁がきれてるんだ。あれに大切なのは——ご亭主だよ。……』

——心は假りの宿りならず、といふぢやありませんか』と、僕は言ひました、『心といふものは、そんな手狹なもんぢやありません。お父さんへの愛も愛なら、良人にたいする愛も愛です。それにもう一つ、……もし幸福な良人になりたければ、じぶんの妻を尊敬できるやうでなくちやなりません。それができるためには、妻の心から、生みの兩親にたいする愛や敬意を、なくさせてはならないと思ひます。』

——いやあ、これはどうも！　お前さんもなかなか、隅に置けないわい！』

さう言つて、舅は腰掛の腕木に、默然と指で拍子をとりはじめましたが、やがて立ちあがつて、かう言ひました。

——わしはな、なあ婿さんや、裸一貫で今の身上をきづき上げた男だが、それにはまあ、色んな手を使つたものさ。高尚な見方からすれば、わしの使つた手のなかには、あまり感服できないものもあるかも知れんが、まあとにかく、それも御時勢だつたし、まあわしには、ほかに身上をきづきあげる手だてもなかつたわけだ。他人といふものを、わしは大して信用もしないし、ましてや愛などといふものに至つては、ひとさまの讀む小説本とやらいふものの中に書いてあると聞

くだけのことで、正直の話わしはいつも、人間はみんなお錢をほしがるものだと考へてゐた。上の娘をやつた二人の婿さんたちに、わしは持參金をつけてやらなかつたが、果せるかな、あの二人はわしを恨みに思つて、いつかな細君をわしのところへよこしたがらない。どんなもんだらうな、——あの婿さんたちとこのわしと、一體どつちが眞人間らしいかな？　わしはなるほど、奴さんたちに錢こそやらなかつたが、親子の情合ひに水をささうといふのだ。ところでわしは、あの二人にや一文だつてやることぢやないけれど、お前さんにや、財布のひもをゆるめて、ひと奮發させて貰はうわい！　さうとも！　いや、今この場で早速、ひと奮發させて貰ひましよ！』——といつたわけでしてね、まあこれを見てください！」

と弟のやつ、五萬ルーブリの手形を三枚、僕たちに出して見せたのさ。

「へえゝ」と僕はあきれて、「それをみんな、細君にやれとの御意なのかい？」

「いいえ」と弟、——「マーシャには五萬だけやつて置けといふんです。そこで僕はかう言ひました。

——ねえ、ニコライ・イヴァーノヴィチ、これは少々もつたいな過ぎますよ。……マーシャにしてみれば、あなたから持參金を頂いたりして、却つてくすぐつたい思ひがしませうし、姉さんたちがまた——いや、こいつはいけません。……これぢやきつと姉さんたちがあれを燒いて、仲

たがひの因になりますよ。……さうなつては困りますから、姉さんたちの仕合はせもお考へになつてください、どうぞこのお金は一應お納めくだすつて……いづれそのうち、何かいい風の吹きまはしで、あなたと姉さんたちの間のこだはりが解けほぐれたとき、三人に等分に分けてやつてください。その曉にこそ、このお金はわれわれ一同に、悅びをもたらしてくれるといふものです。……どうしても僕たちにだけと仰しやるのでしたら、失禮ながらお斷わりします！』

すると親父さんは立ちあがつて、またもや一わたり部屋の中を步きまはつたが、やがて寢室のドアの前に立ちどまると、大聲で、

——マーリヤ！』と呼びました。

マーシャは、もうちやんと化粧着を羽織つて、出て來ました。

——おめでたう』と、舅さんが言ひます。

マーシャは父親の手に接吻しました。

——どうだな、仕合はせになりたいかな？』

——そりやパパ、なりたいわ。それに……どうやら成れさうですわ。』

——よしよし。……お前さん運よく、いい聟がねを引き當てたぞ！』

——あらパパ、あたし引き當てなんぞしませんわよ。神樣から授かつたんですわ。』

——ああ、よしよし。神様がお授けくだすつた。ぢやわしは、ちよいと景品をつけさせて貰はうかな。わしは、お前の幸福を、ちつとばかり殖やしてやりたいのさ。ご覧、ここに手形が三枚ある。みんな同じ金高だ。一枚はお前にやる、残る二枚は姉さんたちにやれ。お前の手で分けてやれ——これはお前の志だといつてな。……』

——まあパパ！』

マーシャは最初お父さんの頸つ玉へかじりつきましたが、やがていきなりぺたりと床べたに坐りこむと、嬉し涙をぼろぼろこぼしながら、親父さんの膝に抱きつきました。見ると——親父さんも泣いてゐました。

——お立ち、お立ち！』と、親父さんが言ひます。——『それでお前は、下世話にいふ「奥方さま」だ、——わしなんぞに土下座するなんて法はないわい。』

——でもあたし、ほんとに嬉しくつて……さぞ姉さんたちが！……』

——まあいい、まあいい。わしも嬉しいぞ！……どうだな、やつと分つたらう、眞珠の頸飾りなんか怖くもおそろしくもないことが。さうさ、わしはお前に秘密を明かさうと、わざわざやつて來たのだつたな。それは他でもない、わしがお前に贈物にした似せの眞珠は、わしがずつと以前、心をゆるした親友に一杯くはされた代物なのだよ、——何しろその來歴といふのがな、——

畏こしとも畏こし、帝室の御物と唐室の御物とを、一つにつなぎ合はせた稀代の逸品といふ觸れこみなのさ。それに引きかへ、お前さんのご亭主は、この通りの無骨な男ぢやあるが、かういふ男に一杯くはせるなんていふことは、とても出來ることぢやない、人間のたましひが、だいいち承知をせんわい！』」

「僕の話といふのは、これでおしまひだよ」と、語り手は物語をむすんだ、——「いかがです、お聞きの通りの現代の出來事ではあり、嘘いつはりのない實話でもあるんだが、それでゐて昔ながらのクリスマス物語の註文にもかなひ、作法にもはまつてゐると、憚りながら僕は思ふんだがね。」

かもじの美術家

——墓のうへの物語——

一八六一年二月十九日なる農奴解放
の佳き日の聖なる記念に

かれらの魂は至福のうちに休らふ。

——埋葬の歌——

わが國で「美術家」といへば、まづきまつて畫家や彫刻家のことで、それもアカデミーからこの稱號を認可された連中にかぎるといふのが、通り相場になつてゐる。ほかの手合ひは、てんで美術家あつかひにされないのだ。サージコフやオフチンニコフのやうな名工でも、多くの人の目には單なる「銀細工師」にすぎない。よその國になると話がちがふ。ハイネの回想記のなかには、「美術家であり」「一家の見を具へて」ゐた仕立屋のことが出てくるし、ヴォルトの手がけた婦人服は、今日なほ「美術品」として通つてゐるのである。そのうちの一着の如きはつい最近も、「無邊無量の幻想が胴の一點に凝つてゐる」と評してあつた。

アメリカになると、美術の領域は更に一そう廣く解されてゐる。有名なアメリカの作家ブレッ

ト・ハートの物語るところによると、あちらでは「死人に化粧をする」「美術家」がゐて、非常な人氣だつたさうである。その男は、亡者の顏に色々さまざまな「慰めある表情」をあたへて、その飛び去つた魂の幸福な狀態の多寡深淺を、あらはすことに妙を得てゐたのだ。

この化粧法には幾つかの等級があつたが、わたしは次の三つを覺えてゐる。(一)安樂。(二)高められし觀想。(三)神とぢかに物語る至福。この美術家の名聲は、その絶妙な伎倆にふさつたもので、つまり大した評判だつたわけだが、氣の毒なことにこの美術家は、藝術的創作の自由を尊重しない粗野な群衆の犧牲になつて、身をほろぼしてしまつた。石責めにあつて殺されたのだつたが、それといふのも彼が、町ぢゆうの人の膏血をしぼり上げたイカサマ銀行家の死顏に、「神と物語る至福の表情」を與へたからであつた。そのイカサマ師のおかげで幸福になつた遺族たちは、そんな註文を出して故人への感謝の念をあらはさうとしたのだが、その註文の藝術的執行人にとつては、それが死に値ひしたといふわけである。……

これと全く同じ非凡な藝術家の部類にぞくする名人が、實はわがロシヤにもゐた。

2

わたしの弟の乳母をしてゐたのは、脊の高い、しなびた、それでゐて頗る姿のいい婆さんで、リュボーフィ・オニーシモヴナといふ名前だつた。この婆さんはもと、カミョンスキイ伯爵の持物だつた舊オリョールの劇場の女優をしてゐた女で、わたしがこれから話さうといふ一部始終は、おなじくオリョールの町で、わたしの少年時代に起つたことなのである。

弟はわたしより七つ年下だ。したがつて弟が二歳で、リュボーフィ・オニーシモヴナの手に抱かれてゐた頃、わたしはもう滿九歳ほどになつてゐたので、してもらふ話がすらすら呑みこめたわけである。

その頃のリュボーフィ・オニーシモヴナは、まだ大して老けこんではをらず、まるで月のやうに色白だつた。目鼻だちはほつそりと優しく、脊の高いそのからだは眞直ぐに伸びきつて何ともいへぬいい恰好で、まるで若い娘のやうだつた。

母や叔母は、つくづくその樣子を眺めながら、若い頃にはさだめし美人だつたに違ひないと、言ひ言ひしたものである。

彼女はじつに正直で、じつに柔和で、情あひのじつに濃やかな女だつた。人生の悲劇的な面が好きで、しかも……時たまはかなり酒をやつた。

彼女はわれわれ兄弟をよく三位一體寺の墓地へ散步に連れて行つてくれたが、そこではいつ

も、古びた十字架のついたとある質素な墓のうへに腰かけて、わたしに何か話を聞かせてくれたものである。

わたしが彼女から「かもじの美術家」の話を聞いたのも、やはりそこでのことだつた。

3

その男は、うちの乳母の劇場なかまであつた。違ふところと云へばただ、彼女が「舞臺に出て踊りを踊つた」のに反し、彼は「かもじの美術家」——つまりカツラ師でありメーク・アップ師であつて、伯爵の農奴連中から成る女優たちの「顔を作つたり髪を結つたり」するのが役目だつたのである。とはいへこれは、かもじ櫛を耳にはさみ、ラードで伸ばした臙脂のはいつたブリキ罐を手にした、そんじよそこらの月並みの職人とはちがつて、れつきとした見識を具へた男であり、まあ一口に言へば美術家なのであつた。

リュボーフィ・オニーシモヴナの言ふところによると、「顔に趣向を凝らす」ことにかけては、彼の右に出るものは誰一人なかつた。

一體どのカミョンスキイ伯爵の代に、さうした二人の花形が全盛をうたはれたものか、そこのところはわたしにもはつきりしない。カミョンスキイ伯として知られてゐる人に三人あつて、そのいづれもオリョールの古老たちによつて「稀代の暴君」と呼ばれてゐる。元帥ミハイラ・フェドートヴィチは、その殘忍さのたたりで一八〇九年に農奴たちの手にかかつて落命した。その二人息子のうち、ニコライは一八一一年に歿し、セルゲイは一八三五年に亡くなつてゐる。

四〇年代にはまだほんの子供だつたわたしも、煤や赤土で塗りこめた開かずの化粧窓のならんでゐる宏大な灰色の木造建物や、それを取圍んでゐる恐ろしく長い半崩れの塀のことは、いまだに記憶に殘つてゐる。それがつまり、この土地の怨府の觀のあつたカミョンスキイ伯爵の屋敷だつたのだ。おなじ屋敷うちに、例の劇場もあつた。その小屋がまた、どうしたものだか三位一體寺の墓地からはとてもよく見えたもので、さてこそリュボーフィ・オニーシモヴナは、何か話しださうとするたんびに、いつも大抵こんなふうに口を切るのであつた、——

「ほらご覽、坊つちやん、あすこを。……ほんとに、なんて氣味のわるい？」

「うん、氣味がわるいね、ばあやさん。」

「でもね、わたしがこれから話してあげることは、もつとずつと氣味がわるいのよ。」

次にかかげるのは、そんなふうに彼女が話してくれたアルカーディイといふカモジの美術家についての話の一つである。これは多情多感で大膽な若者で、彼女の心に頗る近しい人物だつた。

4

アルカーヂイが「髪を結つたり顔を作つたり」してやるのは、女優だけにかぎつてゐた。男優にはもう一人べつのカツラ師が附いてゐたのだが、假りにアルカーヂイが時たま「男優部屋」へ顔を出すことがあるとすれば、それはただ伯爵自身が「誰それの顔を大いに立派に作れ」と下知した場合だけだつた。この美術家のメーク・アップ術のおもな特長は、すぐれた見識にあり、それによつて彼はどんな顔にも、じつに微妙な變幻自在な表情を與へることができたのだ。

「あの人が召し出されてね」と、リュボーフィ・オニーシモヴナは語るのだつた、——「あの顔にこれこれかやうの表情をつけろ、と御意があるんですよ。するとアルカーヂイは御前をさがつて、その男優なり女優なりを自分の前に立たせるか坐らせるかして、じいつと腕組みをして考へこむんです。そんな時のあの人と來たら、どんな美男子よりもきれいでした。なにせ中脊とはいへ、なんとも云へずすつきりといい恰好で、ほつそりした鼻には威嚴がそなはつてるし、眼には眼でまるで天使のやうな優しさがこもつてゐるし、おまけに濃い前髪がえもいはれぬ風情で、眼のところへ垂れかかつてゐるんですものね、——そんなふうにして、じつと見つめてゐるあの人は、まるで霧か雲のなかから覗いてゐるみたいな様子でしたよ。」

手みじかに云へば、かもじの美術家は美男子で、「みんなに好かれてゐた」といふことになる。「當の伯爵までが」やはり彼に目をかけて、「人並みはづれた扱ひぶりで、りつぱな身なりをさせてゐたけれど、その一方ではきびしくその身を見張つてゐた」のだつた。どんなことがあらうと、アルカーヂイが伯爵以外の人の髪を刈つたり、ひげを剃つたり、髪を調へたりすることを許さず、そんなわけで二六時ちゆう彼を自身の化粧部屋に釘づけにしてゐたので、アルカーヂイは劇場へ行くほかには、どこへも外出できない身の上だつた。

それればかりか、教會へ懺悔をしに行くことも、聖餐にあづかりに行くことも許されなかつた。といふのは伯爵自身が神を信じない人で、坊さんには我慢のならぬたちだつたからである。一度などは復活祭のとき、十字架をささげて托鉢に來たボリソグレーブスクの坊さんたちに、ボルゾイ犬の群をけしかけたことさへあつた。*

*この出來事を知つてゐる人はオリョールに大ぜいゐる。わたしはこの話を祖母のアルフェーリエヴァからも聞き、また未だ曾つて嘘をついた例しのない老人として有名な、イヴァン・イヴァーノヴィチ・アンドローソフといふ商人からも聞いた。この商人はぢきぢきその眼で「猛犬どもが坊さんたちの衣をずたずたに裂く」有樣を見ながら、「罪障をわが魂に着る」ことによつて、からくも伯爵の魔手をのがれたのである。やがて伯爵が彼を面前へ呼び出して、「お前はきやつらを不憫に思ふか？」とたづねたとき、アンドローソフは「とんでもござりません、閣下、ああしてやるのが當然でござります。」のそのそほつき廻つて、うるさい手合ひでござります」と答へた。それでカミョンスキーは彼を赦免したのだつた。

その伯爵といふのは、リュボーフィ・オニーシモヴナの話によると、何しろしよつちゆう癇癪ばかり起してゐるので、なんとも見られぬ醜怪な容貌で、同時に狼にも虎にも蛇にも、その他あらゆる獣に似てゐたさうである。けれどアルカーヂイは、さうした獣めいた御面相にさへも、よしんば束の間のこととはいへ、たとへば伯爵が劇場の桝に納まつてゐる時など、餘人には見られぬ堂々たる威厳が見えてゐるといつたふうの、趣向を凝らすことができたのであつた。

ところが伯爵の人となりに缺けてゐたものは、アルカーヂイにとつては殘念至極なことだが、何よりもその堂々たる威厳であり「武人の風格」であつたのだ。

まあそんな次第で、世間の誰ひとりとして、このアルカーヂイほどの無雙の美術家の奉仕にあづからしめまいといふ伯爵の方寸からして、あはれ彼は「休暇といふものを一生涯もらへず、また生まれ落ちてこのかた一文のお錢もその手のうちに見ずに」いぶり暮してゐたのであつた。しかも彼はすでに滿二十五歳をすぎ、リュボーフィ・オニーシモヴナは十九の妙齢にあつた。二人が相識の間がらであつたことは言ふまでもないが、それがやがて、その年頃にはえてして起りがちの狀態にまで進んだ。つまり二人は相愛の仲になつたのである。とはいへ彼らの愛のささやきはただ衆人環視のなかで顏を作らせ作られながら、それとなしに交はす目まぜ目くばせに限られ

てゐた。

さしむかひの逢曳などは、どだい出來ぬ相談なばかりか、夢にも考へられぬことなのだつた。……

「わたしたち女優は」と、リュボーフィ・オニーシモヴナは語るのだつた、――「ずいぶん大切に目をかけられましたが、その扱ひはまあ、上つがたのお屋敷で若い乳母たちの受ける取締りに似てゐました。老女衆がお目附役につけられて、その老女衆にはめいめい子供があります。そして萬が一、わたしたちのうち誰かしらの身に何かあやまちが起らうものなら最後、老女衆の子供たちが寄つてたかつて、世にもむごい仕打ちに逢はせるのでした。」

不義はお家の御法度とやらいふ掟てを破つていいのは、その掟てを定めた當の「殿様」御自身だけだつたのだ。

5

リュボーフィ・オニーシモヴナは當時、娘ざかりの絶頂にあつたばかりでなく、その多方面な才能の發達の上から云つても、最も興味ある時期にあたつてゐた。彼女は『名曲集（ポプリ）』の合唱にも

加はれば、『支那の菜園婦』では踊り子のリード役もつとめる。また悲劇役者の天分を感じてゐたので、「どんな役でも一目で呑みこみました」といつた調子であつた。

そんな年ごろのこと、何年の何月とははつきり分らないが、とにかく陛下が行幸の途すがら、オリョールに立寄られたことがあつた（それも、アレクサンドル・パーヴロヴィチ帝だつたかニコライ・パーヴロヴィチ帝だつたか、そこは分らないが）。そしてオリョールで一泊といふことになり、その晩はカミョンスキイ伯の劇場に臨御になるはずであつた。

そこで伯爵は土地の貴紳をのこらず その劇場に招待し（したがつて座席券は賣出されなかつた）、極上きはめつきの出し物をすぐつて上演した。リュボーフィ・オニーシモヴナは『名曲集』の合唱をやり、『支那の菜園婦』を踊ることになつてゐたところ、そこへ突然、最後の本稽古の最中に、書割りが倒れて、ある女優が脚に打撲傷を負つた。その女優は『ド・ブールブラン公夫人』といふ芝居の主役を振られてゐた。

わたしはそんな名前の役には、ついぞ何處でもお目にかかつたことがないが、とにかくリュボーフィ・オニーシモヴナは確かにさう發音したのである。

書割りを倒した大道具衆は、お仕置のため馬屋へ閉ぢこめられ、負傷した女優はさつそく自分の小部屋へ運びこまれたが、さて肝腎のド・ブールブラン公夫人の役をやる女優が誰もゐない。

「そこでね」と、リュボーフィ・オニーシモヴナは語る、――「わたしが買つて出たのです。といふのも、ド・ブールブラン公夫人が父君の足もとに身を投げて赦しを願ひ、髪を振りみだして死ぬところがわたしとても好きでしたから。しかもそのわたしの髪の毛といふのが、ふしぎなくらゐ房々した亞麻色のでしてね、それをアルカーヂイは惚れ惚れするやうに見事に結ひあげてくれたものでしたつけ。」

伯爵は、この娘が思ひもかけず大役を買つて出たのを見てすこぶる滿悦したが、その上に舞臺監督までが「リュボーバなら大丈夫やります」と太鼓判をおすのを聞いて、かう答へた、――

「萬一しくじつたら、お前の脊中へ鞭が飛ぶものと思へよ。それはさうとこの娘には、わしの緑柱石の耳輪をとらせるがよい。」

この『緑柱石の耳輪』といふのは、彼女たちにとつて嬉しくもあれば迷惑でもある拜領品であつた。つまりそれが、ほんの束の間殿様の側妾（そばめ）の地位にのぼせられるといふ、格別の名譽を豫言する最初のしるしだつたからである。それを拜領すると間もなく、時にはすぐその日のうちにすら、その白羽の矢の立つた娘を芝居のはねた後で「聖女ツェツィリヤのごとき無垢な容子に」仕立てよといふ命令が、アルカーヂイにくだるのが常だつた。そして白無垢の衣裳に花冠をいただき、兩手に百合の花を持たされて、この象徴化された純潔は伯爵の奥の間へみちびかれるのであ

つた。

「これはね」と、乳母は言ふのだつた、——「あんたの年ではまだ分らないことでせうけれど、とにかく一ぼん怖ろしいことなのでしたよ。とりわけ、わたしにとつてはね。何しろわたしは、アルカーヂイを想つてゐたのですものね。わたしは思はず泣きだしました。耳輪を机の上へはうりだして、めそめそ泣くばかりで、その晩の芝居の役のことなんぞ、もう考へてみることもできない始末なのです。」

6

さて、さうした因果な時にあたつて、折も折、おなじく因果な別の難儀がアルカーヂイの身にもふりかかつた。

陛下に拝謁しようといふので、伯爵の弟が草深い持村から出て來たが、それがまた兄貴に輪をかけた醜男な上に、久しい間の田舎ぐらしで制服を着たこともなければ、ひげを剃つたこともない。なにしろ「顔ぢゆう一めん瘤々だらけ」の御面相だつたからなので。ところが今度のやうな非常の場合になると、何はともあれ正装をして、頭のてつぺんから足の先まで威斗を當て直し、

型どほりの「軍人風」に仕上げる必要があつた。

何しろ仰山な註文だつた。

——今ぢやとても想像もつかないくらゐね、その頃は萬事やかましうござんしてね（と、乳母は語るのだつた。——）よろづにつけ形式萬能でしたから、お偉がたには一々お顔はかうかう、おぐしはしかじかとちやんと極りがあつたものです。それがまた、ひどくお似合ひでないお人もありましてね、型どほりの恰好におぐしを作つて、前髪をつまんで立てたり鬢の毛を揃へたりすると、お顔のぜんたいがまるでお百姓のバラライカの絃が切れたみたいな様子になることもありました。お偉がたにしてみればそれが頭痛の種でしてね、ですからお顔の剃り方、おぐしの作り方が、それはそれは大事な役目だつたわけです。——お顔のうへの頬ひげと口ひげの間にどんなふうに畦道をつけるか、捲毛の巻き工合をどうするか、おぐしの櫛目をどう入れるか、そのやり方一つ、そのちよつとした呼吸ひとつで、お顔の表情ががらり變つてしまふんですものね。それでも文官のかたは（と、乳母は語りつづける）——まだしも樂でした。文官のかたにはさほど面倒な註文はなく、唯うやうやしく見えさへすれば事は濟むのでしたが、武官になると註文がなかなかむづかしくて、上長の前では柔和さが第一、目下にたいしてはどこまでも毅々しく、威高氣に見えなければいけないのです。

つまりそれは、かねがねアルカーヂイが伯爵のさつぱり見榮えのしないみつともない御面相に取つて附ける妙を得てゐた、當のものだつたのです。

7

田舍住まひの弟ぎみは、町住まひの兄ぎみよりも一段と醜男でしたが、かてて加へて村里ぐらしのうちにすつかり「毛もくじやら」になつてゐて、おまけに「つらの皮がごわごわ」になつてゐることに、自分でもさすがに氣がついてゐたほどでしたけれど、さりとて誰ひとり顏をあたつてくれる者がなかつたのは、萬事が萬事しわんぼうな生まれつきだつたので、お抱への理髮師を年貢代りにモスクヴァへ奉公に出してゐたからなのです。そればかりかこの弟ぎみの顏は、一めんに瘤々だらけと來てゐるものですから、假りにもそれを剃る段になつたら、そこらぢゆう切り疵だらけにせずには濟まぬ始末だつたのでした。

さてこの人がオリョールに出てくると、町の床屋の面々を呼びあつめて、かう申し渡したものです、——

「もしこのわしを、兄者びとカミョンスキイ伯爵同樣の男ぶりに仕上げてくれる者があつたら、その者には小判二枚をとらせよう。萬が一わしに切り疵をつけるやうな者にたいしては、これこのとほりピストルが二挺テーブルの上にあるぞ。首尾よく仕了せた者は、小判を持つて退散するがよい。吹出物ひとつ切るなり、頰ひげ一本やり損じた者があつたら、たちどころに一命は貰ひ受けるぞ。」

だがこれは唯のおどし文句なのでした。二挺のピストルには空包がこめてあつたのですよ。

當時オリョールには床屋がたんと居なかつたし、ゐる連中にしたところで、たかだか受け皿を手に持つて風呂屋まはりをしたり、吸角や蛭をつけたりするぐらゐが關の山で、趣味とか趣向とかいふものは藥にしたくも持ち合せのない手合ひでした。それは自分から承知の前でしたから、一同みなカミョンスキイ「御變容」の大役を辭退におよびました。『まあどうなりと御勝手に』と、床屋たちは胸中ひそかに考へたのです、——『お前さんも、お前さんのその小判もな。』

「わたくしどもには」と、口々に言上しました、——「とても及ばぬ大役でございます。そのやうなお偉いお方のお髯の先に觸れることさへ畏れ多い分際であります上に、然るべき剃刀の持合せもございません。持合せてをりますのは、ありきたりのロシヤ製の剃刀でございますが、ごぜん樣のお顏をあたりますには、イギリス製でなければ叶ひません。これは伯爵樣のお抱へ、あのアルカーヂイならでは、とても及ぶことではございません。」

弟ぎみはその床屋の面々を、頸つ玉つらまへて早々に追ひ出せと下知しましたが、こつちは却つて厄のがれをしてほくほくものでした。弟ぎみはすぐその足で兄ぎみのところへ馬車を乗りつけ、かう言ひました。——

「いやどうも兄さん、えらい難儀なお願ひがあつて參りましたよ。日の暮れぬ前にあんたのお抱へのアルカーシカ奴を、ちよつとわたしに貸し下されて、わしの男ぶりを然るべくととのへさせては貰へんですかい。久しく顔をあたりませんが、當地の床屋どもは手に負へんと申しますでな。」

伯爵は弟ぎみにかう答へなさいました、——

「ここの床屋どもは、無論のことやくざ者だよ。第一そんなものが、この町にゐようとは知らなかつたね。何しろわたしのところでは、犬の毛を刈るのさへ抱への者がやるからな。さて折角のあんたの頼みだが、それは無理難題といふものだ。といふのは、わたしの存命中アルカーシカのやつには、わたし以外の誰の調髪もさせんと固く誓言したからだよ。まあ考へてもごらん——いやしくも一たん約束したことを、わたしがわが家の奴隷の前で、むざむざ破つていいものかな?」

相手はかうやり返します、——

「なんの仔細があるものですか。あんたが定めたことを、あんたが變へるのにさ。」

けれどあるじの伯爵さまは、そんな理窟はいつそ奇怪千萬だと答へなさりました。

「一たんわたしが」と仰しやるのです、——「自分からそんな事をはじめたら、今後うちの者らに示しがつくと思ふかな? アルカーシカのやつには、わたしがさう決めたと申し渡してあるし、一同もそれを心得てゐる。さればこそあいつの給金も、ほかの皆よりは一段と奮發してあるのだから、萬一あいつが謀反氣を起して、わたし以外の者のつむりにその鑿をふるふやうな眞似をしたなら、わたしはやつを死ぬほど鞭打つたうへ、兵隊にやつてしまふつもりだよ。」

弟ぎみはかう言ひます、——

「そのどつちか一つでせうな——死ぬほど鞭打つか、それとも兵隊にやるか。兩方いつしよにやるのは無理でせうな。」

「まあいい」と、伯爵、——「ぢやあんたの言ふ通りにするさ。殺しも半殺しもしない程に鞭打つて、それから兵隊にやるとしよう。」

「ではそれが」と弟ぎみ、——「ぎりぎり結著だ。」

「うん、ぎりぎり結著だ。」

「ただそれだけの仔細なんですね?」

「うん、それだけだ。」

「まあまあ、それで安心しました。さもないとわたしは、あんたにとつて現在の弟が、そこらの奴隷一匹より安いのかと、さう思ふところでしたよ。ではかうしませう、あんたは約束を破るまでもない、ただあのアルカーシカを、わたしの老犬の毛を刈込みにおよこし下さい。その先あれが何をするかは、わたしの知つたことですて。」

伯爵としては、それまで斷わるのは氣がひけたのでせうね。

「よからう」と伯爵が仰しやいました、——「では老犬を刈込みにやるとしよう。」

「いや、それで結構です。」

弟ぎみはぎゆつと握手をして、馬車を返して行きました。

8

それはちようど夕暮れ前で、冬のことととてそろそろたそがれはじめ、召使が灯を入れてをりました。

伯爵はアルカーディイを呼んで、かう言ひ渡されました、——

「わしの弟の宿へ行つて、あれの老犬を刈込んでやれ。」

アルカーディイは問ひ返しました、

「お言ひつけはそれだけでございますか？」

「ただそれだけだ」と伯爵、——「だが一刻も早く立戻つて、女役者どもの髪を作るのだぞ。今回リューバは三役三様に髪をととのへてやらねばならん。そしてイリヤの姿をさせて、わしの目通りへ出すのだ。」

アルカーディイ・イリイーチは、よろよろつとしました。

伯爵は見とがめて、——

「どうかしたのか？」

けれどアルカーディイは答へました、——

「これは粗忽をいたしました、敷物につまづきましたので。」

伯爵は意味ありげに、——

「氣をつけろよ、辻占が悪い。」

ですがアルカーディイの胸のうちは、今さら辻占がよからうと悪からうとそんな段のことではなかつたのです。

このわたしをツェツィリヤに仕立てろといふお言ひつけに、さながらもう目もつぶれ耳もつぶれた思ひになつて、道具を入れた革箱をかかへると、ふらふら出て行きました。

9

さて弟ぎみのお部屋へ通つてみると、そこにはもう姿見の前に蠟燭がすつかりともされ、またもや例のピストルが二挺と、それに小判が今度は二枚ではなしに十枚、ずらりと並べてありました。しかもそのピストルに込めてあるのは、空弾ではなくつて、本物のチェルケースだまだつたのです。

弟ぎみが申されるには、——

「老犬なんぞ一匹もをりはせんがな、わしの用といふのはほかでもない、——わしを一つせいぜい毅々しい男前に仕立てて褒美の小判十枚を持つて歸るがよい。だが萬がいち切りでもしたら、一命は貰ひ受けるぞ。」

アルカーヂイは、じいつと穴のあくほど見つめに見つめてゐましたが、そのうち不意と、一體どんな氣になつたものでせうか、——とにかく弟ぎみのおつむを刈つたり、お顔をあたつたりしはじめました。みるみるうちに一段といい男ぶりに仕上げてしまふと、小判をポケットへざくざくと納め、かう言ひました、——

「ではおいとまを。」

弟ぎみは答へて、——

「うむ、行くがよい。だが一言きいて置きたいが、よくもお前は命知らずに、こんなことをやる決心がついたものだな?」

するとアルカーヂイは、——

「わたくしが決心した次第は、ただこの胸の底に納めてございます。」

「ひよつとするとお前は、彈除けのまじなひでも受けてゐて、それでピストルを怖れんのではないかな。」

「ピストルなんぞ、たわけたものでございます」と、アルカーヂイは答へました、——「とんと念頭にございません。」

「それはまた、どうしたわけだ? まさかお前は、いや主人の伯爵の誓言の方が弟たるこのわしの言葉よりは確かだ、たとへ切り疵をつけたところで、よもやぶつ放しはすまいなどと、高をくくつてゐたわけでもあるまいな? まじなひの力がなければ、一命を失ふところだつたのだ

ぞ。」

アルカーヂイは、この弟ぎみの一言を聞くと、またもやぶるりと身をふるはし、半ば夢心地でかう口走りました、——

「まじなひこそ掛つてはをりませんが、神様が分別をお授けくだすつたのです。あなた様のお手がわたくしを射たうとピストルをお上げになるひまに、こつちが一足お先に剃刀でおのど一杯ざくりと參るつもりだつたのでございます。」

さう言ひ棄てると、一さんに表へ駈けだして、ちようどよい時刻に芝居小屋へ到着しましたが、いざわたしの顔を作りにかかつても、全身わなわなと顫へがとまりません。そして、わたしの房毛をつまんで捲かせようと、唇で息を吹きかけるため屈みこむ度ごとに、一つ言葉をささやきこむのでした、——

「心配するな、連れ出してやるぞ。」

10

芝居は上首尾で運んでゆきました。といふのもわたしたちがみんな、怖ろしいことにも苦しい

ことにもすつかり馴れつこになつて、まるで石像みたいな人間になつてゐたからです。ですから胸のなかに、どんなわだかまりがあらうと、あるまいと、一切おもてへは表はさず、自分の役はちやんちやんとやつてのけたのです。

舞臺から見ると、伯爵も弟ぎみも來てゐました。二人ともとてもよく似てゐて、やがて樂屋へ見えた時でも、見分けるのがむづかしいくらゐでした。ただ、うちの伯爵は、それはそれは大人しくつて、がらり人柄が變つたみたいでした。それはいつもきまつて、何かひどく暴れだす前にさうなるのでした。

そこでわたしたちはみんな、心もそらになつて、こんなふうに十字を切るのです。

「主よ、惠ませたまへ、救はせたまへ。一たい誰のあたまに、あの人の癇癪玉が破裂するのかしら?」

ところでわたしたちはまだ、アルカーシャの氣ちがひじみた命知らずな行ひも、何ごとをしでかしたかといふことも、ちつとも知らずにゐました。けれど當のアルカーヂイは、もとより所詮のがれる途はないと覺悟してゐましたから、やがて弟ぎみがじいつとその顔を見つめ、うちの伯爵の耳に何ごとかぼそぼそ囁いたのを見ると、眞蒼な顔になつたのでした。わたしはとても耳敏い性分だもので、その囁きが聞きとれました、——

「弟のよしみで忠告しますがね、あの男に剃刀を當てさせる時は氣をつけなさいよ。」

うちの伯爵は靜かににやりと笑つただけでした。

當のアルカーシャも何か小耳にはさんだものと見えます。といふのは、やがてわたしの最後の出のため公爵夫人の顏を作りはじめた時、平生のあの人にも似合はず、白粉をびつくりするほど濃く刷いてしまつたのです。見かねたフランス人の衣裳方が、その白粉をおとしはじめて、かう言ひました。

「トロ・ボークー、トロ・ボークー！」

そして刷毛でもつて、わたしの顏から餘分な白粉をおとしてくれました。

11

そのうち出し物が全部終演になると、わたしはド・ブールブラン公爵夫人の衣裳をぬがされ、代りに聖女ツェツィリヤの衣裳を着せられました。それはただもう眞白な、袖もなければ何もない、ずんどうの衣裳で、肩のところがほんの申譯に蝶むすびに絞つてあるだけのものでしたが、この着附けにはわたしたち怖氣をふるつたものでした。さてそれが濟むと、アルカイヂイがやつ

て來て、わたしの髪をよく繪にある聖女ツェツィリヤのやうな淨らかな風情に結ひあげたり、ほつそりした冠を輪金のやうに嵌めこんだりします。ふとアルカーヂイが見ると、わたしの小部屋の戸口には屈强の男が六人も立つてゐるのです。それはつまり、あの人がわたしの髪をゆひあげて戸口へ戻つて來るが早いか、有無を言はさず引つ捕へて、どこかへお仕置きに連れて行く手筈にちがひありません。そのお仕置きといふのがまた、いつそ死刑の言渡しを受けた方が百層倍もましなほどのむごいものでした。吊し責めから引つ張り責め、それから頭しぼりや蝦責めなど、何から何まであるのですよ。ですからお屋敷のお仕置きに逢つた者には、おかみのお仕置きなんかまるで子供だましみたいなものだつたのです。お屋敷の床下べた一面に祕密の穴倉が掘つてあつて、そこには人間がまるで熊みたいに鎖につながれて入れられてゐました。そのそばを通りかかると、時をり鎖の鳴る音や、足枷をはめられた人たちの呻き聲が、聞えることもありました。そのむごい有樣が、どうぞしてお役人衆の耳にとどくか、お役人衆が嗅ぎつけるかしてくれればいいがと、みんな心の中で思つてはゐたものの、第一そのお役人衆が、てんで口ばしを入れる氣がないのですから、なんにもなりはしません。おまけにそのお仕置きが永の年月つづき、中には一生涯出してもらへぬ人もありました。ある人などは長いこと入れられてゐる間に、ついこんな歌を作つたほどでしたよ。——

蛇（くちなは）めが這ひよつて　目の玉を吸ひだすよ
さそりめが顔のうへに　毒を垂れながすよ

こんな小つぽけな歌の文句も、ひとり胸の中でつぶやいてみると、思はず身の毛がよだつのでした。

なかにはまた、ほんとの熊と一つ鎖につながれてゐる連中もありました。ほんの七分か八分の違ひで、熊の爪がその身にかからないだけの話だつたのです。

ただ一人アルカーヂイ・イリイーチの身にだけは、そんな責苦がふりかからずに濟みました。といふのは、戸口から一足跳びにわたしの小部屋へ飛び返るが早いか、あつといふ間もなくテーブルを振りあげざま、いきなり窓枠いつぱい叩き破つたのですが、それから一體どうなつたものか、あとは皆目おぼえがありません。……

なんだか足の方が冷え冷えするので、わたしはだんだん正氣づいて來ました。急いで兩足を引つこめた時の感じでは、わたしはどうやら狼か熊の毛皮外套にくるまつてゐるらしいのですが、あたりは綾目もわかぬ眞の闇、ただトロイカが威勢よく韋駄天ばしりに走つてゐるのがそれと分るばかりで、一體どこへ行くものやら見當がつきません。わたしのそばには二人の男が一かたまりになつて、廣い橇の中に坐つてゐるのですが、そのうちわたしをじつかり抱へてゐるのがアルカーヂイ・イリイーチで、もう一人の男は力いつぱい馬に鞭をくれてゐるのでした。……雪ぼこりは馬の蹄の下から渦まきかかつて來るし、橇も右へ左へ、今にも引つくり返りさうに傾ぐのです。もしわたしたちが床板にぢかに坐つてゐず、また互ひに手に手を取りあつてゐなかつたら、誰ひとり命はなかつたに違ひありません。

聞えるのは二人の心配さうな話しごゑばかりで、しよつちゆう何かを待ち構へてゐる樣子でしたが、――分つたのはただ、『追つかけて來るぞ、追つかけてくるぞ、急げ、急げ！』といふことばかりで、あとはさつぱり五里霧中でした。

アルカーヂイ・イリイーチは、わたしが正氣づきはじめたのを見ると、ぐいと屈みこんでかう言ふのです、――

「ねえ、可愛いリューブシカ！　おれたちには追手がかかつてるんだ……いよいよ駄目となつたら、一緒に死んでくれるかい？」

わたしは、それどころか喜んで死にます、と答へました。當時そこにはわたしたちの仲間が大ぜい、カミョンスキイの魔手をのがれて脫走してゐたのです。

あの人のめざす逃げ場所は、フルーシチュクといふトルコ人部落でした。當時そこにはわたし

と突然そのとき、わたしたちは氷の張つたどこかの小川を飛ぶやうに越して、行手には何やら

人家のやうなものが、薄ぼんやりと見えてき、犬が吠えだしましたが、駅者は一層はげしく馬に鞭をくれたかと思ふと、いきなり橇の片側へ身を横倒しにしたから堪りません、ぐいと橇がかしいだ拍子に、わたしはアルカーヂイもろとも雪の中へ投げ出されてしまひ、駅者も橇も三頭の馬も、あつと云ふまに見えなくなつてしまひました。

アルカーヂイが言ふには、

「心配することはちつともないんだよ、かうなるのが當然なのさ。何しろあの駅者は、とにかく乘せて來てくれはしたものの、こつちを向ふを知らず、向ふもこつちを知らないんだ。小判三枚でお前さんを運び出すのに一肌ぬいでくれたんだが、自分まで巻き添へになつちや堪らないからなあ。さあこれからは、おれたちの運否天賦だ。あすこに見えるのは痩雌鷲村なんだが、あの村には度胸のすわつた坊さんがゐて、命がけの婚禮に立會ひもすれば、おれたち仲間を大ぜい世話してくれもしたのだよ。あの坊さんにお賽錢を上げりや、夕方までおれたちを匿まつてくれて、婚禮もやつてくれるだらう。夕方になりや、またあの駅者がやつて來て、まんまと行方をくらますことができようといふものさ。」

わたしたちはその家の戸を叩いて、玄關へあがつて行きました。戸をあけてくれたのは當の坊さんで、これはずんぐりした年寄りで、前齒が一本かけてゐました。その奥さんといふお婆さんは、ふうふう火を起してくれました。わたしたちは、この御夫婦の足もとに身を投げました。

「おたすけ下さい、火にあたらせて夕方まで匿まつて下さい。」

神父さんが、かう聞きます、——

「愛兒(まなご)たちよ、あんたがたは一體どういふお人かな？　物盜りかな、それとも只の逐電なのかな？」

アルカーヂイがそれに答へて、——

「わたしどもは何ひとつ物を盜つた覺えはありません。ただカミョンスキイ伯爵の魔手から逃げだして參つた者で、これからトルコ人部落のフルーシチュクへ行くつもりです。あすこにはわたしどもの仲間が大ぜい住んでをりますからね。追手に見つかる心配はありませんし、お金もたしかに自分のを持つてゐます。一晩泊めて下されば金三枚を奉納いたします。お差支へなくば婚禮させて下されば金一枚をさし上げますし、婚禮させて下されルーシチュクへ行つてから一緒になりますが、それが駄目なら、フ坊さんはそれを遮つて、——